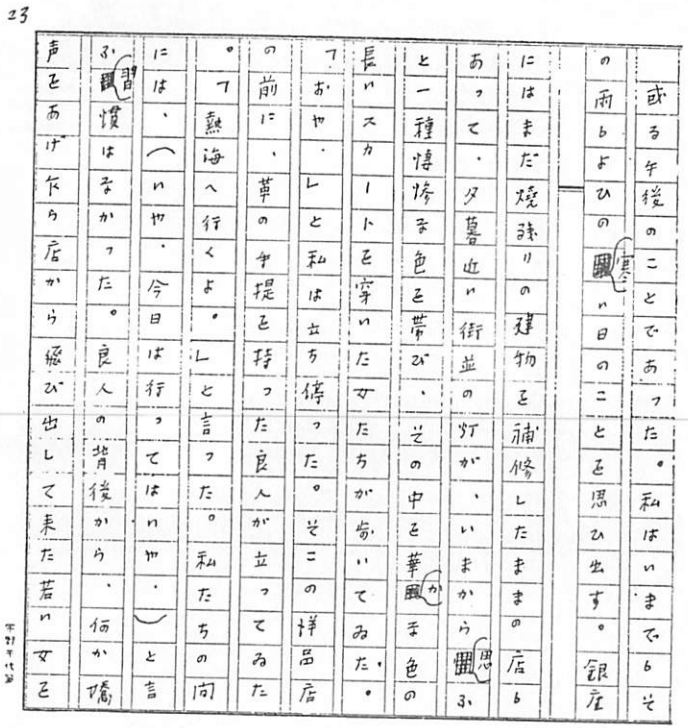
色ざんげ

○

どこから話したら好いかな、と暫く考へてから彼はゆつくりと語りはじめた。外国から帰つて間もなく蒲田に二階二間階下三間くらゐの小さな家を借りて、僕は二階、女房と子供は階下とまるで別々の生活を始めた。もうその頃は別れ話もだいぶん進行してゐてただ具体的な問題の片附くのを待つてゐるといふだけだつた。何しろ僕は十年振りに見る日本の女がきれいできれいで眼がさめると家を飛びだし街をほつき歩いたり夜はおそくまでダンスホールやカフエーを漁り歩いたりして帰つて来るといふ風で幾日も女房の顔を見ないことの方が多かつた。或る夜のこと帰つて見ると机の上に女文字の手紙が一通のせてある。高尾と署名してあるから高尾何子とでもいふ女だらうと思つてあけて見るとさうではなくて中には小牧高尾とちやんと書いてある。いかにも高尾といふやうな男名前に適はしい女の書いた手紙らしく達者な筆つきで二枚ほどの用箋に何か訳の分らぬ詩のやうなものの書いてある後に、自分の家は千駄ケ谷の徳川さんの邸の近くだからぜひ一度遊びに来て呉れと書いてある。恋文といふにはひどくあつさりした抽象的な恋文だし、僕はそのまま読み捨てて眠つて了つたのだが、その翌日も帰つて見ると同じやうな手紙が机の上にのせてあつて、今度は詩のあとに返事がほしいと書いてある。翌日もその翌日も同じやうな封筒がのせてあつたが、僕はもう披いて見る気もなくそのままにしておいた。そして一週間くらゐも根気よく手紙が続いてから或るときのこと、それまでの細長い封筒ではなくちよつと大型な西洋封筒に変つてゐるのを見て何気なく披いて見ると、手紙のほかにその女のだといふ若い女の写真が一枚入れてあつたが、女の背後には虎の皮の拡げてある椅子やピアノなども見えてなかなか中産階級的な長閑さだ。翌朝出がけに僕はそれを女房に見せて遣つた。「あら、お金持のお家らしいぢやあないの、あなたもう逢つてるんでしよ?」「冗談言ふな、向うから手紙を寄越したりする女に逢ふものかい。」「だけどちよつとくらゐ遊んで遣つたつて好いぢやあないの、きつとお金持よ。」女房はなかなか洒落れた口を利くが、写真の女はちやうどそれくらゐしか美しくなかつたのだ。そんなことがあつてから後も相変らず手紙は来る。別に気にとめてゐるとも思はなかつたのに僕は半分その女の根気のよさに呆れながら、ダンスホールでもカフエーでも女を摑へては訊いて見た。「君たちの中に小牧高尾つて言ふ女ゐる?」そんなことで僕も相当に手紙の女のことを気にする



やうになつてゐたのかも知れぬ。或る夜のこと家に帰つて来て、机の側にちやうどもう五寸くらゐの高さに積重ねてあるその手紙の中から出鱈目に一つ抜きとつて封をきつて見るともうそれには詩などは書いてなく、明日の夕方六時から六時半までのあひだ、千駄ヶ谷の駅の改札口で待つてゐるから来て呉れ、わたしは髪に紅い造花の薔薇の花を挿してゐる、とただそれだけの文面が三行ほどに書いてある。勿論僕は行きはしなかつたのだが、一体その次の日の手紙には何と書いてあるだらうと思ひながら次の日附のを披いて見ると、一字一句前のと同じ文句でわたしは髪に紅い造花の薔薇の花を挿してゐる、と書いてある。僕はちよつと面白くなつて今度はその前の日附のをあけて見るとやはり造花の薔薇の花をと書いてあつて、次のも次のもちやうどその晩届いたのも合せて十二三通ほどの手紙がみんな同じものなのには呆れて了つた。僕はそれでもつと以前のに遡つて最初の二三通のところまでみんな封をきつて見る気になつた。すると薔薇の花の前は凡そ七八通ばかりはどれにもあの虎の皮の上に腰をかけた写真が入れてあつて、それ以前のには訳の分らぬ詩が続いてゐる。僕はしばらくその夥しい文反古の中に坐つてゐる間にその女に対して異常な興味を感じはじめてゐる自分に気がついた。明日の夕方は行つてやらうとそのときさう思ひついた。

翌くる日の夕方、千駄ヶ谷の駅へ下りたのは六時二十分すぎくらゐであつた。フォームの階段を半分も下りたと思ふと、そこの改札口のところに背丈のたつぷりした若い女が真直ぐにこつちを向いて立つてゐるのが見える。この頃よく雑誌などの写真で見るフェリシタ夫人のしてゐるやうな工合に、長い髪の毛を編んでゆるく額の上に捲きつけそれに紅い造花の薔薇の花を挿してゐるのが、ちやうど夏の日のことだから六時すぎと言つてもまだ昼のやうで外苑の方の明るい広場を背景にして却つて顔ははつきり分らぬけれども気のせゐか写真よりも若くいきいきした女のやうに思はれる。側まで来ると、女はきらりと光るやうな眼をあげてまともに僕の顔を見た。僕はわざとゆつくりした足どりでそのまま広場を左手へ人力車の溜りの横を馬道に沿うて曲つて行つたが、何となく背後から迫つて来るやうなその女の眼が感じられる。こんなときはなかなか「あなたは小牧さんですね、」などと言へるものではないと見える。僕は女の眼の届かぬところまで歩いて行つてからちよつと立留つた。そしてそこの並木の繁みを透して駅の方を振返ると、女はまたもとの姿勢に戻つて後向きに立つてゐる。やはり僕とは気づかなかつたのかなと僕はさう思ひながら暫くそこに立つて見てゐると、軈てくるりと向きをかへて真直ぐに徳川さんの邸の方へ歩き出した。多分きつかりと六時三十分になつたからなのだらうと思ふが、いかにも機械的な動作で未練げもなくさつさと引上げて了ふのだ。僕はしばらく間をおいてから女のあとをつけた。駅から一町くらゐのところを右に折れた角邸の徳川さんの家よりもも

つと厳しい石門のある中へ消えて行く。門札には「小牧與四郎」と出してあつて、古びた薔薇の植込がとんねるのやうになつて奥庭に続いてゐる。女の草履の音がまだその奥で聴えるやうなのを僕はちよつと度胆を抜かれたやうな気持でそこに立つて耳をすましてゐたが、やがて八幡社の方の通りに近いところに一軒の米屋を見出してその親爺に訊いて見ると、そこは小牧與四郎と言ふ三菱の重役の家で、主人の與四郎は中国や台湾などに旅行してゐることが多く、留守中はこの間まで華族女学校に行つてゐた一人娘のお嬢さんがゐるきりだとそんなことまで話して呉れた。そのお嬢さんといふのがあの女なのだらうかと僕は何となく猟奇的な興味に駆られながら、しかしさつき改札口のところでちらりと見た女の大柄な厳つい体つきや僕の方を見たときの光るやうな眼つきなどを思ひ合して恋を感じると言ふのには少しの感傷も柔かさもない女のやうな気がしたが、それにしてもこの頃のやうに夜となく昼となくカフエーダンス場などに入りびたつてそんなところの女たちとばかり遊んでゐる僕にとつては何か新鮮で風変りな相手のやうに思はれた。その日はそのまま、もう街へも遊びに廻らずに家へ帰つて来るとやはり机の上には紅い薔薇の花をといふ手紙が置いてある。そこで翌くる日は少し早目に家を出て床屋に行き途中で靴を磨かせたりして千駄ヶ谷のプラットフォームに降りると、女は昨日と同じところに同じ姿勢で真直ぐに立つてゐる。僕の姿を認めたと思ふと一種の確信のある足どりでつかつかと近づいた。「湯浅さんでせう？やつぱり湯浅さんですわね、」さうだと答へると、「あなた昨日もここへいらしたでせう？」と言ふ。何だか正直に答へたくなかつたので、いや、いまここへ来たのが始めてだと言つた。「そんなことないわ、でもあんなに急いで行つてお了ひになつたからひよつと違つた方かと思つたけど、」「ぢやああなたは毎日ここで待つてゐたんですか？」「ええさうよ。だつてあなたはきつといらつしやるに極つてるんですもの、」女はさきに立つて歩き出した。僕はそのあとを追ひ乍ら女のよく発育した手足や血色の好い頬を見た。「どういふ訳であんなに毎日手紙を寄越したんです？」「そんなこと訊くもんぢやないわ。もしあなたが来なかつたらこれからさき三月でも三年でも続けて出す積りだつたの、何でも思つてることを途中で止したことなんかないのよ、あたし、」女は昨日の石の門の前で僕を振返つた。「ちよつと寄つてらつしやらない？」僕は女の後から薔薇の繁みのとんねるを潜つて裏庭の方にある離れの洋館へ上つて行つた。部屋の中はもう少し暗かつた。女は低いスタンドの紐をひいた。するとその仄かな明りの中にあの写真にあつたピアノや虎の皮のかけてある椅子が見え、それから壁にピンで留めてある新聞からの切抜きらしい僕の写真なども見える。「お酒のむでせう？」女は僕に何かの洋酒をすすめた。間近に見る女の顔は女といふよりもまるで子供のやうな稚げな表情をもつて、その子供らしさのために恐れを知

らぬといふ風に見える。「どうして僕に逢ひたいなどと思ひついたのです?」「まだそれを訊きたいの?」女はちよつと笑つた。「あなたが好きだからよ。あたしあなたを愛してるの、」「愛してる、」僕は笑つた。「愛してるつてあなたはこれまでに恋愛なんかしたことあるの?」「あるわ。あたし一とう最初はうちの家庭教師を愛してたのよ。でも直きにそんなことをしてるのが馬鹿らしくなつたの。馬鹿らしいと思つたらその日に、自分であたしその男を誘にしたわ。」さつきからもうだいぶん時間が経つけれども誰もこの部屋に来るものはないし、母屋の方からも物音が聴えない。「ぢやあどうして僕のことを好きだと思つたの?」「あなたに汽車で逢つたからよ、」みんな話して了ふわと言つて女の語り出したところによると、彼女は僕が日本へ着いた日に神戸から東京まで乗つた汽車の中で僕と一緒になつた。台湾から帰つて来るその父を大阪で待合せてやがて食堂車で少しやすんだりして座席に戻つて来ると、すぐあとからやつて来た僕が彼女の食堂車に置き忘れて来た扇をこれはあなたのでせうと言つてその父に渡したのだと言ふ。さう聴けばそのときのことを思ひ出すやうだけれども、彼女だつたのだらうかと思はれるその少女は紺色の水兵服か何かを着て絶えずうつむいて編物をしてゐたやうだつたので僕にはまるで覚えがなく、却つてその側に坐つてゐた白髪の老紳士の脂ぎつた額や鋭い眼ざしの中に彼女のそれに似通つたものがあつたかと思はれる。その夜汽車が東京駅に着いて家族や友達などに迎へられ新聞社の写真班に囲まれてゐる僕を見てあれは何者であらうかと翌朝の新聞をたのしみに披いて見て僕が外国にながい間ゐた湯浅譲二といふ洋画家で蒲田の留守宅に落着いたと言ふことを知つたけれども、しかし家に父の留つてゐる間は何をすることも出来ない。「あたしとても上手に二人の人間になれるのよ。パパのゐる間はそれはおとなしいお嬢さん、パパがゐなくなると手のつけられない不良少女になつちまふの、」いつでも両側に女中が一人づつついてゐて自動車の窓から外へ眼をやることも禁じられてゐるやうなお嬢さんもやるのだけれども、不良少女の役の方がもつと上手にやれる。早くまた父が台湾へ行つて了へば好いとそれでも二十日くらゐも待つたのち、やつと或る日のこと父を東京駅へ送り出して了ふとその足ですぐに蒲田の警察署へ行つて僕の新しい住所と家族とについて調べて貰つてから、人力車に乗つて僕の家の前まで行つて見た。もう少しで這入らうと思つたけれども思ひ直して引返し、それからは毎日のやうにあの手紙を書いたのだと言ふ。「ぢやあ僕におくさんや子供のあることも知つてるんですね?」「そんなこと」と女はそのうすい唇を反すやうにして言つた。「そんなことはだつてあなたのことぢやないの、何でもありやしないわ。どんなおくさんだか知らないけど、でもそんなおくさんなんかよりあたしの方が好いにきまつてるわ、」「どうしてきまつてるんです?」「きまつてるわ、」独り言のやうに繰返して

からちらりと眼をあげて僕を見た。「あなたみたいなひとがあんなお家にゐて画を描いてゐるなんて、」さう言つてちよつとの間口を噤んでゐる女の横顔を見てゐる中に彼女の言はうとしてゐることが僕には判るやうな気がした。この華族女学校のお嬢さんはいくらか僕の暮し向きについて僕を憐んでゐるらしく、さうでなければ案じてゐるらしい。僕はちよつと、小さな子供にをぢさんは馬鹿だねと言はれたときくらゐに機嫌を悪くした。その機嫌の悪さを隠さうとするためのやうに僕はそつと女の手をとつた。「駄目よ、触つちや駄目、」とび上るやうにして女は部屋の隅の方へ体をにじらせてから、そこからじつと眼をすゑて僕の方を見た。僕はしかし女を追つては行かなかつた。やがてあんまりおそくなるからと言つてそこを出ると、女もつづいて言つた。

翌日になるとしかし僕はもう出掛けて行く気がなくなつてゐた。恋をする相手といふにはあんまり衛生的な体つきと率直な性格とをもつてゐる彼女はほんの少しの感傷しか僕の心に残さなかつたやうなのだ。それにほんたうのことを言ふと僕にはまだいくらかあの「面喰ひ」の気持が残つてゐて、さう美人といふほどではない彼女をむきになつて追ひ求めようとはしなかつた。その中にだんだんと日が経つて僕は自分の仕事の一つである秋の展覧会に出品するための制作が忙しくなつて来る。「こんなに情熱に燃えてゐる女をそのままにしておくなんて罪悪だ。」と書いたり、「逢ひに来てくれなければ何をするか分らぬ。」と書いたりした女の手紙が相変らず毎日のやうに来てゐたが、或る夕方僕は珍しく自分の家の二階で声楽家の亀井雄二郎や画家の園田修吉などと一緒になつて女房の給仕をうけながらビールをのんでゐると階下で誰かを呼んでゐるやうな子供の声が聴える。すぐ降りて行つた女房が階段のところから僕を呼んだ。「あの女よ、あの女があなたを呼んでくれつて言つてるのよ。」近所の八百屋の門さきまで来てそこの子供を呼び出しの使ひに寄越したのだと言ひながら、さう言つてゐる女房の白粉をつけた白い顔は固く硬つたやうな表情になつてゐる。いつだつたか写真を見たときには、ちよつとくらゐ遊んでやつたつて好いぢやないのなどと利いた風なことを言つてゐた癖に、と思ひ乍ら僕はまた何か言つたりするのが面倒だつたので大きな声をして言つた。「構ふことはないぢやないか、誰を待つてゐようと待つのは向うの勝手ぢやないか、」「だつて図々しいつたらないんですもの。さんざんへんな手紙をよこしといて、今度は呼び出しに来るなんて、」「どうしたんです?」音楽家の亀井が鹿爪らしい顔をして訊くと、女房はそのままそこへぺたりと坐つて、さも憎さげな調子をもつて客に女のことを話した。「しかし君、そんなのをいつまでも放つとくのは不可ないよ。興味がないんならないつてはつきり君の口から断つてやるのがほんたうだよ。」「断つたつて同じなんだよ。」や

がて三十分もたつと思ふと今度は表から近所の俥屋の親爺がやつて来て、ちよつとそこまで僕に来てくれと言ふ。あとで行くからとさう言つて俥屋を帰してやると、亀井は真顔で僕の方へ向いた。「あんなところで待たしとくなんて不可ないよ。おくさんも僕らもかうして坐つてるんだからその前ではつきり言つてやつたら好いぢやないか。さうし給へ。」真面目な気持といふよりは見物人のおせつかいな気持からであらうと思ふが亀井は自分で俥屋の前に待つてゐると言ふ女を呼びに起つて行つた。間もなく亀井と一緒に女がやつて来た。僕らの晩餐は何だか会議でもひらいてゐるやうに固くなる。その中でも女房は一番遠くの方から明らかに敵意を見せた構へをもつて女の顔を見詰めてゐる。「いまも話したのですが、」亀井はさう女に言つた。「あなたのやうな若いお嬢さんが湯浅君のやうな男に夢中になるといふのはどうですかな。」「どういふ意味ですの？」女は詰問するやうに亀井の顔を見た。「いや、どういふ意味と言つてしかし、湯浅君にはおくさんもあるし子供もあるし、」「知つてますわそんなこと。でもそんなことはあたしに何にも関係のないことですもの。」「まあ、何ですつて、」女房はかつとなつたやうな声を立てて言つた。「まあおくさん、僕に任せといて下さい。ねえ小牧さん、僕の言つてることはたいへん常識的なことかも知れませんが、どうせ駄目なことにきまつてるのに」「きまつてなんかゐないわ。」いまの彼女にとつてどうすることも出来ないのは僕を好きだといふ彼女の気持だけだ。さう言つてゐる女の様子は、側に僕の女房のゐることなど猫の仔のゐるほどにも思はぬらしい。亀井は「ふうむ」と呻るやうな声を立てた。さういふ有様の亀井もそれから女房も何だかそはそはと狼狽てゐて、この席で落着いてゐるのは彼女ひとりのやうにも見える。「失礼ですが、今夜は僕がお宅までお送りしませう。決して悪いやうにはしませんから、」やがて亀井はそんなことを言つて女をつれて出て行つた。そのひよろひよろと高い後姿が隣りの生垣の向うに消えるのを二階の手摺によりかかつて見送つてゐた女房は、いらいらして言つた。「何て甘い男ばかり揃つてるんでせう。」

翌日ひる過ぎにまた亀井がやつて来た。「君は馬鹿だよ。」僕の顔を見るとすぐにさう言つて「小牧與四郎と言ふのは君あの有名な三菱の小牧與四郎なんだぜ。こんな幸運をみすみす逃がして了ふなんて馬鹿だよ。それにあのお嬢さんはちよつと好いぢやないか、あんなにはつきりしてる女の子つてないぜ、」「はつきりし過ぎてて、気違ひなんだよ、」「しかしあの気違ひぶりは面白いぢやないか。ちよつと下賤な女の子の持つてない味だぜ、」亀井は無暗に感心して見せてからちよつと声を落して、実はゆうべ一緒に家まで送つてゆく途中で今日君を女の家まで連れて行く約束をして了つた。悪いやうにはしないから是非俺の顔を立ててろと言ふ。「がみがみ言ふな、行つてやるよ。」いつの間にか亀井の仲人口にのつて見る気になつた僕は日の暮れるのを待つて一緒に家を出た。女の家の前まで来ると亀井はさきに立つて表玄関から案内を乞うた。古風な装飾をした広い応接間で暫く待つてゐると軈て扉があいていつものやうににこりともしない顔のまま小牧高尾が現れた。「亀井さん、もうあなたのご用はこれですんでよ、」這入るときなり僕の方も見ないで亀井に言ふ。そこへ女中がアイスクリームか何か運んで来たので亀井は急いでそれをとつた。「しかしこれをたべる間くらゐここにゐたつて好いでせう。」亀井はいつの間にか彼女に対してとることにきめてゐたらしい道化者の態度をもつてさう言ひ乍らそこそこに僕を残して辞し去つた。ちよつとの間だまつてゐた女は、これからちよつとそこまで一緒につきあつてくれないかと言ふ。銀座へ出て茶でも喫まうかと僕も思つたので出かけようと答へると、そこへ女中がまた茶菓を運んで来た。「さつきのこと、よくつて？」女はそんなことを訊く。「はい、お車ももう参つてをりますけど、」裏木戸をあけたところに一台の大型な自動車が待つてゐた。僕は女と列んで腰を下しながら、「ママは？」と訊いて見た。亀井の話によると彼女の母はその父のゐない間この留守宅に残つてゐる筈だといふのに、と思ひ乍らしかし僕はそんなことなぞ少しも気にしてはゐなかつたのだけれども、女はちらりと冷い眼をして僕の方を見た。「ママにはママの娯しみがあるわよ、」あとで分つたことであるが、この高慢な不良少女のお手本はみなその母の行動によつたものであるらしく、

僕はその夜、三十二にもなつた男である僕がこの十八の少女にホテルへ連れ込まれたのであつたが、そのホテルといふのは彼女の母の用ひ馴れてゐた恋の宿であつたらしく、さきがた女中に念を押してゐたこともその用意のことであつたのだ。自動車は暗い街を走り過ぎる。ぽつりと窓に雨滴が落ちたと思ふと、ざあと音を立ててすさまじい雨になつた。僕はそれとなくその雨の中を掠める灯りによつていまどこを走つてゐるところなのか知らうと思つたが、十年前の東京の街に対する僕のおぼろげな記憶は忽ち豪雨の中にもみ消されて了つて方角さへ分らない。僕はしかし女にもまた運転手にも一体どこへ行くところなのかなどと訊かうとは思はなかつた。どこへでも行くところへ行つてやらうとそんな興味もあつて、僕は女の何となくものものしい感じでおしだまつてゐる有様を滑稽なものに思つたのだ。やがて車がとまると暗い木立の奥から白い服を着た男が走つて来て女に傘をさしかけた。そこはホテルなのだ。僕はまだ或ひはそこで夕飯を喰べようと言ふのであらうかとそんな風に思つたのであつたが、女は落着いたものごしでボーイたちの慇懃な目礼の中をロビーを抜けて暗い廊下の方へゆつくりと歩いて行く、すると背後から一人のボーイが追ひかけて来て女の手に部屋の鍵を渡すのだ。女はとある部屋の扉をあけた。すぐあとから僕が続いて這入るとがちやりと扉に鍵をかけた。「驚いたな、」僕はさう言つた。「あなたのしてることはそれは男のすることですよ。僕があな

たにすることですよ、」「さうよ。」女はまだいま鍵を下した扉のところに起つて肩で呼吸をしてゐた。「今日はそれをあたしがするのよ、こんな場合に男がすることをあたしがするんだわ、」女の眼は何か敵意のある光りで燃えてゐるやうなのだ。ちよつとの間僕の立ちすくんでゐるひまに女はベッドの側に近づいて、着てゐたうすい紅色の着物をぬぎはじめた。帯をとると、するりと着物が床におちる。一糸も纏はぬ裸体は、びつくりするほど艶かしかつた。着物を着てゐるときの女を見てゐては夢にも想像の出来ない、その白い肌の柔かさは手を触れたらそのまゝまつはりついて離れないのではあるまいかと思はれるほどだつた。恐らく女はこのことを充分に知つてゐるのであらう。そして恐らく着物を脱いだ彼女はどんな男の心をもとらへることが出来るに違ひないと言ふことを。僕は半ば呆然として、ふいに燃え上つて来る喰べ物を見せられたときの動物のやうな自分の心と闘つた。不思議なことであるが、これに似たほかのどんな場合にでも画家である僕の本能は女の美しい肉体をそのまま自分のものにしたいと思つたことはなかつた。それだのに、この女の体はほかのどんな欲望も自制も押し殺して了ふほど僕の心を圧倒した。不覚にも僕はこのとき、いつか女が話したことのある女とその家庭教師との恋を妄想したのだつた。「何をぼんやりしてるの？　あなたはそんな意気地なしなの？」女の声が鞭のやうに僕の頬を打つた。僕は息をのんでゐた。何と言ふことを言はれた男が何をするか、この女は知つてゐるのだらうか、と思はず僕は荒い気持になつて女の体を抱き上げると、ベッドの上へ叩きつけるやうにして転がした。ぐさつと音がしたやうだつた。女は肩で息をし乍ら眼を大きく瞠いたまま、さあ、どうするのよ、とでも言ふやうにぢつと僕を見詰めてゐた。僕はもう獣になつてゐた。片手をふいに女の胴に廻すと、柔かいその乳房の間に顔を埋めた。あ、と女は短い叫び声を立てた。僕は動かなかつた。もし僕が声を立てることが出来たならばこんなことを言ふ積りであつた。「どうするか見てゐろ。夜があけたらもうお前の体はなくなつてゐるだらう。」ふいに女は身悶えして両手で僕の体を突き上げようとした。そして狂気のやうになつて僕の腕と言はず胸と言はずところ嫌はず歯を立てた。何といふことだ。さつきまでのあの人を馬鹿にした不良少女の挑戦とこの激しい抵抗とは何を意味するのであらうか。僕は女のなすに任せ乍ら少しも手を離さうとはしなかつた。突然、女が首をがくつと後に落して眼を閉ぢた。見るとその蒼ざめた唇から細い一条の赤い血の線がたれてゐるではないか。「小牧さん、小牧さん、」僕は女の肩をゆすぶり乍ら呼んだ。どれくらゐ時間が経つたのか分らなかつた。カーテンの隙間から白い夜明の光りがさして来た。僕もまた綿のやうに疲れてゐた。そのままそこに突つ伏して、眠りこけて了つたのであつた。眼がさめたのは翌朝のもう午近い時刻であつた。女はまだ死んだやうになつて眠つてゐる。二三度呼んで見たがなかなか眼を醒ましさうにもなかつた。気がついて見ると僕の着てゐた白シャツはところどころひき裂け、頬にも腕にも爪でかかれた痕があつた。ふいに僕は女が眼をさますのを惧れるやうな気持を感じて、急いで身支度をしてホテルのそとへ出た。灼けつくやうな七月の太陽の中にかつと毒々しく咲きはびこつてゐる前庭のあぢさゐの花のところまで来ると僕は危ふく眩暈がしてそのまま倒れさうになつた。

○

そのことがあつてから僕はときどき小牧高尾のことを考へてゐることがあつた。また呼出しの手紙をよこすだらうとそれとなく待つてゐたが、一日二日と待つても何とも言つて来ない。前にはあんなに一日も欠かさずによこしてゐた手紙が来なくなるといふのは可笑しいけれどもしかし今日は来てるだらうなどと夜更けて家へ帰つて来る途中でも考へるのであつたが帰つて見るとやはり何にも来てはゐなかつた。やがて五六日も経つた或る日のこと、女房が一枚の名刺を持つて二階へ上つて来て、見知らぬ男が僕に逢ひに来てゐると言ふ。黒い詰襟の洋服を着た風体のあまりよくない男が玄関に坐つてゐる。僕の顔を見るとすぐに、「ちよつと小牧さんのお嬢さんにお目にかかりたいですが、」と言ふのである。そんな女はここには来てゐないと言ふと、いやほんのちよつとお目にかかるだけで好いんですとまるで僕が女の来てゐるのを隠してでもゐるやうなことを言ふ。「一体君は僕とそのお嬢さんと何か関り合ひでもあるといふのかね？」男はちよつと頬にうす笑ひを浮べた。そして大きな紙入のやうなものの中からもう一枚の大型の名刺をぬき出して僕の前へおいた。東邦秘密探偵社何某と書いてある。「実はこちらへ伺ふ前に御近所でもちよつと聴いて来たんですし、私も一二度お嬢さんがそのさきの停留場に立つておいでのところをお見受けしたこともあるのです。」と下手な鎌をかけたりする。「そんなら家の中を探して見て貰つても好いが、しかしここには僕と女房と子供がゐるだけですよ。」もしほんたうにあの女が来てゐるとしても僕は平気でかう言へる。こんな男の言ふことなどはどうでも宜かつたが、またあの女が何をしでかしたのであらうとそれが知りたかつたので、「だが、そのお嬢さんといふのは家出をしたのですね。」と訊くと、何を白つぱくれるのかといふ積りであらう胡散くささうな顔つきで、「一週間くらゐ前にね。しかし湯浅さん、あなたはあの晩、望海ホテルへ御一緒にいらしてからどうだつたのです？」「望海ホテル？」僕は平気でとぼけた。「そんなところへ行つたことになつてるんですね、何だつてまた僕が行つたことになるんです？」男の言ふところによると、女のゐなくなつたあとその部屋を調べて見ると、僕の写真の切り抜が床に落ちてゐた。女中の証言によつて女が男のつれと一緒に車にのつて出かけたといふことが分つたから、車を調べ

てその運転手に僕の写真を見せると、確かにこの方だと言ふし、それからホテルへ行つてボーイに訊いて見てもこの方に違ひないと言ふ。「ちやんと種が上つてなきやなかなか斯うやつては来られませんからね。」「不愉快な口の利き方をするね、君は。種とは何だい？」僕はわざと大きな声をして言つた。「何の権利があつて君はそんな刑事のやうな口の利き方をするんだ。そんな訊問に僕は一言も答へる義務はないよ。そりやあの女は一ぺんここへ訪ねて来たことくらゐあるけれど、」さう言つてゐる間に僕はほんたうに腹を立ててゐるやうな気になつたのだ。男はしばらく考へ込んでゐる風であつたが、僕の語気の荒さにけおされたのかそれとも僕の言ふことをそのままほんたうだと思つたのか、ではやはり自分の見込み違ひであつたかな、と言つてやがて帰つて行つた。

あの女が家出をした。恐らくあの朝ホテルから家へ帰らずにそのままどこかへ行つて了つたものと思はれるが、それについて僕に幾何の責任があるとしても僕は平気だつた。汽車の中でちよつと男を見たからと言つてすぐその男に近づいて来る、そんな風な女の場合だ。どんな突飛な行動も悲劇的な結果を伴ひはすまいと思はれたので、僕は多寡をくくつたのだ。翌日、僕はひとりでヴァイオリンか何かの演奏を聴きに帝劇へ出かけて行つた。廊下へ出て煙草を吸つてゐると、若い令嬢風の女が二人僕に近づいて、「失礼ですけれど湯浅さんではいらつしやいません？」といふ。二人とも小牧高尾の友だちだが、彼女のことについてちよつと話したいことがあるから、差支へなかつたら階上の喫茶店まで来てくれないかと言ふのだ。一人はそれほどでもなかつたが、もう一人の女のいま咲いたばかりの花のやうな生々とした美しさは僕の眼を囚へずにはおかなかつた。それは僕が日本へ帰つてから始めて見る美しさで街の女たちの決して持つてゐない清々しさがその言葉にも表情にも溢れてゐた。この女があの西条つゆ子なのだ。僕といふ男の一生を支配し、僕の運命をくつがへした、あのつゆ子なのだ。僕はもう決して小牧高尾のことについて昨日の朝あの秘密探偵の男に訊かれたときのやうにむきになつて否みはしなかつた。それどころか、彼女らと一緒になつて高尾の行方を探してくれないかと言はれたときもすすんでその仲間に加はらうと答へたほどであつた。「お母さまがお気の毒なんですの、」つゆ子はさう言つた。ちやうどあの晩やはり同じやうにどこかへ出かけてゐたといふ高尾の母は、その良人の留守中にこのやうな不始末があつたと分つたなら生きてはゐられないと言つて騒いでゐるとのことであつたが、僕はしかしそれについては少しの同感もしなかつた。僕の心は新しい興奮で一ぱいだつたのだ。こんな美しい女たちと一緒になつて女の行方を探すといふことは何といふ愉快なことか分らない。さう思つた僕は何か僕に用事のあるときは電報をくれるやうにと言ひおいて彼女らと別れた。三日ほど経つたある晩つゆ子から電報が来て、明日の朝の

六時に東京駅へ来てくれといふ。六時といふと夜があけて間もない頃ではないか。僕は殆んど眠らぬくらゐにして早く眼を醒し、東京駅へ馳けつけた。つゆ子はもう来てひとりで改札口のところに立つてゐたが僕の姿を見ると高く手をあげて二枚の青い切符を示した。「たうとう探偵が始りましたわ。」つゆ子はどんどんフォームの方へ歩き出し乍ら言つた。彼女の細い肩はぢきに僕の肩とすれすれくらゐの高さだつた。「居所が分つたんですか？」「えゝ。」つゆ子は黒い眼をちらりと流して僕の方を見た。「昨夜お母さまから電話がありましたの。逗子のホテルにゐるんですつて、」さういふ通知が探偵社から来たのだが、迎へに行くとしてもこの場合探偵社の男やそれから母親などが行つたのでは恐らくあの女の気持を昂らせるばかりであらう、却つて何も彼も話し合つてゐる間柄の仲の好い友だちであるつゆ子が行つてくれるならばと言ふことになつたのださうな。まだ早い汽車の中はすいてゐた。「僕まだ何も喰べてないんですよ。」僕はパンとコーヒーとで軽い食事をとりながら、この愉快な旅行が、あの女の行方を捜索するためだとは信じることが出来なかつた。涼しい朝の風が汽車の窓を掠める。つゆ子は快活な調子で話しかけた。「あなたのこと、もうずつとせんからお知合ひになつてるやうな気がしますわ、たいへんな評判だつたんですもの。小牧さんたら、会ふたびに話すのでは足りないで電話かけてよこしたりしてあなたのお噂なさるんですのよ。」「あの女のやりさうなことですね、」すつかりつゆ子に囚はれて了つてゐた僕は、あの女のことでつゆ子から詰らぬ誤解をうけたくないと思つたので、ここであの女との関係をはつきり説明して置きたかつたのだ。「風変りなお嬢さんといふ印象以外には何にもうけとりはしなかつたんです。ほんたうですよ。」「随分ね、ではこんなお役目、ご迷惑ぢやありません得るためには僕は何でも言つたことだらう。やがて汽車は着いて僕らは自動車でホテルへ向つた。こと？」「あなたと御一緒でなかつたらね。」つゆ子の意を

ホテルの帳場ではなかなか埒があかなかつた。宿泊人名簿に小牧高尾の名の見えないのは勿論偽名で投宿したのだらうと思はれたが、それについて彼女の風貌の特長を細かに説明して見ても事務員は容易に、「あゝ、あの方ですか、」とは言はなかつた。若い婦人の滞在客は六七人もあつて果してどの婦人がその小牧さんなのか分らぬと言ふのだ。僕らはちよつと困つた。「砂浜の方へ出てませう。いまに運動に出て来るかも分らない。」僕らは露台の側をぬけて海に面した広い芝生の方へ出た。「あそこにいらつしやるわ。」つゆ子は立留つて言つた。西洋人の子供らを相手にきやつきやつと声を立ててボール投げをしてゐるのだ。ワンピースの短い洋服を着て髪をお下げにしてゐる彼女はまるで子供のやうなのだ。僕らはちよつとの間呆気にとられて立つてゐた。これが行方不明になつたといふ彼女なのだ。しかし考へやうによつては如何にも彼女らしくもある。

「駄目よオ、そんな球、」犬ころのやうに球を追つて駆けて来た弾みに、ふいに眼をあげて僕らの姿を認めた。彼女の大きな眼はちよつとの間青いやうな色になつた。と思ふと持つてゐた球をぷいと投り出してそのままつゆ子と僕のゐる側を振向きもせずに通り過ぎてずんずん階段を上つて行つた。「どうなすつたんでしよ、」つゆ子は僕の方を見て言つた。「きつとあたしが御一緒に来たからよ、」「そんな馬鹿なことがあるもんですか、」僕らはすぐ彼女のあとを追つて行つた。一ぺん追ひかけることに決めると追ひつめるところまで行きたくなる。彼女は幾つも廊下を曲つて海に面してゐる側の一つの部屋の中へ這入つた。僕らも構はず扉をあけた。「あんたたちが来てるつてことはあたしちやんと分つてたわ。」暫くだまつてゐたのちに彼女は言つた。あんたたちといふへんにぞんざいな言葉の中に軽蔑の調子が感じられる。仮りにも彼女と同じベッドで一夜を明かしたことのある僕だし、またつゆ子も彼女と長い交りのある親友だといふのに、彼女の僕らを見詰めてゐる眼の中にはただ敵意と嫌悪があるだけのやうに見える。つゆ子はやつと低声で言つた。「だつて昨夜おそくきまつたのよ、それに湯浅さんはあたしがお願ひしてわざわざ来て頂いたんですのに、そんなことを言ふなんて失礼ぢやない?」「ちやんと分つてたわ。」彼女は強情な表情のまま繰り返した。そしてくるりと僕らに背を向けたと思ふと開け放たれた窓の方に向つて男の子のやうにひゆう! と口笛を吹いた。

「あたし、ちよつとの間そとにゐた方がいいでしよ?」つゆ子は小さい声で僕に言ふ。たぶん高尾の不機嫌を僕が彼女と一緒にやつて来たためだと解したらしいつゆ子は、僕のとめるのも聴かないでそとへ出て行つた。ひとりで残つた僕は仕方なく煙草に火をつけた。依然として高尾は僕に背を向けたまま、窓から海辺の方へ手をあげたりしてゐる。さつきまで遊んでゐた子供らに何か合図をしてゐるのかも知れないが、半分は僕をいやがらせる積りなのだ。僕はわざと声をかけた。「何だつてそんなに怒つてるんです? あの朝すぐにここへ来たんですね?」「あんなに侮辱されたんですもの、ほかの女だつたら自殺したわ。」彼女は始めて口をきつた。「侮辱? 僕があなたを侮辱したんですつて?」「あれ以上の侮辱があつて? ホテルへひとを置去りにするなんて、」「冗談ぢやない。あそこへ僕をつれ込んだのはあなたですよ。あなたはあの晩、さういふ言ひ方で僕に言ひましたよ。——それにあの朝だつて、あなたの想像してゐるやうに僕はあなたから逃げ出した訳ぢやありませんよ。あなたはいくら呼んでも起きないんだから、」嘘のやうな話だが、僕は自分の家をあけて女と一緒にそとで泊るやうなことはあまりしなかつた。女房のゐない外国の生活でも夜は必ず自分の宿へ帰つて来て眠る習慣だつた。単なる習慣に過ぎないのだが、あの朝、あのまま女の傍にずるずると眠つてゐたくなかつたのはその習慣のためもある。「それにあの日はどうしても手離せない仕事があつた

んだし、」と僕の言ひかけてゐる最中に、「小牧さん小牧さん、」と呼ぶ声がして、一人のまだ中学生のやうな若い男が飛び込んだ。「支度が出来たから早く来ない? あ、お客さま?」「好いのよ。いま行くからちよつと待つてね、」言ひ捨てて間仕切りのカーテンの向うへ隠れたと思ふと、間もなく白いセーラーに着替へて出て来たが、僕の方には一瞥もくれないで一緒に手を繋いでそのまま大股に廊下へ駆け出して了つたのだ。さつきから窓に向いて口笛を吹いたり手をあげたりしてゐたのはきつとあの男へ何か合図をしてゐたのだらうと、やつと僕は気がついたが、あのスポーツシャツを着た子供のやうな男は一体何だらう。しかしまだ一言も肝腎の話をしない中に逃げられて了つた僕は階下の広間で待つてゐるつゆ子のところへ飛んで行つて一緒になつて二人のあとを追つて行つたが、もう砂浜のずつとさきの方まで駆け出して了つたあとでとても追つつけさうにはなかつた。僕らは芝生のところで立留つた。見ると岸に帆の赤いヨットが一艘つないであつて、忽ちの中に二人は水の中へ押し出して海へ出て了つた。ヨットは一ぱいに風をはらんで走つてゆく。暫くの間僕らは呆気にとられてその行方を見守つてゐるよりほかなかつた。「すつかり出し抜かれて了ひましたね、どうします? 帰つて来るまでここで頑張つてますか?」「さうね、」いかにも疲れた様子だつた。「あつちで少しやすんでても好いですね、」僕はつゆ子の背に手をやるやうにしてテラスへ帰つてゆくとそこの椅子にかけさせた。晴れた空の下にどこまでも青い海が続いてゐる。一望のもとに湘南の海が見えるのだが、その青いグラウンドを沖へ出たり戻つたりしてゐる赤いヨットの帆の動きは、思ひやうによつては僕らを愚弄してゐるやうでもある。しかし恐らくほんたうのところはただの他愛のない舟遊びだと思はれるが。「ナンセンスな風景ですね、」僕は明るい声で言つた。いつの間にか僕もさつきまでは高尾の家出を悲劇的なものとして考へてゐたやうだつたが、お蔭でこのまま笑つてすませさうでもある。それに、晴れた真夏の空の下で汐風に吹かれ乍ら美しい婦人と向ひ合つて話してゐる男にとつてはどんな事件についての観察もさう暗くはなり得ない。僕はだんだん愉快になつた。思ひなしかつゆ子も明るい顔つきで、「さつきまであんなにむきになつてたのが可笑しいやうですのね、あんまりのんきなんであたし、何だかがつかりしましたわ、」「しかし蔭であなたとお友達になれたんですからね、たびたび家出してくれると有難いんだが。」「ほほ——、でもあのヨット素敵ね、」「気を利かして、なかなか帰つて来さうもありませんね。どうです、少し早いけどお午食にしませんか、」一緒に食事をすませると僕らはしばらく近くの松林を散歩した。僕はもうあのヨットの行方などどうでも構はなかつた。僕の気持の中からはとうにそんなものはなくなつて、ただ愛し合つてゐる恋人と海岸のホテルへ来てゐるのだといふ仮想に変つてゐた。僕らはゆつくり歩いた。そしてや

つとホテルの近くに戻つたとき、まづつゆ子が顔をあげた。「帰つてますわ、」あの海に面した二階の窓に、シュミイズ一つになつて両手で数本のゴムを引張るあの何とかいふ運動をしきりにやつてゐる高尾の姿が見えた。僕らはもう前ほどに切迫した気持はなかつたが急いで階段を上つてノックもせずにその扉をあけた。高尾は振返つた。彼女のその服装の略式なことについても僕らはもう何の注意も払はなかつた。「随分ね。わざわざ東京から伺つたのにすつぽかしたりして、」つゆ子は穏かに咎めた。「お茶くらゐよんで下すつてもよかない?」「どうぞご随意に。それよりあんたがた、挨拶もしないでひとの部屋へ這入つて来るなんて失礼よ。」高尾の表情はやつぱり石のやうにこはばつて動かない。「本気なの? 高尾さん、」暫くしてつゆ子は言つた。「そんなに怒つたりするの、あなたの誤解よ。」「誤解ですつて? あんたがたのことをあたしが何とか思つてると思つて?」高尾のうすい唇にうす笑ひの影が浮んだ。すると間仕切りのカーテンの奥から朗らかな唄声が聴えて、さつき高尾と一緒に出かけた若い男がバスタオルで濡れた頭髪を拭き乍ら出て来た。恐らくいましがた沖から帰つたばかりで一風呂浴びたところだらう、はつと立留つて僕らに眼をとめる、と見る見る赧くなつた。「構はないのよ、保さん。紹介したげるからこつちいらつしやい、」命令するやうに言つて僕らにひき合せた。「安宅保さん。あたしの恋人よ、」あとで分つたことだけれども、この若い男は高尾がホテルに来て二日目に彼女と知り合つてそのまま彼女と起居をともにしてゐたのだつたが、彼女との恋愛事件が原因となつて自殺したといふことだ。慶応の普通部の生徒でまだやつと十八になつたばかりの女のやうに眼の美しい少年だつた。僕らは仕方なく挨拶した。しかしこの瞬間から僕らは全く無用な人物になつたやうなのだ。僕はやつと言つた。「ね、高尾さん、あなただつて僕たちがただ遊びにここへ来たんだとは思つてないでせう? どんな事情があるんだか知らないけれど、話さへついたらまたすぐ今夜にでもこつちへ引返して来ることにして、一応一緒に帰りませんか?」「いやよ。大体あたしを迎へに来るなんて無駄なことだわ。ママにそ言つてちやうだい、ママのためだの、お家のためだのそんなこともう沢山よ。帰りたくなつたら自分でさつさと帰るわよ、あたし、」さういふ彼女の声を聴いてゐる間に僕はふいに馬鹿馬鹿しくなつて来た。恐らく彼女は彼女の言ふ通りにしかしないだらう。「つゆ子さん、ちよつと、」僕はつゆ子を呼んで階下の事務室へ降りた。そして彼女と相談の上、東京の小牧家へ電話をかけて朝からの成行をすつかり話したのち、この分なら大したこともないと思ふから、彼女を残して一先づ引上げたいと思ふと知らせておいてから、そのまま東京へ引返すことにした。

○

そんなことがあつてから間もなく或る朝の新聞によつて僕は高尾の家の没落を知つたのだ。台湾銀行のパニック。その有力な取引筋に密接な関係を持つてゐた財界の風雲児小牧与四郎の没落。これは確かに好箇の三面記事であつた。好況の潮に乗つて有力な背景を控へ乍ら鉄と期米の思惑で一挙に巨万の富を積んだといふ高尾の父は、勢ひに乗じて手を拡げた各種の事業が、最近世界経済の反動的な不況の余波をうけて甚しい収拾困難に陥つた矢先、最後に銀行のパニックによる決定的な打撃のためにたうとう破産の申請をうける羽目になつたのだと報じてあつた。僕はしばらくの間その記事を前にして感慨に耽らない訳には行かなかつた。高尾はどうしたらうなどと思つてゐるところへ或る日逗子のホテルで会つた少年の兄になる人だと言ふ人品の卑しからぬ中年の紳士が僕を訪ねて来た。つかぬことを伺ふやうですが、と言つて話し出すところによると、あれから間もなく高尾はその日の中に引返して来るからと約束してホテルに少年を残したまま東京へ帰つたのであつたが、それきり戻つて来ないばかりか手紙も来ず電話さへも通じない有様でどこにゐるのか居処も分らぬ。始めて女から棄てられたことを知つた少年は、しかしなかなか思ひ諦めることが出来ず遺書を書いて劇薬を嚥まうとしてゐたところへ折よく行き合せて、そのまま東京の自分の家へ引取つたが、しかしこのままでは一ときも眼を離せぬ不安な有様だ。兄である自分にはどういふことのためにそんなにも思ひ詰めたものかと思はれるが、聞くところによるとあなたは、と僕をさして、高尾のことについてよく知つておいでとのこと、ぜひ弟のために彼女に逢ひその気持を訊いてやつてくれないかと言ふのだ。彼女のことについてはほんたうのところは僕もこりごりだといふ気持であつた。しかしこの兄といふ人の温和な資質や、あのホテルで見た少年のすぐにも頬を赧らめるやうな稚げな印象とが僕の心を動かした。とはいへ誰の眼にも明らかに幸福な結末を予想出来ないこの恋について何の助力をすることが出来ようか。僕は半ばに出てゐた小牧家の破産の記事をお読みになりましたでせうね、」「拝見しました。」紳士はどういふ訳かちよつと小腰を屈めた。「あれを拝見してと言つては失礼な申出になるかも知れませんが、もしあちらでこの際ただ約束だけでも取極めて下さるやうでしたら、」こんなことを自分で言ふのは可笑しいけれども田舎の家は四国でも相当知られた旧家である。高尾の将来の生活の保証くらゐ何とでもするはり高尾に話して見ようといふ気になつた。そして客とともに家を出るとすぐその足で千駄ケ谷の小牧の家へ行つて見たが、門は固く釘づけにされ標札のはがされたあとが白く残つてゐる。僕はいつかの夜高尾と一緒に車にのつたことのある裏口へ廻つてそこのくぐりをあけると、見覚えのある若い女中があたふたと出て来た。来意を告げると、高

尾もその母もここにはゐない、主人はずつと以前に旅行に出たきり帰つて来ないとのことで、家の中ではいま弁護士が来ていろいろと整理してゐるところだといふ。僕はしばらくそこに立つてゐた。「困つたな、」と低声で呟くと、以前の僕と高尾とのことについて何か思ひ過つたのであらうか、お嬢さまはひとりでここに住んでゐると言つて一枚の所書を僕に手渡した。小田原急行の参宮橋の駅の近くだといふので行つて見るとやつと一軒、踏切の堤の上に同じ番地の家を探し出したのであつたが、表には標札もなかつた。僕は二三度その家の前を往つたり来たりした。これがあの高尾の隠れ家であらうか。僕は柄にもなく感傷して二階を見上げ乍ら呼んだ。「小牧さん、小牧さん、」すると同じ棟になつてゐる隣家の勝手口があいて、そこのおかみさんらしい女が顔を出した。「いまし方郵便を出しにいらしたんですけど、何でしたら中にお這入りになつて待つてらつしやいまし。もうぢきお帰りになるでせう。」言はれるままに僕は格子戸をあけた。構はず靴を脱いであがつたが家の中には座蒲団ひとつおいてなくて台所の片隅に出前ものらしい洋食皿が喰べちらしたまま出してあるほかには茶碗ひとつ見えないのだ。僕はちよつとの間座敷のまん中に立つてゐた。この何もおいてない家の中に若い女がひとりで住んでゐられようか。僕はしかしまた二階へ上つて見た。そこにはあの見覚えのあるピアノと大型の緋の長椅子とが置いてある。そんな家の中にあつて始めて、それらはどんなに高価なものであつたかといふことが分るくらゐに、家の中の荒涼とした感じと甚しい対照をなしてゐた。高尾はなかなか帰つて来ない。僕はまた階下へ降りて玄関の柱に寄りかかり、長い間待つてゐた。やがて女のらしい跫音が聴えてがらりと玄関があいた。女はすぐに僕を認めた。そのまま凍りつくやうに僕の眼の上に留まつた女の視線の中に激しい動顚の色の渦巻くのを僕は見逃さなかつた。しかしそれはただの一瞬間でもなかつた。忽ちに憎悪と傷けられた自負心との燃え上る火のやうな眼に変つて、いまにも僕にとびかかつて来るかと思はれた。「ごめんなさい、お留守のところへ上つて、」思はず僕がさう言ふと、高尾は低い慄へる声で言つた。「こんなところまで来て、あたしのことを笑はうと言ふのでせう？　何だつてそんなにひとを追つかけ廻すの？　誰があんたなんぞにお這入んなさいつて言つて？」「いや、」僕はもう彼女の激しい言葉を惧れなかつた。「お隣りのおかみさんがさう言つたものだから、——僕が笑ふなんて何を言ふんです、」「出て下さい、出てつて下さい。」言ひ捨ててそのまま二階へ上つてゆく背後から、僕はどんどんついて上つて行つた。どういふ訳か僕はこんなに怒つてゐる高尾をちよつと好いなと思つた。どんな時の彼女よりもいまの彼女はきれいだつた。「出てつて下さいつてば、聞えないの？」高尾は上唇の右の方を微かに慄はせ乍ら僕をにらんだ。「何の用事で僕が来たんだか知つてますか？　安宅君が死にさうなんですよ、」安宅君といふ声を聴くと女の頬に、思ひがけなくふんと言ふやうな冷笑が浮んだのだ。僕はちよつとの間口を噤んで、その冷笑を見守つた。「ご苦労さま、」聞えないくらゐの声で女が言つた。僕はそれをどう解釈すべきかとちよつと躊躇した。恐らくこの言葉を彼女は、僕にとそれからあの少年とに言ふ積りなのだらう。僕はわざと言つた。「何ですつて？」「ご苦労さまと言つたのよ。ほつといて下さいな。」「しかしどうして行つてやらないんです？　僕らの目からみてもあんなに感じの好い青年だし、あなただつて好きだからああして一緒にゐてやつたりしたんぢやありませんか。」「さうよ。そしてもうそれはすんだのよ。」高尾は挑むやうな眼つきをして言つた。「海岸のホテルで、一週間ほど一緒に遊んだのよ。誰だつてさうするわ、砂浜を歩いてきれいな貝殻が落ちてれば誰だつてちよつとくらゐ拾つて見たくなるわ。でもそんなもの拾つたつて一町も歩いてる中にはうつかり捨てちやふわ。」さういふ言ひ方にも拘らず彼女の顔は剃刀のやうに蒼かつた。「どうしてそんなに、ひとの顔ばかり見てるのよ、あなたはさうしはしないと言へて？　ね、あなたはそんなもの拾はないと言へて？　かう言つたからつてあたし、あなたにからんでるんぢやないことよ。ただよけいなおせつかいをお断りしてるんだわ。」「しかしね、小牧さん。」僕はやつと言つた。彼女の論理の中には彼女一流の構へがある。この構への背後で彼女はいくつでも嘘を、その嘘のために自分を殺すことがあつたとしても平気で嘘を吐くだらう。さういふ彼女を憐れむ気持がふいに僕の気持の底に湧いたのだ。家もなくただピアノと赤い椅子とを持つてこんな家に隠れてゐる彼女が、前の彼女よりも一層王女さまのやうな口を利く。僕は注意深く彼女の表情を見守つた。そして最後の切札である例の話を始めた。「あなたのことを僕は利巧なお嬢さんだと思ふからぶちまけて言ひますよ。もしあなたの言つてるやうだとしてもね、ただきれいな貝殻だつたのだとしてもね、それはただの貝殻ぢやないんですよ。露骨な言葉で言ふと、中にどつさり真珠がくつついてゐるんですよ。安宅君の家の方ではあなたが約束さへきめてくれればあなたでもあなたの思ふやうにするつて言つてるんです。何つぱりさうなのね、」低い刺すやうな調子で僕を遮つた。「やつぱりあたしを嗤ひに来たのね。さぞ困つてるだらうから喜ばせてやらうといふご親切なのでしよ。馬鹿だわ、あなたは、」突然僕は何か彼女に対して意地悪な気持になるのを感じた。始めて彼女に逢つた夜、彼女が僕に言つたあの言葉を思ひ出したのだ。あんなお家にゐて画を描いてしになるなんて、彼女はさう言ふ言葉をもつて僕に彼女と仲よくなることの得策について話したことがある。何を言つてゐるのだらう。平気でそんなことを人に言へる彼女が今の僕の言葉を言葉以上の悪意をもつて解釈するといふことがあるだらうか。僕はむかむかして言つた。「ではずつと

前あなたは、僕の生活を保証しようなどと言つたことがあるのを覚えてますか？　あれも僕を嗤つたのですね、」「ええさうよ、お金のある人がない人を嗤ふのはあたり前だわ。さあ降りてつて、あなたなんぞに平気で嗤はせちやおかないわ。」「喧嘩ですね、僕は平気で負けますよ、」そとへ出るともう夕暮に近かつた。僕は急いで五六間歩いたが、ふと、あの家の二階に残つて高尾は恐らくひとりで畳の上に体を投げ出して泣いてゐるのではあるまいかと思つたのであつた。しかしそれも同じことだ。そしてものを考へ乍ら歩いてゐた僕の心はいつの間にかつゆ子に逢ひたいといふ気持で一ぱいになつてゐた。逗子のことがあつてから僕とつゆ子とは二度くらゐ逢つてゐたが、急速に親しさが増してゐた。僕は駅の前の赤い自働電話の箱に馳け込んで彼女を呼び出すと、高尾のことについて話したいことがあるからすぐ銀座のエスキーモまで来てくれないかと言つた。僕の心はもう、高尾の倨傲な涙など何ほどのものでもなかつた。

○

エスキーモで待つてゐると間もなくつゆ子がやつて来た。髪をお下げにして白い羅の着物を着てゐる彼女はほのかな街の灯かげでは夕顔の花のやうである。彼女の這入つて来るのに気づいたのと同時に僕はそのお下げを見たのであつたが、それはいつか、彼女の家の近くまで逢ひに行つたとき彼女はそつと裏庭から駆け出して来たのでただ洗ひ髪を束ねたままのそのお下げがいかにもさつぱりと清げに見えて彼女の姿に似つかはしかつたので、あなたにはその髪が一番いいと思はず言つたことがあつたのだ。その僕の言葉を憶えてゐてくれたのかとそんなことにまで僕は夢中になつて喜びながら彼女を迎へた。「よく来てくれましたね、」僕は彼女に会へた喜びで心を一ぱいにさせながら、まるでほかのことを、安宅少年の兄に高尾のことを頼まれた話をしていま高尾のところへ行つてけんもほろろに追ひ出されたところだと話した。僕とつゆ子との間では話はいつまでも高尾のことばかりであつたが、しかしどんなことについて話し合つてゐてもみな同じことであつた。僕はつゆ子の眼と唇を見、それから少し汗ばんでゐる白い額を見てゐた。それからハンカチを持つてゐる細い手を見てゐた。「毬のやうに僕は表へとび出して了つたんです。」「はじめから駄目なこと分つてますわ、」つゆ子は笑ひながら言つた。彼女の言葉によると、小牧の家が没落してしまつたいまではどのやうな縁談も高尾の心を傷けることにしか役立つまい。もしたとひ高尾の言つてゐることは全部嘘であつて高尾はあの少年を心の底から愛してゐるのであつてもやはり同じ言葉をもつて僕の言葉を斥けたであらうと言ふのであつた。「あたしにそ言つて下すつたらそんなお使ひ、させなかつたわ、」と言ふのだ。「馬鹿を見ましたね、しかしあの女はああして結婚もしないで一体どうする気なのかな、」「生活のこと？　なら大丈夫よ、」つゆ子の話に依ると、以前から今日あるを予知してゐた高尾の父は、高尾とその母とに一通りの財産は分け残しておいた筈で、直接生活の上では変化があつたとしても今日すぐに暮しに困るといふやうなことはあるまい。それに高尾の父といふ人は実業家には稀しく学殖深く徳望を備へた人格者で、財界に見切りをつけられなかつた学者としての生涯に入るために上海の育英書院の教授として赴任して行つたのであつたが、もともと貧家に生れて主筋にあたる高尾の母の許に入婿して来てゐたのだとのことで、もうずつと以前父が小牧家に来た始めの時からこの夫婦はあまり情愛ゆたかな家庭生活を営むことが出来なかつたらしく、父は父、母は母といつでも別々の生活であつた。母は稚い頃から何派とかいふ歌沢の稽古を積み、隠れたる名取りとして歌舞伎役者などと交りがあつて最近は千駄ヶ谷の本邸のほかに赤坂の今井町に別宅があつて父の旅行中は殆んどその別宅で稚ない頃からの稽古友だちである何某とかいふ役者と一緒に暮してゐるのであるから、いま小牧家の没落は却つて三人三様の生活をそれらしくきめて了ひあながち不幸とばかり言つて了へないところがあるといふのであつた。つゆ子の話す通りであるとすれば恐らく高尾のこれからさきの生活もいま僕らの想像するほど惨めなものではないであらう。どちらにしても僕にとつては、つゆ子と氷菓を喰べながらの話題でしかないのであつたが、思ひついてそこから安宅の兄といふ人の家へ電話をかけて、空しく手をつかねて帰つて来た顚末を知らせると、受話器の向うに「ああ、」と溜息のやうな声が聴えて、兎に角ちよつとお目にかかつて様子を伺ひたいからこれからすぐに自動車でそちらへ行きますといふのであつた。実を言ふと僕はこれからつゆ子と一緒に銀座を散歩でもしたいと思つてゐた矢先だつたので会つてもどうにもならないその男を待つてゐるのは迷惑な感じであつたがそれも仕方がなかつた。間もなく黒い絽の羽織を着たその男がやつて来た。僕はもう一度くはしく説明した。男の痩せた肩がまるで呼吸をするやうに動いてゐるのが何となく気持悪く思はれたが、やがて顔をあげて、「ではみすみす弟を見殺しになさらうと言ふのですね、」と言ふのだ。見殺しにするといふのは高尾のことらしいが聴きやうによつては僕が見殺しにしてゐるやうにも聴える。柔和な性格の者が怒つたときはこんな風なのであらうか、頼まれて使ひをした僕のことをさも恨めしく思つてゐるやうな口吻で、「可哀さうに、こんなことと知つたら弟は死んで了ひます。何とかほかにして下さることもあるでせうに、」と言ふのだ。僕は何だか可厭になつた。そこで、どうにでもするがよいと言ふ気持になつて、それでは直接に高尾に逢ひにいらしたら好いでせう。僕が言つたのでは意地になつて拒んだといふところも貴方になら好い返事をしないものでもあるまいからと言ふと、男はしよんぼりと起つてそれでもひとり高尾に逢ひに行つた。もう七月のをはりで、梅雨に雨の

少かつたその年はむせ返るほどにむし暑い夕暮であつた。エスキーモを出た僕とつゆ子とはもう誰のことも気にかけてはゐなかつた。

その日の後もときどき僕とつゆ子とは逢つてゐた。何となく街を歩き茶を喫んで別れるだけのことであつたが、たびごとに愛情の増すのを感じるやうになつた。始めの間はそれもただ僕だけのひとり相撲のやうに思はれてゐたことが、いまではつゆ子も僕を好きになつてくれたのかも知れぬと思へるやうなことがある。或るときのことつゆ子は改まつた顔つきをして僕に高尾のことをどんな風に思つてゐるのか包まずに話してはくれまいかと言ふのだ。つゆ子はその前日高尾に逢つて彼女の口から僕のことを聴いたといふのであるが、何でもその日の高尾は絶えずつゆ子を冷かすやうな口吻を止めないで、「あたしまだあのひとと結婚する気でゐるんだからその積りでね、」と言つたといふ。さういふことを言つた高尾の気持は分るやうにも思はれるが、しかし僕と高尾との間にまだそんなことを言はれるやうな関係が残つてゐるのかどうか知りたい。つゆ子はさう言ふのであつた。高尾が何か言つたといふことなど僕には何でもなかつたが、それについてつゆ子が恋人らしい関心を持つたといふことが何となく嬉しかつた。「あの女の言ひさうなことですね、」実際わが儘なお嬢さんといふものはときどき人を惑はせるのが目的で思ひもしないことを言ふ。ただ僕はそんなことでつゆ子の愛情を誘ひ出したやうな結果になつたことも愉しく思ひ乍ら、高尾の言ひ草は単なる捨科白でしかないと言ふことをつゆ子に説明した。僕はそのとき僕の肩とすれすれに歩いてゐるつゆ子の細い肩をそつとひきよせたいと思つたほど彼女を愛らしいものに思つたのだ。

○

四五日たつた或る朝つゆ子から電報で、急用が出来たから参宮橋の高尾の家まで来て呉れと言つて来た。また何かこでつゆ子に逢へると思ふと何をおいても行つて見る気になつた。風のないかつと照りつけるやうな日ざかりを歩いて行く僕の頭の中はつゆ子のことだけで一ぱいだつた。「ごめんなさい、」声をかけて見たが返事がない。ひつそりとしてゐるけれども玄関の叩土の上には見覚えのあるつゆ子の黒びろうどの草履がぬいであるので、僕はそのまま急いで二階へ上つて行つた。「どうしたのです、」「お呼び立てしてすみません、」さういふつゆ子の傍には、高尾がピアノの椅子の上に体を投げかけて泣いてゐるのであつた。「どうしたんです?」僕はもう一度繰り返した。つゆ子はそばの畳の上に読みすてたまま拡げてあつた一通の長い手紙を僕に示し乍ら、「安宅さんがおなくなりになりましたの、」と言ふ。僕は思はずどきつとした。死ぬ死ぬと言つてゐたあの少年ではあるがこんなに脆く死ぬこともあるまいと思つてゐたのにやはり死んで了つたのだらうか。手紙はあの少年の兄といふ人から高尾にあてたものであつたが、読んでゆく中に僕はこの間エスキーモでその人に逢つたときの奇妙な苛立しさのやうなものの次第になくなるのを感じた。「いまとなつては誰を恨まうといふ心もありませんん。」さういふ調子をもつて、僕らと別れた後のことがくはしくしるしてあつた。「朝晩眼もはなせぬ有様に私もほとほと疲れて了ひましたし旅行でもさせたら少しは紛れることもあらうかと、故郷の老父母の許へしばらく預けようといふことになつたのですが、その帰国の途中で四国通ひの船の上から身を投げて了ひましたのです。風のひどい夜でしたので附添つてゐた私の妻が肩にかけてやるケープをとりに船室へはいつて行つたほんの三十秒ほどの間に見えなくなつて了ひましたのです。確かに海に飛び込んだ水音を聴いたと言ひますし、現に黒い人影が水の中へ躍り込んだのを見た者もあるのですが、死体はまだ浮び上つて来ませんので……。」僕は手紙をおいて、肩を慄はせ乍ら泣いてゐる高尾の方を見た。こんな女でも自分のために死んで行つた少年のことを思つて泣いてゐるのだ。さう思ふと何だか可哀さうになつた。「もう泣くのはお止しなさい。大丈夫ですよ、すぐにみんな忘れて了ひますよ。」高尾は返事もしないで泣いてゐた。僕はまた繰り返して言つた。「元気を出さなきや駄目ですよ。病気にでもなつたらそれこそ馬鹿らしいぢやありませんか、」しんとした空気の中

にやがて泣き声が止つてふいに高尾が顔をあげた。涙に洗はれた大きな眼と紅色の貝殻のやうに腫れてゐる瞼とに深い感動をもつて僕の眼が止つたと思ふと、思ひがけない冷笑の影がその頬を掠めたのだ。「思ひ違ひしないでね、あよ、」僕は呆れて高尾から眼を反らした。この彼女の一言で僕は、また始つたらしい「お嬢さまのあまのじやく」について彼女の説明を聴いてやるほどの親切をけし飛ばして了つたのだ。こんな女が何のために泣いてゐようと構つたことがあるだらうか。むつとして僕の黙つて了ふのを見ると、彼女はなほつつかかつて来るやうな調子で、「こないだ兄さんて言ふ人が来たときにも、あたしはつきりそ言つてやつてよ。湯浅さんを使ひによこすなんて馬鹿だつて。ご存じないかも知れませんけど湯浅さんはあたしの恋人ですつて、恋人に恋の周旋を頼むなんて何て間抜なことだらうつて、——」何を言ひ出すのだ。人の意表に出て人を困らせようといふのがこの女の腹なのだと思ひ乍らも僕は内心狼狽した。さつきから何となくおどおどしてやつとそこに坐つてゐるといふ風であつたつゆ子は、高尾のこの一言を聴くと援けを求めるやうな眼をして僕をぬすみ見た。僕は大きな声をして言つた。「馬鹿なことを言ふのはおよしなさい。」「馬鹿なことですつて? あなたはあたしの恋人ではないと言ふ気なのね? つゆ子さんの前ではつきりその訳が言へて? あたしたちはまだ一度もさよならをした

ことはないんですもの。さうぢやなくつて？　恋人同士でも何でもないものが、どうして一緒にホテルへ行つたりしたんでしよ？　同じベッドの中で一緒に寝たりしたんでしよ？」ほほほほほと狂気のやうに高い声をあげて突然笑ひ出したのだ。「何を言つてゐるんだ。そんな馬鹿なことを言ひ出して何の得になるといふんです。」故意にさうした訳ではなかつたが、つゆ子にはまだあの望海ホテルの夜のことを話してゐなかつた僕は、ふいに高尾の口からそのことを言はれると、言葉以上に深い関係のあつたもののやうに思はれてもあの時の前後の事情を知らないつゆ子にどう説明しやうもなかつた。僕はやつと今日高尾が僕らをここへ呼んだのは何のためかといふことが分ると腹を立てるよりも狼狽した。こんなことを聴いたら、やつとこのごろ僕の方に傾いて来たつゆ子の心もどう動揺するかも知れぬと思ふと、僕は全く高尾の思ふ壺にはまつて狼狽するよりほかはなかつた。「あの晩のことはあなただつて、」僕はへどもどして続けた。「さうはつきりしたことは言へない筈ですよ。何も彼も人の意志を無視して、」と言ひかけると、その僕の声におつかぶせるやうな前よりも一層癇高い声をあげてほほほほほと笑ふのであつた。こんな場合たとひ百の名言を尽して弁解を試みたところで僕の立場はますます馬鹿げたものになる許りだ。見るとつゆ子はそつとハンカチで顔を隠した。それから声を立てないで泣き始めた。僕は途方にくれ乍ら泣いてゐるつゆ子の手をとつた。「誤解しないで下さい。あなたに話さなかつたのは誤解をおそれたからなんですからね、この女の言つてるやうな意味とはまるで違ふんですから、」「分つてますわ。」つゆ子は低声で言つた。そして、ますます深く顔を埋めて泣き出すのであつた。高尾はなほ狂気のやうに笑ひ募つて、「もつとはつきり教へてお上げなさいな。もうそれで言訳はおしまひですの？——実はあたし今日、つゆ子さんに来て頂いてあなたとの関係をすつかりぶちまけてきれいに清算して了ふつもりだつたの。でももうそんなことも馬鹿らしくなつたわ。今日かぎりさよならにして上げてよ。つゆ子さんにそのままあなたを上げちまふと言つてるのよ。さあ、ご一緒に起つてちやうだいな。行つちまつて！　行つちまつてつてば、」「つゆ子さん、行きませう。」僕はわざと落着いた声で言つた。つゆ子はだまつてハンカチを袂に入れると僕の背後から下りて来た。まるで駈け下りるやうにして外へ出たのである。「おこつてるのでせう？」「いいえ、」つゆ子はもう泣いてゐなかつた。気のせゐかそのきれいな眼はあんなにへどもどした僕を憐んでゐるやうに見える。正直に言ふと僕はあの晩高尾があんなに興奮してそのために失心して了ふやうなことがなかつたら平気で一緒に寝たに違ひない。僕がさうしなかつたのは僕の潔癖のためではなく疲労から来るへんな腹立しさのためであつた。しかしそんなことをいまつゆ子に言ふことは出来ない。それは言はないでただ決して深い関係に這入つたのではないといふことだけはつきり言ひたいのだ。「あの女もはつきりさう言ひはしなかつたでせう？　それは行きがかりで一緒の部屋に泊つたには泊つたんだけど、——ひどい暴風雨で帰れやしなかつたんですよ。」「好いのよ、好いのよ。あたし何とも思つてやしませんわ。」「ほんたうですか？　ぢやこの話は今日きりで忘れてくれますね？」やつと笑つてうなづくのを見て僕はほつとした。そして思ひ出したやうに死んだ少年のことを話し乍ら、「しかし不思議な女ですね、可哀さうに自殺したものをひとのせゐにされちや堪らないつて、」気がつくと僕らはとうに参宮橋の停留場を通りこして見知らぬ田舎道へ出てゐたのであつた。そんなことがあつてかして油紙に火のついたやうな勢ひで募つて行つたつゆ子との恋のために思ひ出すことも少なかつた。ただときどきつゆ子の口を通してその後の消息をきくことがあつたが、高尾の父は間もなく妻と娘とを残して中国へ発ち、高尾は父の全盛中にその下で働いてゐた腕利きの若い男と協同して上海鶏卵の輸入を始めたとのことである。いまではどこの田舎にでも売つてゐるやうになつたが、それを大量に日本へ輸入することを思ひついたのは高尾らが始めてであらうとのことで、事業家としての高尾はやはり父のその方での才能をうけついでゐたといふのか、奇矯な性行は影も見せず極度に質実で着々成功ををさめてゐるとのことである。

僕は多分その協力者といふ若い男と結婚でもしたことであらうと思つてゐたが、さういふこともなかつたらしい。つゆ子の言葉によると、「まるで二重人格の標本のやうに、」別人物になつたのだといふのである。その頃から五年をへだてた今年の春僕は銀座の毛皮屋で買物をしてゐる彼女を見かけたが、彼女の方では気のつかぬ様子であつた。

○

つゆ子と僕との恋は始めの間ごくあたり前の形の通りに何事もなくすすんで行つた。まだほんの少年であつた頃に日本を離れて、ながい間外国で生活してゐた僕は、その間中でそんなことを職業にしてゐる女たちとのやや事務的な関係のほかには殆んど経験がなかつたので、ほんたうのお嬢さんであるつゆ子の出現について僕の気持はあの少年の頃の稚い恋心よりも稚くおどおどしたものであつたし、つゆ子もまた、外国帰りの画描きと言ふ僕の新聞記事的な肩書の華やかさに少女らしい幻影をもつて対してゐたらしく、どこまでも内気な恋人同士の域を出ないやうな間が、殆んど秋の間中続いてゐた。

いまではあんなところはもう許されてゐないかも知れぬと思ふが、そのころ新橋の駅のそばに有有亭といふレストランがあつて客種はどつちかといふと品の好い方であつたけれども、這入つて行くと少しもの蔭になつたところに椅

子を二つくらゐ入れた小部屋が幾つか設けてあつて、カーテンをしめると部屋の中の人の姿はそのそばを通つても分らぬやうになつてゐるので、よく女づれの客などがそこに腰を下してひそひそと話し合つてゐたものであつた。僕とつゆ子とはつゆ子は四谷から僕は蒲田から省線にのつて新橋で落合ひ、それから有有亭のその小部屋でながい間向ひ合つて腰を下したのであつた。窓から埃を冠つた青桐の葉などが見える。ときどき階上で鳴らしてゐる下手なピアノの音が聞えて来たりする。わけても昼間はひつそりとしてゐたのでそこに腰を下してゐると世間をはばかつてゐる恋人らしい遣瀬なさが胸一ぱいに拡つて来るのである。幾度かそこで落合つてゐる中に、そこに働いてゐるお八重といふ女がときどき僕らのゐるところへ顔を出すやうになつて、「あら、お娯しみね、」などと始めは冷かし半分に挨拶してゐたのであつたが、のちにはそつと自分も腰を下しに来て、「身につまされるわあたし、」などと言つて、いまは蒲田で活動の役者をしてゐるといふその情夫のことなど話して行くのであつた。お八重の話によると、その男はもと慶応の学生できまりのやうに放蕩に身を持ち崩して故郷からの送金も絶え、ながらくお八重の働きを頼りにして一緒に暮してゐたが、道楽で始めた活動役者でこのごろ少し名前を知られるやうになつたと思ふと、昔かけた苦労は忘れて寄りついても来ないと言ふ。「現金なものよ、」ときまつて溜息をついたのちに、僕らのためになら何でも力になると言ふのが癖で、よく僕の替りにつゆ子の家に呼び出しの電話をかけてくれたり、言伝てを頼まれてくれたりした。

或る日のこと、いつもは決して時間に遅れるやうなことのないつゆ子がなかなか姿を見せなかつた。僕はながい間新橋駅で待ちあぐんだ末、今度は有有亭で待つて待ちきれずにお八重に電話をして貰つたりしたけれどもその電話も通じない。何事かあつたのかも知れぬと心にかかり乍ら仕方なく家へ帰つて見ると、机の上につゆ子からの手紙がのせてあつて、「至急に相談せねばならぬことが起つたから、今夜十一時過ぎる時刻に自分の家のそとまで来てくれ。自分はなかなか外へ出かけられさうにもないから。」と書いてあつた。

僕はいろいろに悪い場合のことを想像してひとりで心配したけれども結局つゆ子に逢ふまではどう手の施しやうもないのである。僕はしかしそれでも胸を轟かせて十一時の来るのを待つた。そして信濃町の停留場から少し裏手にだらだらと下りて行くとそこにつゆ子の家はあるのだが、もう家の人たちは寝て了つたのであらう、暗い庭の植込の向うにどの窓も閉ざされたままに静かなのである。軒燈のうす明りに腕時計をかざして見るとまだ十一時が二三分前である。僕は靴音を忍ばせて一二度家の前を往復した。すると玄関の脇の応接間らしい部屋にぽつと灯りがついたと思ふとほんの少しカーテンが動いて、つゆ子らしい人影がじつと僕の姿を見定めてゐる様子がはつきりと見えるのだ。

人目を忍ぶために着馴れない黒い服を着てゐた僕はそこにゐるのが僕だといふことがつゆ子に分るだらうかと思ひながら、その影に向つて手をあげた。すると、「あつちへ廻つて、」とそんなことを言つてゐるのであらう、しきりに庭の背後の方を指してゐるので、その煉瓦の高い塀に沿うて裏手に廻つて行くと、そこに細い鉄棒をはめた木戸があと一つ風鈴のやうな音がしただけで僕は庭の中に這入ることが出来た。

見るともう応接間の灯は消えてそこの窓からひらりと身をかはしてつゆ子が庭にとび下りてゐるのである。僕は息を殺してそこの植込の蔭にたたずんで待つてゐると、つゆ子はそつと馳けて来て僕の肩のところで、「ああ、」と低い声を立てた。僕はつゆ子の細い体をそつと抱いた。「どうしたの?」「たいへんなことになつたの、あたしお嫁にやられちまふの、」「お嫁に?」深い闇の中だけれども、つゆ子の大きな眼がせき込んだやうな激しい表情をもつて光つてゐるのが僕には感じられる。僕はつゆ子を抱いたまま傍の樹蔭においてあるベンチにそつと腰を落した。かうして逢ふことが出来ただけで、いまのつゆ子の報告の重大なことなども僕には理解出来ないのだ。「お嫁になんぞ、やるもんか、」僕はもう一度つゆ子の体を強く抱いた。闇の中に眼が馴れると、さつきあの応接間の窓のところにぼつと白い塊のやうに見えただけであつたつゆ子の体はうす桃色のパジャマを着て細い足の爪さきには赤いスリッパをひつかけてゐるので何だか中国の女の子のやうである。「だつてもう、何も彼もきまつちやつてゐるんですもの。あたしの知らない間に内証でどんどんきめちやつたのよ。」

海軍の将官であるつゆ子の父はかねてから私かに部下の若い士官の一人をつゆ子の将来の良人として心に決めてゐたと言ふのであるが、そのことについて今日までに彼女は一度も父から聞かされてはゐなかつたと言ふのだ。それが急に今朝になつて、明日歌舞伎座で見合ひをするからそのが分つたのかも知れないの、ばあやがさう言つたわ。だからつゆ子はほうと溜息をついた。「軍人の家庭」の冷たさには随分馴れてゐる積りだけれども、しかしこの父の家を出て新たにつくる将来の家庭をまで「軍人の家庭」に決めらけて了ふのかと思ふと堪らないと言ふのである。「ね、助やいやよ。」つゆ子はおびえるやうな眼をして僕の胸へ縋りつきながら体を寄せて来るのである。つゆ子の気持では、僕といふ恋人があるからほかの誰とも結婚することは出来ないとか、或ひは明日の見合ひの相手がかうかう言ふ男だから結婚したくないとか言ふよりも、その男が軍人だといふことだけで身震ひがするほどいやだと思つてゐるらしいのだ。とにかくどんな方法をとつてでも明日の見合ひから

逃れたいから何か好い思案をしてくれと言ふのであるが、僕にとつてはしかし、たとひこれが命をかけた恋であるとしても、世間普通の言葉をもつてすれば妻もあり子供もある男だ。その僕がどうしてつゆ子の恋人であると名乗りを上げることが出来ようか。一刻も早く妻との関係をはつきりさせ子供の将来も見極めをつけた上で、尚その上で、中流以上の生活をする経済能力をもつた一人の立派な男としてつゆ子の父の前に現れるのでなければ、僕の出現はただ一つの笑ひ話になることにしか過ぎないのだ。僕は全く途方に暮れた。

「好いことがあるわ、」僕の言ひ淀んでゐるのを見てつゆ子が言つた。「あなたも明日来て下さらない？　ね、来てね？　パパを相手ではあたし負けちやふけどほかの人なら負けないわ。面白いことがあるの、」「ぷち壊しにして了ふの？　そんなことをして君、好いの？」「好いわ、」僕はもう一度つゆ子の体を抱いた。細い胴体の柔らかさは赤ん坊を抱いた時のやうに頼りなく哀れである。「では明日ね、」「おやすみ。」僕の腕から離れるとつゆ子はまた飛鳥のやうに身をかはして応接間の窓の中に消えた。僕はながい間そこの樹蔭に立つて、どの部屋が彼女の寝室であらうかと見るともなく眼をあげてどこかの窓に灯のつくのを待つてゐたが、いつまでも灯はつかないでやがてしんと静まつた。ほつとした気持で僕はまた家へ帰つた。

○

翌日僕は時を計つて歌舞伎座へ出かけて行つた。うす暗い場内へ足を踏み入れるとすぐにまるで吸ひ込まれるやうな速さで平土間の前の方の右側に陣取つてゐるつゆ子たちの一行を探しあてたのだ。つゆ子とその母か伯母か或ひは仲人らしい四十くらゐの二人の女の人とそれから今日の見合ひの相手らしい男との四人づれで、いかにも平穏に舞台を見詰めてゐるのを見ると、僕は自分の座席がそこからは大分離れてゐることに何となくほつとしながら、恋仇とも言ふべきその男の風貌に貪るやうな視線を送つた。海軍中尉の制服制帽に身を固めたその武骨な後姿は、つゆ子のいま咲いたばかりの白い百合の花のやうな楚々とした艶かさに比べると凡そ似つかないものの対象のやうに思はれた。僕はゆうべのつゆ子の言葉を思ひ出した。そんなとこへやつちやいや、ね、やつちやいやよ。つゆ子の後姿はいまもさう言つてゐるやうに思はれて僕はそつと席を起つと彼らの背後に近づいて行つた。舞台ではお軽の道行か何かをやつてゐるらしいのであるが勿論そんなものを見る筈のない僕には、ただ舞台の明るさによつて一そう暗い座席の間をほつと助かるやうな気持で近寄ると、はつとしたやうにつゆ子が背後を向いた。そして僕の姿を認めるとそつとそこから脱けて廊下へ出て来た。「一緒に来てるのママ？」「伯母さんとパパのお友だちのおくさん。お仲人なの、」つゆ子はくすりと笑ふやうな表情をした。この表情は僕には少し意外であつた。しかしゆうべの続きのやうな暗さがつゆ子の眼にないことは僕にも嬉しかつた。或ひはこれはただのおどけた出来事として何でもなくすんで了ふ種類のことかも知れないと僕は何となく安易な気持になり、今夜の自分の役割をもただの喜劇の一役として許すやうな気持になつた。「どうするの？　お婿さんをすつぽかしてどつかへ行つちやふ？」「かうしてゐるのよ。いまに伯母さんが出て来てあなたを見つけるまで、」つゆ子はさう言つて悪戯さうに笑ひながら僕の方へ体をよせて来た。その中に幕間のベルが鳴つてどやどやと観客が廊下へ出て来たと思ふと、果してつゆ子の伯母さんらしい女の人がその人混みを掻き分けるやうにして僕らのそばへやつて来た。「こんなとこにいらしてたの？　お客様に失礼ぢやありませんか、」「だつてとてもくたびれたんですもの、」つゆ子はさう言つて一そう僕の方へ体を寄せるやうにし乍らちらりと上眼をして僕に眼くばせした。「お友だちにお逢ひしてちよつとお話してたんですの、」「今夜はどんな場合だかあなた分つてるんでせう？　少しは伯母さんの身にもなつて下さいな、」押へた低い声で言つてから、僕の方へ硬い笑顔を向けた。「ごめん下さいまし。たいへん失礼ですけれど、あちらで客を待たしてゐるもんですから、」さう言ひ乍ら、つゆ子の体を押すやうにして連れて行つて了つたのだ。僕はその後姿を見送つた。一体どうすればよいと言ふのであらう。ここまで来て僕はただ手をつかねて見てゐるだけでは僕が不賛成です。」とでも言つたものだらうか。それともさつきつゆ子のしてゐたやうに彼女のあとを追つてその傍にすり寄つて、「つゆ子さんにはこの僕がついてゐる。」といふやうな気配を見せて今日の見合ひを根こそぎ駄目にして了つたものだらうか。僕にはどの決断もつかなかつた。ただ、いまのつゆ子の芝居で僕といふ男を見た伯母さんがつゆ子についてどういふ処置をとるかといふことが気になつた。いや応なしに今夜の中にも話を決めて了ふか、或ひは万一のことを惧れてこのまま中止にして了ふか、何れにしても僕はただつゆ子がこの見合ひを喜んでゐないといふ一事にせめてもの慰めを見出すよりほかなかつた。扉の中では僕にはよく聴き分けられない役者の科白がピンポンの球のやうに壁から壁へ響きわたつてゐるのが聴える。僕にはしかしつゆ子らのゐる一角の座席だけがぽつと頭に浮んで来る。僕はいまにもそこへ出かけて行きさうになるのをやつと踏止まるやうにしてながい間たつてゐた。やはりひとりでこのまま帰つて了はう、さう決心してやがて帽子をとりにもう一度座席へ戻つてから廊下へ出ようとすると、扉のそとにつゆ子が蒼い顔をして立つてゐた。「早く出て。あたしまた脱けて来たの。」そのまま劇場のそとへ馳けてて出たと思ふと、折よく通りかかつた自動車を呼びとめてそれに飛び乗つた。僕も続いて飛び乗つた。「新橋。」つゆ子

は運転手にさう行先を言つてから僕の方へ向いてにつと笑つた。「ちよつとあそこへ行つても好いでしよ。あたしよつぽど我慢してようと思つたんだけど、」「簪が落ちますよ。」僕はつゆ子の髪に挿してある白い薔薇の簪を見ながら、湧き上つて来る歓喜の心をもつてやつと言つた。「今夜はまるでよそのお嬢さんのやうですね、」「まるで高尾さんのやうでしよ？　あんまり伯母さんが疑ぐり深いんですもの、とんでもないことをして吃驚させてやりたくなつちやふの、」そんなことを言つてゐるつゆ子はほんたうにいままでのどんなときの彼女よりも陽気で悪戯つ児らしく見えたのだ。僕もすぐにその空気にまき込まれた。いまあの劇場に残して来た人たちの狼狽してゐるであらう有様が何か途方もなく愉快なことに思はれて来たのである。

有有亭は珍しくこんでゐた。「まあ、こんなに遅くどうしたの？」少し酔つてゐるらしいお八重がカーテンの間から顔を出した。「まるで駆落でもするやうな恰好ね、」「その通りなんだ。今夜はぜひともお八重さんの智慧を拝借したいと思つてやつて来たんだぜ、」僕は陽気な調子で応酬した。この小部屋の中で見ると今夜のつゆ子はまるでどこかの花嫁ごのやうに美しく着飾つてゐるのである。そのつゆ子を見詰め乍ら僕はさつきから何だか酋長の妻にされるきれいなお姫様をその婚礼の宴席から掠奪して来た野蛮人の若者のやうな気がして愉快になるのである。僕は少し酒をのんだ。「どこか暫くのあひだ隠れてゐる処はないかな、」「まあたいへんな元気なのね、いつになつたらそんなことになるのかと娯しみにしてゐたのよ。」お八重は僕がただ冗談に言つてゐるとしか思はぬのであらう、何となく僕らの逡巡してゐるさまを見ては嗤ふいつもの癖で馬鹿にしたやうに言ふ。僕はちよつと真顔になつて実はかうかうなのだと今夜の事を話した。「きつと僕がつれ出したといふ目星はついてゐるだらうと思ふんだけど、」「駄目だわよ、そんな事、」お八重は意外な表情をして言ふのである。「折角これまで波風たたずにうまく行つたものを、そいぢや元も子も失くして了ふわ。」「不賛成かい？」「だつてそいぢやぁんた、婦女誘拐といふことになりやしない？　大家のお邸のことだから万々一そんな馬鹿な警察沙汰なんかにしつこないと思ふけれども、やつぱり今夜のことは大人しく帰しといた方がよかあない？」少し酒にも酔つてゐてこんなことを言ふお八重を僕はやはり相談相手にするよりほかなかつた。僕は少し困つた顔をしてつゆ子の方を見た。「来てからどれくらゐたつたかしら？」「帰るのいやよ、あたし、」つゆ子はまだ笑つてゐた。「帰るくらゐなら脱けて来やしないわ。――譲二さんまでその気になつてるの？」「僕が？」僕はつゆ子の眼の上で風のやうに動いてゐる長い睫毛をそつとぬすみ見た。もし僕につゆ子をこのまま離さない決心を鈍らせるものがあるとしたらそれは何であらう。僕はただ僕の生活上の無力を惧れてゐた。しかしこの場合つゆ子に何を言ふことがあるものか。僕はさつきの野

蛮人の若者の勇気をもち続けてゐなければならない。「つゆ子さんが帰るつたつてもう帰しやしないよ。あとはどうにだつてなるさ。とにかく好いとこはないかな、」僕は起つてお八重を蔭に呼んだ。「とにかく後には退けないからね、君どこか知らない？」「どこだつてあるぢやないの、そんなことそつちの方が大知りでしよ？」「だけど、待合だのホテルだのは駄目だぜ、」僕は真顔で言つた。つゆ子をつれてそんなところへ行きたくないといふ気持もあつたが、ながい間東京を留守にしてゐた僕にはさういふ場所からお八重のさつき言つた警察沙汰云々の騒ぎによつて引立てられるかも知れないといふことが滑稽なくらゐ気になつた。「汚いとこでも好い？」「好いさ、明日になればまた何とかなるから、」お八重はそこで短い手紙を書いてくれた。麻布の仙台坂の下にある寺の境内の二階に間借りをして住んでゐるといふお八重自身の宿を僕らに提供しようといふのである。僕は幾度も礼を言つた。急いでつゆ子を促して有有亭を出るとまつすぐに仙台坂へ車を走らせた。寺のところまで来るとびつくりするくらゐ暗かつた。街の中にこんなにしんとしたところがあるのだらうかと思ふくらゐ淋しいところだつた。僕らはお八重に描いて貰つた地図をあてにしめつぽい落葉を踏みながらその家を探して歩いた。「後悔してやしない？」「いいえ、」肩掛も羽織も劇場へ残したまま出て来たのであらう何もかけてゐない肩のか細さがさむざむと僕の眼に映る。「こんなところへ連れて来て何だか悪いと思ふんだけど、」「そんなことないわ。」さつきまでの陽気さに較べてつゆ子の声は元気がなかつた。僕はしかし勇気を失はぬやうに自分の心を踏みしめながら歩いた。やうやくお八重の言つた家を探しあててお八重の手紙を出すと、老つたおばあさんが出て来て、「どうぞ、」と言ふ。僕らは二階へ上つた。八畳と六畳と二間続きの部屋に多分朝のままなのであらう敷き放しにしてある寝床のぐるりには着物が脱ぎ捨ててあつたり喰べ荒した蜜柑の皮などがちらかつてゐたりする。いかにも女給をしてゐる女の部屋らしいと言へば言へるけれども、さてどこへ坐つたら好いのかと思ふくらゐである。窓をあけると闇の中にざわざわと鳴つてゐる樹々のおひかぶさるやうな枝がすぐ鼻の先まで来てゐて、うつと湿つぽい空気が這入り込む。昼間でもひどく暗い部屋なのに違ひないと思はれた。「困つたな、」僕は低い声で呟いた。こんなさむざむとした部屋の中ではどんな恋の花も萎んで了ふことであらうと思ふと、なぜせめて帝国ホテルかニューグランドかへ出かけて行くほどの勇気を出さなかつたのかと悔まないではゐられなかつた。この宿の雰囲気から明日の生活について何の予想をすることが出来よう。恐らくつゆ子の心にも同じやうな考へが去来してゐることであらうと思ふと、僕は味気ない気持になつた。「坐らない？」「ええ、」つゆ子は寝床の端を少し寄せて坐つた。「寒かない？」「いいえ、」「もしかしたら僕送つてつても好いと思ふんだけど、」つゆ子はだ

まつて僕の顔を見詰めた。血の気のない頬には僕のまだ見たことのないよそよそしい冷たさが、その冷たさによつてやつとこの部屋の中の姪りがましさに反抗してゐるやうな、そんな冷たさが浮んでゐた。彼女は呟くやうに言つた。「もう遅いわ。」それは時間が遅いといふ意味なのか、帰るにしてはもう手遅れになつて了つたといふ意味なのか分らぬ。ただ僕は味気なさの底にゐて、どうしていつものやうに彼女を抱きその唇に接吻することが出来ないのであらうかとそれが腹立しかつた。恐らくこのまま夜が明けて了ふことであらう。そんなことを思つてゐるときに、窓の下の石畳に騒々しい下駄の音が聞えてお八重の酔つてゐるらしいお俠な声といつしよに男の濁み声が近づいて、やがて荒荒しく玄関の格子戸をあけたと思ふとそのままどたどたと階段を上つて来た。「お楽しみの最中を済まないんだけどさ。」男の肩にぐたりともたれかかり乍らお八重が顔を出した。「ちよいと湯浅さん。この色男があの薄情者なのよ。ちよいと顔を見てやつて頂戴つてば、ほんとに湯浅さんの爪の垢でも煎じてのましてやりたいよ。」「ばか、何言つてやがる。」蒲田の活動役者をしてゐるといふお八重の情夫なのであらう、派手なチェックの外套に鳥打帽子を冠つた若い男がにやりと僕の方を見て笑つた。「失礼します。酔つてるもんですから始末が悪くて、」「ふん、」お八重はべたべたと畳の上へ坐つた。「何だつてまたそんなとこに坐つてるのさ。ほほ、蒲団ならそこの押入にもう一組あるわよ。まるで喧嘩でもしたやうな恰好でさ、」「自分で出して上げたら好いぢやないか。」するとお八重はよろけ乍ら起つて次の部屋に僕らのための寝床を伸べてから、そつと僕の肩を押した。「何をぼんやりしてゐるのさ。まさかあたしが帰つて来たからつて怒つてるんぢやないだらうね、」「いや構はないよ。どうせ、」僕は何かむしやくしやした気持を言葉に出さうとして、やはり心の中へ押し込めた。そしてつゆ子を促して次の部屋の方へ移るとお八重たちに挨拶して間の唐紙をしめた。波のやうな鬱憤が心に押し寄せる。しかしそれもみんな自分に戻つて来るものばかりである。今更席を蹴立てて夜更けの街へ出て行つたとしてもそれが何にならう。観念した僕はやつとつゆ子をなだめてそこに寝させた。「眠つた?」「いいえ、」坂の上を走つてゐるらしい自動車の音が風に送られて聞えて来る。その音はみな坂の上で停つてそれから何か騒がしく話してゐるらしい人声が聞えて来るやうに思はれる。あれはつゆ子の追手の人たちではあるまいかとまんじりともしないでゐると、また新しい車の音が坂の上で停つたやうに思はれる。僕らは二本の棒きれのやうになつて横はり乍らこの不幸な夜のあけるのを待つた。殆んど夜通し続いてゐたお八重たちの人を憚らぬ睦言は僕らの恋を全く涸らして了つたのであつた。

翌朝、窓の白むのを待つて僕らはお八重たちのいぎたなく眠りこけてゐる枕許をまたぐやうにして外へ出た。朝に

なつてつゆ子は父の家へ帰りたいと言ひ出したからである。それならばそれでもよい。僕にはもうつゆ子を引止めるどんな勇気も残つてはゐなかつた。明日、あさつて、或ひは一週間ののちに僕らはまた逢ふであらう。そして僕はもう一度新しい気力と自信とをもつてこの恋をとり戻すことであらう。「ここで好いわ。ここからひとりで帰つた方が好いの、」信濃町の停留場の前でつゆ子は立留つて言つた。彼女は始めてにつと笑つた。「さよなら、」「さよなら、」つゆ子は僕に背を向けて二間ほど歩き出した。そしてもう一度振返つてそこで立留つた。「どうしたの?」「やつぱりごいの。」「パパに?」僕は反問した。一緒に行つてつゆ子の父に逢ひ、自分の軽挙を詫びる。それによつて少しでもつゆ子の気持が安まるならば行つても好いと思つたが、しかし僕らの将来については僕は少しもつゆ子の父をたのむことは出来なかつた。僕は病人に附き添つてゐる看護婦のやうな気持でつゆ子と一緒に歩いた。僕の頭の中にはいくつもの言葉が浮んだ。僕はただ何かの言葉のあやによつて彼女の父を或ひは説得することもあるかも知れぬとそんな愚かなことを考へたのであつた。「ばあやがゐるわ。」つゆ子は立留つた。そこから見える彼女の家の裏木戸の前に一人の老女が立つてこつちを見てゐた。そしてつゆ子の姿を認めると小走りに走つて来た。「まあお嬢さま。」「パパゐる?」「みなさまおいでになります。よくまあお帰りになつて下さいました。よく、」老女は涙をためた眼で貪るやうにつゆ子を見詰めた後に僕の方を向いた。柔かい鳩のやうなその眼ざしは母の眼に似てゐる。さう思ふと僕の意識の底をながいあひだ逢はないでゐる老つた母のことが掠めた。この老女はしばしばつゆ子の話の中に出て、僕は知らなかつたがつゆ子の家の中でのただ一人の味方だといふことであつた。「お騒がせして申訳ありません。」「いいえ、あなた。あんまりお喧しいことを仰言いますものですからお嬢さまがお可哀さうで。でもよくお帰りになつて下さいました。さあこつちからお這入りになつて下さいまし。ばあやがどんなにでもお申開きはしてお上げいたします。」老女はさう言つてつゆ子の手をとるやうにして裏木戸の戸をあけた。こつそりと老女の部屋に隠して、それから何とか穏かなとりなしをする積りだから今日のところは僕にもこのまま引取つてくれと言ふ。それを押して一緒について行く勇気は僕にはなかつた。老女の言葉をきくまでもなく、家中のごつた返してゐる雰囲気の中に僕が顔を出すといふことは火に油を注ぐやうなものだと言ふことは分つてゐた。それに僕はこの老女のやさしい鳩のやうな眼ざしを信じた。そしてつゆ子をひとりで帰す決心をするとそこの煉瓦の塀にべつたりと背をよせて二人の姿がその中に消えるのを見送つた。「ではすぐあとからご様子をおしらせ致しますから。」老女はもう一度木戸から振り返つて低声で囁いた。僕はちよつとの間そのまま立つてゐた。ちやうど朝日がの

ぼつて立つてゐる僕の足許を照らした。その生温い温度が僕の洋袴を通して、何かそのままべたべたと地べたへ這ひつくばつて了ひたいやうな、そんな気力のなさを感じさせる。僕はそんなに疲れてゐた。

○

毎日僕は家にゐてつゆ子からの便りを待つた。三四日待つたが何の知らせもない。僕はだんだん不安になつた。その後の成行きも心配であつたがあんなに気まづい別れをしたのちのつゆ子の気持がどうであらうかとそれが心配でならなかつた。僕はどうしてもつゆ子に逢はなければならないやうな気持になつて、いつか一二度渋谷の金王にある生花の師匠のところへ稽古に通ふつゆ子を待合せて逢つたことのあるのを思ひ出すと、思ひ立つて渋谷駅へ行つて見た。次の日も次の日も時間をはかつてはホームに立つてゐたがつゆ子の姿は見えなかつた。考へて見ると生花の稽古などそんな平和なお嬢さんの生活はつゆ子の上にはなくなつてゐるのかも知れぬ。それにしても僕に一本の手紙も書けぬほど厳しい看視をうけてゐると言ふのであらうか。思ひ迷つた末に僕は決心してつゆ子の家の近くまで行つて見た。二三度行つたり来たりして、つゆ子には逢へないまでも、もしかしたらあの老女の姿でも見かけはしないかと立留つては門の蔭から庭の植込をとほしてそつと窺つて見るのであるが、まるで住む人のない家のやうにひつそりとしてゐるのだ。僕はまた遠くまで歩いて行つた。そして四谷の電車通りから右へ折れてまた坂を下りた突き当りから細い路地を曲つて、静かな邸町からふいにごみごみした裏店の一角に出ると、ちやうどそこからつゆ子の家の斜め裏が見える。僕はながい間立つてそこからあのいつかつゆ子と逢つた夜のつゆ子の部屋かと見える灯の洩れてゐる二階の窓をじつと見上げたが、うす青いカーテンが垂れてゐて人の気配もなかつた。朝も晩も僕は飽きずに歩いた。こんな僕の姿を誰か見咎めてなほのこと誰も姿を見せぬのかとそんなことを考へながら、或る日またごみごみした裏店の続いてゐる道へ出ると、ふとそこの取りつきにボール箱製造といふ看板を出した家があつてその軒さきに「かし間」と書いた木札の下つてゐるのが眼についた。この二階を借りよう。咄嗟の間にさう思ひついた僕はそのままそこの店さきへ寄つて二階の部屋といふのを見せて貰ひたいと言つた。部屋代は月三円と言ふ。「でもとても旦那がたのお住ひになるやうなところぢやありませんよ。」そんなことを言ひ乍ら人の好ささうなお婆さんがさきに立つてうす暗い階段を上つて行く。遠い昔には百姓の家ででもあつたらしく太い梁を横へた陰気な屋根裏にところ構はずボール箱が積んであつて紙の裁ち屑のために足の踏み場もないほどであつた。「だがこの節こんなにやすい部屋はめつたにないから、」僕はそんなことを言つてそこの往還に向いてゐる低い窓をあけた。するとそこから斜めに僅か十四五間くらゐのところ

につゆ子の家の二階の窓が見え、女竹の繁みの向うに玄関から門までの玉砂利を敷いた径までも見えるのであつた。僕はもうあの風の吹く町をほつき歩くことなしにただこの窓口に坐つてゐさへすれば誰にも見咎められないであの二階の部屋の様子もそれからまたあの家からいつ誰が出て行くかといふことも知ることが出来る。さう思ふと何か声をたててその喜びを言ひ現はしたいと思ふくらゐに嬉しかつた。すぐに話をきめてその日から四五冊の本を詰めた小さい旅行鞄を一つ持つてそこに陣取ると、手はばらばらと本の頁をめくりながら絶えず眼をあげて窓の向うを見てゐた。日が暮れると家へ帰つて行く。眼がさめると支度をして出かけて来る。そんなにして十日くらゐ暮すうちに、僕はただつゆ子の父らしい老紳士が朝九時きつかりに自動車に乗つてどこかへ出て行き三時きつかりに帰つて来ることを知つただけで、つゆ子の姿を見ることは愚かその在否さへも確かめることは出来なかつた。「あの二階の西洋館は何て言ふ人の家だか知つてる？　お婆さん。」或るとき僕はそんな風に言つて階下の人に訊いた。「ああ、あれですか。あれは旦那、西条さんといふ海軍大将さんのお宅ですよ。」お婆さんはさう言つてつゆ子の家について何かと話してくれたので、それとなくつゆ子のことを訊いて見ると、あのお嬢さんならよく知つてゐる。いつでも真赤な帽子を冠つて学校へ行つてゐたとそんなとりとめのない答へをする。たぶん赤いベレーのやうなものを冠つてゐたのであらうが、赤いベレーを冠つてゐる女学生などその頃の風俗としてはまるで別人のやうな印象をもつて想像されるつゆ子である。僕はそのつゆ子の姿を心の中に思ひ浮べて僅かに自分を慰めるよりほかはなかつた。つゆ子の在否はお婆さんにもよく分らぬらしいのであつたが、或る日のこと僕はいつもより遅くまで二階にゐて向ひの窓にほのかな灯のつくのを見、さて窓の雨戸をしめて帰らうとしてゐるとふいにその窓からピアノの音が洩れて来た。はつとして耳をすますとショパンのノクターンの同じ楽章を繰り返しては弾いてゐる。ああ、つゆ子だ、つゆ子のほかの誰であると思へよう。僕はじつと胸をおさへるやうにして暫く立つてゐた。カーテンにはただピアノの陰だけがぽつと映つて部屋の中の有様をうかがふことは出来なかつたが、しかし僕はそのつゆ子に心の中で声をかけた。この半ケ月ほどの間に僕にはどんな忍耐も続けられるやうな気持が出来てゐた。僕はまた明日の晩やつて来よう。明日の晩わからなかつたらまたあさつての晩やつて来て、あのピアノの主に声をかける機会をとらへよう。僕はそんなことを思ひながらその音のやむまでそこに立つてゐた。そして翌日からは昼間来ることをやめ、日の暮れるのを待つて出かけて来るのであつたが、いつでも同じ時刻にピアノの音が聴えて来るだけでなかなか姿を見ることは出来なかつた。僕はその間にいろいろなことを考へてゐた。ここから見える路地の奥に向ひの家の裏庭の外囲ひが続いてゐる。その煉瓦とからたちの生垣の繋

ぎ目のところに無理をすれば体の這入り込めさうな隙間のあるのをとうから僕は知つてゐた。あそこから庭に這入つて行かう。そしてあの灯のついてゐる窓の下にひそんでゐてつゆ子がピアノの前を離れるのを待つてそとから硝子戸を叩かう。そんな考へが決定的なものとなつて僕の心を動かすのであつた。ある夜のこといつもは深くとざされてゐるその窓のカーテンが少しあいてそこから明るい灯影が五寸ほどの棒になつて庭の芝生の上に落ちてゐるのが見えた。僕は躊躇なく路地の奥へ這入つて行つた。垣根の隙間からそつと庭に這入り込むと地面を這ふやうにして窓に近づいた。その窓はいつかの夜つゆ子がスリッパを穿いたまま庭に下りて来たところである。僕はそとの壁にぴつたりと胸をよせてちよつとの間呼吸をした。そしてちやうどカーテンのあいてゐるところから斜めに部屋の中を窺ふと、ピアノの前にゐて無心に鍵を叩いてゐるのはつゆ子ではなくて妹の誰かであらう、どこか面ざしの似た十五六の少女であつた。這ひつくばるやうにして僕は地べたにしやがんだ。ピアノの音は僕のすぐ頭の上をぬけた。何といふことであらう。何のために僕は人の家の庭に忍び込んで来たのであらう。僕はいまにもこの窓を叩いてつゆ子の安否を訊きさうになる自分をじつと押へてゐた。僕はもう思慮を失してゐる。さう思ふと一時もそこにじつとしてゐるのが怖かつた。急いで庭を横切つてもう一度ボール箱屋の二階に戻つて来ると、そのまま仰向けに畳の上に転がつた。ながい間僕は天井を見詰めてゐた。涙が顆顆を伝つて流れた。「あとからすぐにご様子をお知らせいたしますから、」と言つた老女の言葉が幾度も思ひ浮ぶ。僕は知りたかつた。このままつゆ子と別れて了はなくてはならぬとしてもほんたうのことが知りたかつた。どうしてさつき思ひきつてあの窓硝子を叩かなかつたかとそんなことを考へるのであつた。たぶん僕はあんまり長い間狭い陰気な部屋の中で時間を過ごしてゐたために気持がどうかなつてゐたのであらう、もう起き上るのも可厭であつた。階下で何か争つてゐる声が聴える。続いてどやどやと階段を上つて来る荒い足音がしたと思ふと、法被を着た男が二人僕の寝てゐる枕許にぬつと立つたのまで僕は呆心して見てゐたのだ。「おい河原！」男の一人がどなつた。はつとして僕は起き上つた。僕は自分の名を知られることを惧れて変名してこの二階を借りたことを思ひ出したのであつた。男たちは躍りかかつて僕の両手を取つた。「ちよつと用事があるから署まで来てくれ。」刑事なのだ。刑事が僕を捕へに来る。僕の頭の中を一撃ぎになつて一つの考へが掠めた。僕は訴へられたのだ。あんなに用心深く考へてゐた積りでゐたのにやつぱり無駄であつた。僕がここにゐることも毎日つゆ子を見張つてゐたことも今夜あの庭に忍び込んで行つたこともみんな知られてゐたのだ。僕は両手をとられたまま起つた。「何だつて言ふんです？　僕が何を、」「だまれ！　言ふことがあつたら署で言ひ給へ。」明るい町の中を僕はひかれて行つた。

この二人の男たちの間に挟まれて歩いてゐると僕はだんだん自分で自分の惨めさを信じるやうになつた。僕は他人の眼に映るのと全く同じやうに女のことで常識を失してゐるんな荒んだ気持をもつて僕は歩いて行つた。四谷署の刑事部屋につくといろいろな風体に変装した刑事たちがそれぞれに身装は違ふけれども共通した一種の鋭い眼を一せいに僕の方へ向けた。「やあご苦労ご苦労。」そんなことを言ひ乍ら主任らしい男が這入つて来た。そして遠くから何か仮綴になつてゐる印刷物を僕の方へ投げてから、「河原！お前これに覚えがあるだらう？　これは君の手で配付したんだね？」と言ふ。その印刷物を見た瞬間に僕は人違ひであることを感じた。僕は河原某といふ社会運動をしてゐる男と間違へられたのだ。さういふことが分ると僕は胸一ぱいに嬉しさがこみ上げて来た。僕は大きな声で笑つた。そして出来るだけ落着いて僕の本名と職業とを語り自宅では思ふやうに仕事が運ばないので離れた仕事場をもつ積りであのボール箱屋の二階に通つてゐるのだと説明した。「しかし仕事場を借りるのにどうして変名をつかふ必要があるかね？」「どうしてと言ふ訳ぢやないんですがね、何となく本名を言ひたくなかつたのです。」たとひつゆ子を見張るためにあそこを借りたのであつたとしてもわざわざ偽名するほどのことはなかつた。ただ誰の心の底にも隠れてゐる自尊心のやうなものが僕にさうさせたのであつた。主任はなかなか僕の言葉を信じようとはしなかつた。そのうちに刑事たちの中に画かきとして僕の名を朧ろげに記憶してゐると言ふ男があつて、僕が外国から帰つて来たときの新聞記事のことから、その記事に載つてゐる写真と僕とを対照して見たらすぐ分ると言ふことになつて、軈て古い綴込みの新聞が探し出され、僕の説明は漸く信じられた。「でふものも出て来て、僕はやつと夜更けの街に解放されたのであつた。おもてに出ると喩へやうのない忿懣の心が再び僕の胸に拡つた。人違ひだとわかつたときのあの瞬間の喜びも、それから乞はれるままに描き散らしたあの似顔絵のことも唾したいほどに腹立しいものであつた。

○

翌日から僕はもうあのボール箱屋の二階へ通ふことをやめた。警察の門を出ると突然僕はあのながい間の霧を冠つたやうな気持から解放されたやうな気がして、昨日までの愚かな自分の所業が信じられないほどであつた。いまになつて僕はつゆ子は四谷のあの家の中には決してゐるのではないこと、老女といつしよにどこか遠くへ監禁されてゐるのに違ひないことをはつきりと確信したのであつた。僕は機会の来るのを待つよりほかはなかつた。四五日、不安の中に蟄居して暮してゐるうちに或る夜のこと妻が一通の電報をもつて二階の僕の部屋へ上つて来た。「電報よ。」彼女

はさう言つて硬い動かない顔を僕に向けてからすぐ下りて行つた。僕と妻との間にはもう半年くらゐの間同じやうな生活が続いてゐた。僕らはお互ひの弁護士から離婚届を作成して届けて来るのを待つてゐるだけであつた。そんな生活の中に僕らはもう馴れてゐたと言つても好い。僕はだまつて電報をよんだ。「ハコネゴーラ・タニグチ・ベツソウ・ツユコ」とだけ記してあつた。つゆ子が居所を知らせて来た。僕はもう一度よんだ。僕の想像はあたつてゐた。つゆ子は強羅にある谷口といふ人の別荘に監禁されてゐたのだ。不思議な感じで僕はもうとうからそんなことは知つてゐたやうな気がする。明日の朝眼がさめたら逢ひに行つて見よう。さう思ふと僕はあのながい間苦しかつたことも忘れて和やかな温かさをもつた湯のやうなものが体の中を廻つてゐるやうな気がした。「明日の朝早く行かう。」電報を手にもつて僕はもう一度口の中で呟いた。するとふいに何か激しい渇望のやうな思ひが咽喉にこみ上げて来た。こんなに夜遅く電報を打つて来たのは何か異常な突発事件があつて僕を呼んでゐるのではあるまいか。これまではとにかく折を見て知らせをしようとその機会を待つてゐたものが突然何か待ちきれない状態に陥ちて了つたといふのではあるまいかとそんなことを考へると一時もじつとしてはゐられなかつた。時計を見るともう十一時を廻つてゐた。急いで行けば十二時何分かの小田原行きの終列車にのりこむことが出来る。僕は帽子をとつてそのまま東京駅に馳けつけた。

強い風がフォームの屋根を掻つさらふやうな音を立てて吹いてゐた。汽車が横浜に着いたころから雨がまじつて烈しい吹き降りになつた。やがて小田原に着くとひどい暴風雨になつて、真暗な町の中はもう水が出てゐた。客引の男どもはみな口を揃へて、この雨ではとても強羅までは行けまいと言ふ。僕を泊めようと思つてさういふのでもあるが、また実際この豪雨を衝いて山に向はうと言ふのは気違ひじみてゐる。僕はさう思ひ乍らやはり出発する積りでゐた。とにかく車を探して来いと言つて男の一人に銭を握らせると、間もなく駅前のガレーヂから一人の運転手を引張り出して連れて来た。「とても道がありませんや。」運転手は僕の顔を見るとすぐにさう言ふ。朝になればとにかくこの夜道ではわざわざ車をぶつつけに行くやうなものだとそんなことを言つて、なかなか動きさうにもなかつた。「行けるところまでで好いよ。」僕はさう言つた。こんなときに僕は自分のしようと思つてゐることのほかは何も考へないのでその一念のやうなもののために相手もまた僕の思つてゐる通りになる筈のやうに思ふ。「道が崩れてたら君はそこから引返して構はないよ。とにかく車を出し給へ。財布の底をはたいてでも料金は君の言ひなりに支払ふから。」「旦那僕が行きませう。」同じガレーヂの中からほかの若い運転手が雨外套を冠りながら出て来た。「強羅のどこです？旦那、」「谷口の別荘だ。」若い運転手はガレーヂに引返して一台の幌自動車を出して来た。幌しかないのかね。僕は

さう言ひかけて、しかし車のことなど何とか言つたために この若い運転手が出かけることを止めはすまいかとそれを惧れたので自分で扉をあけるとすぐに飛び乗つた。恐らく誰か店の者に止められて一番悪い車をひき出して来る気になつたのかも知れぬ。自動車は泥水の中を走り出した。疾風に叩きつけられる棒のやうな雨脚が幌の隙間から僕の頬を打つた。僕は外套の襟を立てた。暗黒の中に断続する恐しい風の音が聴える。それから樹々の枝の折れる音や幹の裂ける音が聴える。山にかかると道といふよりは激流の川底のやうに濁水の流れる下を大きな岩石が転り落ちて来る。「旦那、」何か言つてゐる運転手の声が風に奪られてよく聴えぬ。僕にはそれがこの上押し切つて登ることは諦めてくれないかと言つてゐるもののやうに思はれたので、大きな声を出して続けざまに呶鳴つた。「大丈夫だよ。もうすぐだよ。」「谷口さんは丘の上の一軒屋ですよ。どうしても崖の下で車をとめなくちやなりませんがね。」「分つてるよ。行けるところまで行つてくれればあとは歩くよ。」もしも僕にこのとき箱根といふところについてもう少しはつきり予備知識があつたならば或ひはそのまま山を下りてゐたかも知れないと思ふ。ながい間外国で暮してゐた僕は誰でも一二度は行く筈のところにさへ行かずにゐた。それにかういふ場合の僕には事態が困難であればあるほどその困難に抗ひたいといふ気持が強く働いて、この狂暴な天候はまるで僕の行動を唆しかけてゐるもののやうに思ふ。自動車は幾度も転覆しさうになり転落する石と折れた木々の枝とを組み轢きながら走つた。破れた幌は恐しい音を立てて風にはためき土砂を混ぜた雨はそのまま横なぐりに座席を浸し鉛筆のやうに折れて根こそぎに押し流され、何かがうがうといふ地響きのやうな物音が谷に木魂して聴える。「旦那、ここまでですよ。」やうやくのことで運転手は車をとめて言つた。ヘッドライトの中に若い運転手の兵卒のやうに光つてゐる顔が見え、その顔の上を流れてゐる雨が見えた。僕はだまつて車を下りた。そして眼の前に続いてゐる勾配の急な径をもつた高い崖を見上げたが、そこからは別荘らしいものの灯も見ることが出来なかつた。僕はしかし決心してその径を上つた。小半町も上るとその小高い丘の上に確かに谷口の別荘であらう、低い木柵に囲まれた質素なコッテーヂ風の建物の立つてゐるのが朧ろげな影をもつて感じられる。何気なく振返るといま別れた自動車のヘッドライトが暗黒の中に明滅し乍ら低く這ふやうに山を下りて行くのが見えた。もう時刻は二時を過ぎてゐるだらう。僕の頭は閃光のやうにそのことを考へた。そして両手で木柵を探り乍らその外廻りをぐるぐると廻つたが勿論人の起きてゐるらしい気配はなかつた。門はあいてゐた。僕はそこから庭の中へ這入つて行つた。そして低い松の植込を分けて裏手へ廻ると下見板を手探りにして一二度ぐるぐると家の周囲を廻つて見たが中の様子を窺ふことは出来なかつた。

僕はちよつとの間物置の蔭に身を隠した。傍の高い貯水タンクに叩きつける雨の音はまるで太鼓の音のやうである。僕は始めて自分の体が帽子も外套もワイシャツから靴下までぐしよ濡れに濡れて了つてゐることを感じた。けれども僕はこの海のやうな暗闇ともの凄い風雨の音とのために僕の身の安全であることをどんなに喜んだか知れなかつた。僕は幾度も大きな呼吸をした。そしてもう一度下見板にぺつたりと胸をつけるやうにして廻つてゐる中に、高い落葉松の植込の中に隠れてゐた一つの窓から微かな灯りの洩れてゐるのを発見した。僕はその窓へ近づいて行つた。その中に誰がゐるのかといふことも、よしまた誰かゐたとしても何と言つて声をかけたら好いものかといふことも僕は考へてはゐなかつた。といふよりも僕は東京駅を発つときから自動車に揺られて来る間中ずうつと続けてそのことばかりを考へてゐたのであるが、つゆ子に逢ひたいといふ狂暴な飢餓のやうな気持だけが僕の凡ての思惟を押しのけて了ひほかには何も考へることが出来なかつた。何故か僕はその窓の中につゆ子がゐるやうに思ふとこの風雨にも拘らずもしそこにつゆ子がゐたならば声をかけてそとに誘ひ出し一緒にここから逃亡しようとそんな途方もない考へが僕の心を掠めるのであつた。僕はその窓硝子に頬をつけるやうにして一二寸ほどあいてゐるカーテンの隙間から部屋の中を窺つた。するとやはりそこにはつゆ子が窓の方に背を向けてベッドの上に横はり何か本を読んででもゐるらしい気配が枕許の夜卓の上においてある低いスタンドのうす灯りに朧ろげながら感じられるのであつた。僕はそつと窓を叩いた。「つゆ子さん、」「つゆ子さん。」続けて三四度呼んで見たが僕の声は僕自身の耳にさへも戻らずに風雨の中にさらはれて了ふ。僕はまた走つてベッドに近い窓の北側によつた。そこからはつゆ子の本を持つてゐる白い手が見え枕の中に埋れてゐる横顔の子供のやうな顔が見えたが忽ち窓硝子に叩きつける雨脚に洗はれて見えなくなるのであつた。「つゆ子さん、つゆ子さん。」僕はもう一度呼んで見たが勿論起きて来る様子はなかつた。そのとき崖の下の道の方からがやがやと話してゐるらしい人声が聞えて来た。だんだんに家の方へ上つて来る。僕は本能的に窓から飛びしさつて背後の低い小松の繁みの下に身をひそませた。顔にも肩にも背にも小枝や石を含んだ雨が痛いほど叩きつける。僕はその雨に身を任せてじつと呼吸を殺してゐた。人々は庭へ這入つて来た。だんだん僕の隠れてゐる繁みの方へ寄つて来る。手に手にカンテラを持つて蓑のやうなものを着た四五人の男が何か大きな黒いものを抱へるやうにして運んで来てゐる。この深夜に何事だらうと胸を轟かせてゐると突然凄じい風が吹いて来てカンテラの灯がばああつと横ざまにあふられたと思ふと、一瞬間その閃光の中に僕の全身がさらし出されるのを感じた。僕は繁みの中から躍り出た。咄嗟の間の考へで、彼らの眼によつて発見されるより前に自分から飛び出して行つた方が得策だと

そんなことを考へたからである。「どうしたのですか？」僕は人々が僕に浴びせかけるであらう問ひを自分で発した。彼らの抱へてゐるのは雨外套を着た若い男で酒に酔つてでもゐるのかぐたりと首を落して死んだやうになつてゐる。「馬鹿な奴ですよ。この雨に車を飛ばしてゐたのですからね、」彼らの一人がさう言ふ。彼らは今夜この山の非常警戒にあたつてゐたのであるが、いまそこの下の何とか橋の下まで来ると轟々といふ凄じい音がして崖が崩れ落ちたと見る間にヘッドライトを輝かして向うから疾走して来た一台の自動車があつといふ間にその崖と一緒になつて転落した。人々が馳けつけたときはもう遅かつた。車は玩具のやうな岩石の下敷になつて虫の息であつた。やうやくのことで人人はその男を救ひ出したのであるが、さてこの界隈にはこでこの家の迷惑は知れてゐるが一先づここまで担いで来たところだと言ふのである。あの自動車であらうか。僕はぎよつとしてその若い男の顔を覗いた。別人のやうに蒼ざめてはゐるがまぎれもなく僕をのせて来た自動車のあの運転手なのであつた。僕の眼にさつき別れたときのあの兵卒のやうに光つてゐた顔とその顔の上を流れてゐた雨とが浮んだ。僕は心が転倒してこの他人の庭に忍び込んでゐる自分の身の上のことを忘れてゐた。「何て言ふことだ。」とそんな馬鹿なことを口走り乍ら、この男を殺したのは自分だと言ふ考へに追ひ詰められて人々の前に眼も上げられぬのであつた。「一体どなたですか？　あなたは、」思ひついて中の一人が訊いた。僕ははつとして自分に返つた。咄嗟の間に思案をめぐらすと、自分はこの奥の方に住んでゐる者だが道を間違へてこの庭へ踏み込んで了つたのだ。こんなところで落合ふのも何かの縁と思ふから一緒になつて自分もこの男の介抱をしようと思ふがと平然として言ふことが出来たのである。幸ひに誰ひとりも僕の言葉を怪しむ者はなかつた。僕は人々のさきに立つて表に廻つた。カンテラの灯りによつて、石を積んで建てた山荘らしい表構へが見え丸太で組んだ厳重な扉が見えた。「ごめん下さい。」僕はどんどんとその扉を強く叩いた。「ごめん下さい。ごめん下さい。」やがて家の中に微かな灯りのつくのが見えた。誰か起きて蠟燭の灯でもつけたのであらう、ゆらゆらと灯が近づいて中から扉があいた。髪の白い老爺が出て来て僕らの来意を聴くと、一度家の中へ引返してから「どうぞ、」と言つて招じ入れた。僕らは玄関の次の間の応接室らしい部屋の中に導かれた。質素な飾り付けの広い部屋である。人々はその一隅の長椅子の上に怪我人を横へた。蓑をとると同じやうにカーキ色の詰襟を着てゲートルを捲いてゐる。町の青年団の団員なのであらう。老爺に頼んで薪を運ばせると傍らの煖炉にどんどんと火を焚き始めた。焔のあかりが怪我人の蒼ざめた顔の上を這つた。外にゐた間は雨に洗はれて少しも見えなかつた血が、後頭部の傷口から滾々と

湧き上るやうになつて流れ、まくれ上つた皮膚の間から砕けた頭蓋骨が白く見えてゐる。「医者が呼べると好いのだが、電話はないんだね？」「駄目だよ。あの山崩れでは小田原まで下りて行かうにも道がないからね。」彼らは低声で囁き合つた。間道はあるけれどもそこを通つて行くのはなほのこと危険だ。それに医者を呼びに行つてつれて帰つたとしても怪我人はそれまで医者を待つてゐることは難しいだらうと言ふ。老爺のつれ合ひらしい老婆も起きて来てバスタオルや晒し木綿をあてて傷口を覆ふのであるが忽ち鮮血に染つて了つてぐしよぬれになるのであつた。僕は人人の間にまじつて甲斐甲斐しく胸のボタンを外して洋服を脱がせる手伝ひをしたり濡れた漆喰のやうになつて固くこびりついてゐる靴を脱がせたりするのであるが、靴下を脱がせたあとの紙のやうに白い色をした裸の足やその足の凍りつくやうな冷たさは僕をぞつとさせた。僕はながい間この若い運転手の大きく開いたまま痙攣する唇や汚れたワイシャツの下で忙しく波うつてゐる胸を呆然と見詰めてゐた。「もう駄目だな、」誰かが呟くやうな声で言ふのが聞える。この男は死ぬのだらうか。ただ僕を乗せて来たといふことのために見知らぬ家の中で医者も呼ばれずにむざむざと死ぬのだらうか。男たちはもう何も手段を施さうとはしないやうに見えた。人の死ぬまでの数分を待つてゐる気味の悪い沈黙が続いた。窓のそとは絶えず吠えるやうな風の音が続き樹々はへし折れる音とともに黒い大きな影になつて揺れながら倒れ雨は窓の桟を洗ふやうに流れた。一瞬間僕はこの窓のそとの風雨も煖炉の中に燃えてゐる火焔もそれからこの部屋の中の光景もながい間見馴れてゐるもののやうに思つた。そして僕がこのやうなものの中にゐることも当然であるやうに思つた。突然僕は寒くなつた。ぞつと水を浴びるやうな悪寒が僕の背中を走る。僕はがたがた慄へた。僕の耳に自分の歯のがくがくと鳴つてゐる音がきこえる。「もうおしまひです。」老爺の声らしい低い声がきこえる。「さうだ。あの男が死ぬのだな、」僕はさう思つた。そして力をこめて眼を瞠くとそこの長椅子の上にもう誰の手にも支へられずに横つてゐる若い運転手の開いた口が見え、忽ちがくりとクションから首を落すのが見えた。僕は両手で顔を覆うた。「お爺さん、蠟燭を、」「可哀さうに、」そんな声が聴えた。僕は死人の枕許に蠟燭の立てられるのを見たと思ふ。その微かな焔のゆらゆらとゆらめいてゐるのを見たと思ふ。僕は今度は燃えるやうに体中が熱くなつた。「僕も蠟燭を立てるのかな、」僕はさう思つてそれを老爺に頼むために顔を上げると、次の部屋との間の扉が二寸ほどあいてそこに紅の縞の部屋着のやうなものを着たつゆ子の細い体が立つてゐるのが見えた。僕はそのまま人事不省に陥つてそこに昏倒した。

○

ながい時間の間雨に打たれてゐたために僕はひどい急性肺炎に冒されたのであるらしい。あとで聴くと僕はあのときのまま昏睡を続けてまる二日の間眼を醒さなかつたのだと言ふ。眼をあけると僕は明るい窓に近いベッドの上に横はり枕許には白い仕事着を着た医者が腰をかけて僕の胸に聴診器をあててゐた。「いかがです？　お気がつきましたか。」僕の眼をあけたのを見て医者の問ひかけるのが分る。僕は何かそれに答へようとしたが、僕のすぐ真上におひかぶさつてゐる医者の白い仕事着の白さがぱあと僕の眼の奥で拡がる。僕はすぐ疲れて眠つた。そのときからまた二日くらゐ間があつた。窓にもベッドの上にも部屋の中一ぱいに暖かさうな日光がみちてゐて何だか僕は赤ん坊になつてそんな日向にねてゐる、さういふ感じの中で眼がさめた。窓のところに誰か立つてカーテンをひいてゐる。僕はそれをつゆ子だと思つた。明るい紫色のその着物を僕はよく知つてゐるやうに思ふ。僕は笑はうと思つた。しかし僕は非常に疲れてゐてすぐ眠つた。また眼をあける。といつでもそこにつゆ子が腰をかけてゐた。僕はそれを自然なことに思つた。自分がこのベッドの上に眠つてゐることも自然なことであるやうに思つた。つゆ子は真面目な表情をしてゐた。「よく眠れて？」僕は彼女の長い睫毛をじつと見てゐた。「この部屋はとても暖いね、」「あ、」つゆ子の高い声が僕にきこえた。彼女は跳び上るやうに起つて背後の扉を振返つた。彼女のうすい頬に恐怖のやうな血の色の上るのが見えた。「だまつて！　まだ誰もあなただとは知らないの。」「つゆ子。つゆ子。」奥からしはがれた老人の声がよんでゐる。

○

「はい。」とつゆ子は大きな声で奥の声に答へてから急いで僕のそばを離れた。そして扉のところでちよつと立留つて、「だまつて、」と言ふやうに僕を振返つて唇に指をあてて見せてから、奥へ向いて再び、「おぢいさま。お客さまがお気がおつきになつてよ。お話もお出来になれてよ。」と言ふのである。あとで分つたことであるが、この谷口の別荘といふのはつゆ子の母方の祖父母のゐる別荘で、つゆ子はあの朝僕と別れて自分の家へ帰つたと思ふとそのままここへ送られて来たのださうである。「おぢいさま。」と呼んだので僕ははつとあのひどい暴風雨の夜のことを思ひ出し、その一瞬の間に、無断でこの家の庭に忍び込んで来たことや、そこへ怪我をした運転手がおほぜいの人に担ぎ込まれて来たことや、皆でこの家の応接間に導かれてそこで怪我人の手当をしたことや、間もなく怪我人は死んで了ひ、その恐怖と自責の念とに駆られながらながい間雨に打たれてゐたためにそのままそこに昏倒して了つたことなどの記憶が稲妻のやうに僕の脳裡を掠め去つたのであるが、おぢいさまと呼んでゐるのはあの夜怪我人のために薪やバスタオルや蠟燭などを運んで来た老爺のことであらうかと混乱した心の中で思ひ惑ひ乍ら、ままよ何とでもなるやうにな

れと強ひて自分を落ちつけて待つてゐると、その老爺とは似もつかぬ白髯を長く垂らした品の好い老人が温和な微笑を浮べながら部屋へ這入つて来た。「お気がつかれたかな。」「いろいろご迷惑をおかけしまして、」僕はやうやうの思ひで言つた。明るい日がさして老人の少し垂れ下つた瞼にうすあかく紅のさしてゐるのまで僕は感じながら眼を上げることも出来ないやうな気持である。老人は冷い手を僕の額にのせて見た。「熱も下つたやうだな。何と言つてもこんな山の中だから手当が届きませんでね、」そんなことをゆつくりした口調で言つてから思ひ出したやうに、「おう、それからな。まだお名前も分つてをらぬものだからどちらへもお知らせがしてないのですよ。誰かがそんなことを言ふものだからこの奥の別荘をそれとなく問合せて見たりしたのだがどうも分らぬ。何しろ突然のことだから何も彼もあとさきになるのは当然だけれど、お住ひはどちらで？」僕を詰問するといふよりは、却つて僕の病気のことをまだどこへも知らせてないことの手落ちを詫びるやうな言葉つきなので、僕は心の中でほつと呼吸をして、さうだつた、あの夜運転手を担いで上つて来た男たちに問はれて咄嗟の間の言ひ逃れに、ついこの奥の別荘のものだと出鱈目を言つたのだつたなと思ひ出したのであるが、今はそんなことに拘泥してはゐられぬくらゐ僕の気持は混乱してどん底まで追ひつめられてゐたのである。構ふことがあるものか。しまひには僕だといふことが分るまでのことではないか。それまではどこまでも白をきつて呆けてゐてやれと僕は最後の腹をきめて落着いて答へた。「東京です。」「東京。ほう、それでお名前は？」当然訊かれることなのに僕はぐつと詰つて了ひ一つ呼吸をした。そしてどういふ頓馬な頭の働きのためか、「西条賛二郎といふ音楽家です。」と言つて了つてからはつとして口を噤んだのである。西条といふのはつゆ子の姓なのでここでは決して口にしてはならないものであるのにその西条を言つて了つたのだ。しかし老人はそのために少しでも僕を疑ふやうな気振りはなく、「西条さんと仰言る。それは不思議だな。ここの近しい縁家にもさういふ名前のものがあるのだが、やはり何かのご縁といふものかも知れませんな。とにかく一つお宅へ電報を打たせにやりませう。」「いや、」と僕は狼狽て遮つた。そしてこれも口から出まかせに、自分のほんたうの家は九州のずつと南の方なのだから病気をしてゐるからと言つてわざわざ親たちを驚がせるのは心許ないし、また東京の住居といふのもただ勉学中の仮寓に過ぎないのだから、四五日うちをあけたからと言つて誰も気にとめて待つてゐる者もない筈だからと言つてごまかして了つたのであるが、それから暫く四方山の話の後で老人はまた思ひ出したやうに、あの暴風雨の夜あんな夜更けにどうしてこんなところを歩いてゐたのかと訊くのであつた。老人の積りでは僕が眼をさましたらあれもこれも訊いて見ようと思つてゐたことなのであらうが、僕はもう矢尽き刀折れた有様で

気のせゐかさつきからの老人の質問は凡て僕の身許を探り出さうとしてゐるもののやうに思はれてならぬので、折角ここまで言ひぬけて来たけれどもこの上まだ何かうまいことを言ひ拵へては答へるほどの気力を失して了つたのである。僕はぐつしより汗をかいてゐた。まだ熱があるのですぐ疲れて了ふ。僕は根気もなく顔を枕の中に埋めて眼をとらである。「いけないわ、おぢいさま。」さう言つてゐるつゆ子の声がきこえる。「やつといまお気がおつきになつたばかりなんですもの、あんまりいろんなことを伺つたりしちやいけないわ。」「さうだつたな。わるいことをしたな。」そんな声をきいてうとうとと眠りにおち乍ら僕はつゆ子のそのさかしい言葉を頼みに思はずにはゐられなかつた。それにしても僕がほかの病気ではなく、このやうな場合にもそのまま眠りにおちて了ふこともある熱病にかかつたといふことは僕にとつてもつけの幸ひである。

こんなことのあつたのち僕が眼をさましたのは同じ日の日暮れであつた。枕許にはやはりつゆ子が腰をかけてゐては散歩よ。」と言ふ。つゆ子の祖父は祖母とともに朝と日暮れとに時間をきめて散歩に出る習慣であるとのことで、家の中にはいま召使のぢいやとばあやとがゐるだけだと言ふのである。僕はさまざまな思ひをこめて眼で笑つた。窓からさすうす日をうけて半眼に開いてゐるつゆ子の瞼は腫のやうに濃い睫毛の影を頬に落し唇や顎の柔い翳が何とも言へず美しかつた。けれどもまだ熱の去らぬ僕の胸にはつゆ子に対するあの飢餓のやうな狂暴な恋心は眠つてゐて、静かな喜びが水のやうに溢れて来る。「さつきはどうも有難う。おぢいさまはもう僕のことを分つた？」「いいえ。どうして分らないのかと思ふくらゐ。とても滑稽よ。」つゆ子はくすりと眼で笑つた。そのいたづらしい眼は僕を誘ひ込む。僕は長閑な気持で何か悪いことの出来ることを想像した。さうだ。誰も彼もみんな瞞してやれ。さう思つた瞬間に僕は少し大胆な気持になつた。そしてあの昏睡の間中僕を脅してゐたやうに思はれるあの事から、まかり間違へば逃れられるかも知れぬといふ気がして来たのである。僕は試すやうにつゆ子の顔を見た。「ねえ？　あの晩どうやつて僕がここまで上つて来たのか分つた？」「分つたわ。」つゆ子は前と同じやうにいたづらしい眼をして僕を見た。「分つてたわあたし。みんなあたし分つてたわ。」「僕があの自動車に乗つて来たことも？」「ええ、」「その帰りにあの自動車がおつこつたことも？」「ええ、」僕はだんだん大胆な気持になつた。そしてどういふ気持の変り方であるか知らぬが、さつきまではあの運転手を殺したのは自分だと思ひ詰めてゐた筈であるのに、ままよ、それがどうしたのだ。僕をのせて来た車がその帰りに何かあつたからと言つて僕の知つたことかと言ふやうな不敵な気になつた。「だけどどうして外の人には分らなかつたんだらう？　小

田原のガレーヂの奴が来たら当然分つた筈なんだけど、」駅の前であのとき大声で僕は行先を呶鳴つたことをはつきりと覚えてゐるが、あの声も風雨の音にさらはれて死んだ運転手のほかの誰の耳にも残つてはゐなかつたのであらうか。つゆ子の話によると翌朝になつて検視の役人や死体引取りの人たちの来たときには僕はもうこの部屋に担ぎ込まれたあとのことであつたので、誰も僕を見た者はなく僕とあの自動車を結びつけて考へた者もなかつたといふのである。つゆ子は僕に一枚の地方版の新聞を示したが、その社会面の一隅にやうやく、「何々ガレーヂ運転手何某は昨夜豪雨中強羅方面への乗客を送り、」云々といふ三行ほどの記事となつてゐるのを発見しただけである。事件は僕の眠つてゐる間にこんなに巧く片附いて了つてゐる。僕はこの家の中では西条賛二郎といふ音楽家になりすまし、あの自動車の事故については何も知らぬ一乗客としてそれもただ神さまだけに知られてゐるといふだけになつてゐる。ああ、と僕は心の中で喜びの声をあげた。そしてこんな危機をも脱し得た僕の恋には何か邪まな魔神の加護のやうなものがあるのだとそんなことを考へたのである。

つゆ子の祖父と祖母はそれからのちもしばしば僕の病室へ姿を見せたけれども、もう前のやうに僕から何かを訊き出さうとはしなかつた。僕の病気は薄紙をはがすやうによくなつた。つゆ子は大抵の場合だまつて僕の枕許に坐つてゐたが、朝と夕方との老人夫婦の散歩の時間にはちやうどに、つゆ子も殆んど僕の病室へ来ないやうにしてゐた。ときどき奥の茶の間で祖父母を呼んでゐるつゆ子の声が聞えて来たり僕の室のそとを歩いてゐるつゆ子の草履の音が聞えたりした。ひとりで寝てゐても僕にはいつでもつゆ子がどの部屋にゐるといふことが感じられる。これまでに一度も感じたことのない安堵の気持であつた。「這入つてもよくつて？」つゆ子はいつも扉を半分あけて顔を見せた。老人たちの散歩の時間を計つて僕はひそかに歩くことの練習をしてゐたのである。片手はつゆ子の肩に摑まり一足づつ踏み出すやうにしてベッドのぐるりを歩くのであるが、五日くらゐの中に殆んど手を離しても歩けるやうになつた。やがて明日の朝はいよいよ出発しようといふ日が来たのである。

「とてもどきどきするの。」つゆ子は胸に手を重ねて言つた。老人たちが朝の散歩に出るのを待つて、つゆ子は一足さきに裏の山道から廻り僕は崖下の間道をぬけて別々の道をとつて町へ出るバスの終点のところで待合せる筈であつた。うまく行けば老人たちの帰つて来るまでに僕らはバスで小田原近くまで出て了ふことであらう。僕は手をのばしてつゆ子の胸からその両手をとつた。そして部屋の中のいつでも新しい花のさしてある一輪挿しやさきをととひまで使つてゐた氷嚢の空気を入れて膨らませたまま手摺の桟にくくりつけてある窓や、その窓から見える落葉松の植込やそのまばらな枝の間から覗いてゐる高い空などに眼をやると、この家からつゆ子をつれて脱け出さうとする僕の行為はどのくらゐ大きな背信であるかと思はずにはゐられぬ。「僕は泥棒よりもたちの悪い男だ。でも僕はもつとひどいことでもしたかも知れなかつたけれど、」「そんなことを言つちやいや。」「いやこれからだつて僕は何をするか分らない。」冗談のやうに言つたけれども僕の気持は冗談ではなかつた。たぶん僕は少し硬ばつた表情をしてゐたのであらう、つゆ子はそつと僕のそばから体をひいて言つた。「帰つてらしたやうよ。」鈴の鳴る音がして玄関の敷石にかたりと杖をおく気配がした。老人たちが帰つて来たのである。「ぢやあ明日ね、」つゆ子も立つて扉のところでいつもよりは少し長く立留つて低声で言つたのであるが、これが僕への別れの言葉にならうとは二人とも思はなかつた。

その夜僕はなかなか眠ることが出来なかつた。明日のこと、これからさきのことを考へると亢奮してだんだん眼がさえるばかりである。睡らないと明日は熱が出るかも知れぬ。さう思つて眠らうとすればするほど眼の底が乾いたやうになつて、まだ充分に恢復しきらない体はまるで暗示にかかつたやうにぼうつと熱つぽくなつて来てベッドの上に横つたまま浮き上るやうな気がする。眠れなければ眠れないままで好い。どうしても眠らなければならないといふ考へに固執しない方が好いと僕は出来るだけ気持を落着けるやうにしてゐたが、その中にだんだん窓のそとが明るくなつて来て鴉てばあやが起きて来たのであらう、きいきい隠れん坊をしてゐた恋人同士のやうにふいに呼吸をのんで何か話し出すのである。この遊戯は僕らを刺戟した。その上にこの短い時間の間に何も彼も話し合つておきたいと言ふ急き立てられた気持によつて僕らの話題はひどく最後的なものになる。僕らはひそかにこの別荘をぬけ出すことを相談したのである。「おぢいさまが悪いんだわ。きつとお前の好きなやうにしてやるからつてあんなに固い約束をしてここへつれて来といた癖に、やつぱりパパが恐いんですもの。待ちきれなくなつてあたしあなたにあの電報を打つたのよ。」僕はつゆ子をつれて逃げてのちの僕らの生活のことを、目まぐるしい速さで心に思ひ浮べた。いつかの夜の苦々しい経験をもう一度くり返すことに終らぬやうにしなければならぬと思ふと愉しい空想よりも前にそれが気にかかつた。大阪へ行かう、と僕はさう思つた。大阪には古い友達で向うの有名なレビュウの総指揮のやうなことをしてゐる男がゐる。その男に頼んで何か仕事を見つけて貰はう。まかり間違へばオーケストラのピアノ弾きでもギャグマンでも何でもやらう。僕はそんなことを考へた。そして東京の家のことは少し落着いてから弁護士の手を通じて片を附けようなどと思つた。但しこの最後の一項はただつゆ子に対する義務の気持から実に事務的な影をとつて僕の考への中に浮んで来ただけである。僕らは僕が少し歩けるやうになるまで恢復するのを待つことにした。

この相談がきまつてからは僕らはあまり話をしないやう

とタンクに水を汲み上げてゐる音が聴えて来た。僕はもう眠ることを諦めた。せめて時間の来るまで体を楽にしてゐようとじつと横になつてゐたが、間もなくつゆ子と約束した八時に近くなつた。僕は起きて椅子に腰をかけた。つゆ子はもう裏木戸からぬけ出してせかせかと山道を駆け下りてゐるところか、もしかしたらもうバスの終点のところに立つて小さなトランクを提げて僕の来るのを待つてゐるところではないかと思ふと僕はじつとしてゐられなかつた。僕はそつと起つてそこの衣裳箪笥の中に靴下やシャツまでちやんと乾かしてしまつてあるのを出して洋服を着始めたのであるが、心配したほど元気を失つてはゐなかつた。僕はちよつと窓のそとを見廻した。そして誰もゐないのを見ると玄関で靴を穿いてサンルームの横からベランダへ出てそこから庭へ下りようとしたのであるが、ふいにそのベランダの明るい陽の中へ出たせゐか、ふらふらと眼がくらんではつと思ふ間に片足をふみ外してそこの煉瓦の床の上にべたべたと這ひつくばつて了つたのである。その時の僕の眩んだ眼に、何か朝の買物に出て帰つて来たのであらう洋風の野菜籠を提げて裏木戸から帰つて来たばあやの声を立てて駆けよつて来るのが見えた。「まあ西条さん。あなたまあお靴をお穿きになつて、」とそんなことを言つてゐるのが聞える。しまつた、見付かつて了つたと思ふ瞬間に僕の両腋から冷い汗が流れた。そのまま僕は意識を失つて了つたのである。

○

気がつくと僕はやはり以前の部屋のベッドの上に横つてゐた。僕はうつけた頭の中でぼんやりとあの朝の失敗した脱走のことを思ひ浮べた。僕はここにゐるがつゆ子はどうしたらう。僕は家の中のもの音によつていまどの部屋には誰がゐるといふ僕ひとりの判断をしようと聴き耳を立てたのであるが、気のせゐかことといふ音も聞えぬ。その中にぎいと扉のあく気配がしたと思ふとそこにはばあやが気の弱さうな微笑をうかべて立つてゐるのである。「お目がさめまして？」「ああ、」と僕は答へた。僕はだまつてゐた。何かばあやが話し出しはせぬか、或ひはつゆ子が姿を見せはせぬかと思つてそれを待つてゐたのであるが、ばあやはそれからもたびたび僕の部屋へ来て何くれと世話をしてくれるのであるが、僕の聴きたいと思ふことにはわざと触れぬやうにでもしてゐるやうな風である。しかしその中にはと思つてゐたつゆ子もまるで姿を見せぬばかりか、朝夕庭に出て植木の世話などし乍ら窓から声をかけてゆくこともある老人までしはぶきの音もさせぬ。僕はもう待つことに負けてそれとなくばあやに訊いて見た。「お嬢さまはあの日のおひる大旦那さま方とご一緒に東京へお帰りになりましたのですよ。」そしてこの別荘に残つてゐるのは僕とばあや夫婦だけだと言ふ。あの日のおひるに東京へ？　では何も彼も分つて了つてつゆ子はまた父の手に渡されて了つ

たのであらうか。僕は気力もなく眼をとぢた。するとばあやは慰めるやうな口調で言つた。「大丈夫ですよ。いまに東京からお友だちの方がお迎へにいらして下さいますよ。」「お友だちですつて？」「ええ、あなたのお友だちがいらしぐにお帰りになれますからね、」友だちが僕を迎へに？僕には何のことなのかよく分らなかつた。ただ僕の意識を失してゐた間に何事かが起つてそのために凡てのことが露れて了つたのだといふことだけははつきりと感じられた。僕は諦めた。そしていまは何のもの音もきこえぬ家の中の広さに堪らないほどのうすら寒さを感じて、一日も早く東京へ帰りたいと思つた。僕は裸になつたまま谷底のやうなところに落ちてゐる気持で暗澹として幾日かを送つたが、しかしその気持の惨めさとは関係なく体はどんどんよくなつて僕がいまほどに恢復しきるまで待つべきだつたのだ。もしさうだつたらただ一晩の不眠ぐらゐのことにあんな不覚をとらなくてもすんだであらうに、と何か遠い昔のことを思ひ起すやうな気持で、あの朝持ち出したステッキがいまもちやんとベッドの足許の板によせかけてあるのを見ながら思つたりするのであつた。

或る朝、珍しく崖下の道に自動車のとまる音がしたと思ふとやがて袴を穿いた小柄な男がばあやに導かれて僕の部屋に這入つて来た。見るとそれは僕の先輩でもあり古い友だちでもある画家の楠本であつた。どうして楠本がと思ふのと同時に僕には一切のことが明瞭になつた。たぶん僕の想像してゐたよりももつと多くのことがつゆ子の家の者たちに知られて了つてゐるのである。「やあ、」と楠本は人懐つこい微笑を浮べて僕の顔を見た。この微笑は楠本独特のもので、いまも袴など穿いて来た自分を苦笑してゐるやうな、何とも言へず親しみ深い感じを抱かせるものなので、僕は一時にながい間の暗澹とした気持がけしとんで了ふのを感じた。「やあ、」「どうしました。早くよくなつてよかつたな、」楠本は窓をあけてそとの景色を見乍ら、「なかなか好いところですね、こんなところで二三日ゆつくりしてゐたら好いだろうな、」と言つてから僕の耳に口をつけて、「どうです？　一緒に東京へ帰りますか。一時間ぐらゐしたら迎への自動車が来る筈になつてゐるんだけど、」と言ふのである。やがて僕は楠本に伴はれてこの別荘を去つた朝ベランダの床の上に僕が倒れたのを発見したばあやは、僕をぢいやに任せてそのまま老人たちのいつもの散歩道を追ひかけてその事を報告すると、一方ではつゆ子の姿が見えないのと病気の僕が洋服に着替へて出かけようとしてゐたことを考へ合せて、もしやといふ疑念からみんなで手分をして探すと、つゆ子は山下の橋の袂のバスの停留場で柱に背をよせて立つてゐたと言ふのである。たぶんつゆ子は老人の理義を分けた追求を拒むことが出来なかつたので

あらう。そのまま一緒に東京へつれ帰られたといふことであるが、そののちのつゆ子の消息については楠本には勿論僕にも想像がつかなかつた。たぶん、前のときよりももつと厳重な看視をつけられてどこかに閉ぢこめられてゐることであらうと思ふと、僕はそれについて自分の無力を憐れむほかはないのである。「しかし、どうして僕がここにゐるつてことが分つたの？」「どうしてつて、」楠本は曖昧な表情で笑つた。「四谷から手紙が来てね、」早速西条家を訪れると家令のやうな男が出て来て、強羅での出来事を細かく話して僕を引取りに行つてくれるやうに頼んだと言ふのである。楠本は話さぬけれども西条の家では僕のことから楠本にもあまり快い遇し方はしなかつたであらうと想像して楠本に気の毒に思つた。

再び僕は自分の家に坐つて、妻との口を利かぬ生活を始めた。僕は終日どこへも出かけなかつた。つゆ子のことは出来るだけ考へぬことにしてゐた。けれどもやはり考へないと言ふのではない。ただ冬の間は穴ごもりをして暮す蛇があるやうに僕の恋もじつと動かぬままに燃えてゐたのである。楠本はときどき来てくれた。そして僕が家に落着いてゐるのを見て安堵してゐるやうで、或るときのこと「君ももう平静になつたやうだから、」と言つて僕につゆ子が残しておいたのだといふ封の手紙を渡した。それはいつか僕らが強羅の別荘をひき上げるときに、ばあやが楠本を物蔭に呼んで、東京に帰つてから僕に渡すやうにと言つて言伝けたものださうである。僕はひとりになつてから急いで手紙の封をきつた。あの騒ぎの朝祖父母の眼をぬすんで急ぎ認めたらしいその手紙は何か腹を立ててゐるのかと思ふくらゐに荒々しくせかせかしてゐてその荒い言葉の中に投げやりなもの哀れさが混つていかにも乱れた調子である。「これでお了ひよ。もうお別れよ。さう決めて了つてちやうだい。さう決めて、ね。今日からつゆ子はあなたのものぢやないわ。つゆ子はつゆ子です。あなたはあなたよ。あなたひとりよ。こんな酷いことを書いてどうぞ許して下さいまし。さう思はなかつたらこれからどんなことになるのかはつきり分つてゐるのですもの。つゆ子はいけない女ですわ。つゆ子があゐたらあなたはめちやめちやになつてお了ひになつてよ。ねえ、それが分つて？　一緒になりたいと思つてはいやよ。もう二人は何でもないんですもの。何でもありやしない、つゆ子だつてあなたのことなぞ今日かぎり忘れて了へるんですもの。」僕はしばらくただぼうつと手紙の文字を拾つて読むだけで何が書いてあるのか分らうとはしなかつた。それほどに思ひがけない文意である。「あたしあなたのことがこはいの。僕は何をするか分らないつて、あたしあなたがどんなことをするひとかちやんと分つてるわ。あなたはだんだん底へおちて行くの。つゆ子はそんな気持ではないのに、どうしてもあなたを底へおとすのはつゆ子なのですもの。どうしてさうなるのか分らないけれども、でも二人は一緒になりたいと思へば思ふほど

二人のことをいけなくして了ふんですもの。だんだん自分の穴を掘つてるのよ。ねえ、それが分つて？　あたしそれがこはいの。いまにどんなことが起るかそれが分つて？二人とも死んで了つてよ。でもつゆ子のこはいのは死ぬことなのではないの。その前のいろんなことがこはいの。ね、よく分るでしよ。だんだんだんいけなくなつて来るのが分るでしよ？　ねえ譲二さん。でもつゆ子のことを臆病だと思はないで下さいね。ここで踏止らなくてはさよならにしなくては。大丈夫よ。大丈夫さよならが出来てよ。さよなら。つゆ子は十一月四日の竜田丸でアメリカへたちます。みんなさよならよ。もう決してあたしを探しに来てはいや。」僕はもう一度くり返して読んだ。狼狽て読んだために意味をとり違へて読んだのではあるまいかと思つたり、何かこの手紙の面には現はれてゐない言葉がどこかに隠れてゐるのではあるまいかと思つたりしたのであるが、どこにも読み違ひはなかつた。僕は騒がしい心の中で慌しくあの朝のことを思ひ浮べた。つゆ子は確かに僕と一緒に出奔するためにあの坂下のバスの終点で僕を待つてゐたといふのに、それから祖父母たちに見つかつて東京へつれ帰されることに決まるまでの一時間か二時間の間に、こんなにも気持が変つて了つたといふのであらうか。もし変つたのだとすれば何のためであらう。僕は矢のやうに早く心の中に湧き起るさまざまな答を一つ一つ吟味した。つゆ子ははじめから僕と一緒に逃げようといふ気持などはなくて、ただ毎日僕と話をしてゐる間にだんだん僕の言葉を避けることが出来ないやうになつて心ならずも出奔に同意したといふのであらうか。つゆ子はいま僕から逃れることが出来てほつと息をしてゐるといふのであらうか。さうなのかも知れぬ。もうあの歌舞伎座の騒ぎのあとで、どんなに僕が生活に対して無能力な男かといふことを知り尽して了つてゐる筈だから、一時の気紛れに同意したのだとしてもすぐに醒めたといふのかもしれぬ。僕はさう思ひ乍ら、しかしまださう思ひきれぬ未練の気持から、もしかしたらこの手紙は祖父母に強ひられてその眼の前でわざと書いたものなのではあるまいかと考へたりして、たとひいまのつゆ子の気持がこの手紙の通りであるとしてもどうしてそのままの気持にさせておくものかとそんなことを思つたのである。どうしてアメリカへなぞやるものかと僕はどこにゐるのか分らないつゆ子に向いて心の中で呟いた。いつであつたか僕はつゆ子から従兄がニューヨークの三菱支店に勤めてゐて、つゆ子はその従兄と一緒になるやうに母から言はれてゐるといふ事など聴いたのを思ひ出したのであるが、何となくアメリカへ行くなぞといふことは僕を遠ざけるための一つの嘘であるかも知れぬとそんな気がしてならぬ。それにしてもこの手紙一つで僕はすつかりつゆ子の心を見失つて了つたのであつた。僕はもう少しも、つゆ子のこの手紙の言葉をさへも信じることが出来ぬやうになつてゐる。いままでのどのつゆ子がほんたうのつゆ子なのであらうか。

僕はそれを知りたかつた。すぐにもつゆ子に逢つてつゆ子の口からそれを聴きたかつた。再び僕は一ケ月前の僕と同じやうにつゆ子を探すことに夢中になり始めた。僕のその様子ははたから見たら気違ひじみてゐたことであらうと思ふ。僕はまたあの新橋の有有亭のお八重にたのんで嘘の呼出しをかけて貰つたり、夜おそくまで四谷のつゆ子の家の前をうろついて誰かを送つて来た自動車の出て来るのを待つてその運転手に家の中の様子をききただしたり、何の役にも立たぬことに日を暮して了ひ全く自分を忘れてゐた。その中につゆ子の消息は皆目知れぬのであのアメリカ云々といふことも或ひはほんたうのことで、せめてその日波止場ででもよそ乍らの別れがしたいと思つてゐあして知らせる気になつたのかも知れぬと僕はだんだんさう思ふやうになつて、その竜田丸の出るといふ十一月四日の来るのをただ一つの望みとして待つてゐるよりほかはなかつた。

晴れた寒い朝であつた。僕は一週間ほど前から幾度も郵船に電話をして問合せておいた時間よりも少し早く東京駅から桟橋行の汽車に乗つて横浜へ着いたのであるが、もうそこには出船の用意をすませた船が待つてゐて甲板も桟橋も人で埋つてゐた。僕はその人波を掻き分け分けて船に上つて行つた。一等のプロムナードから中甲板へ出てサロンから食堂と隈なく眼を配つてつゆ子を求めたが、どこにもそれらしい姿は見あたらぬ。僕はちよつとの間人混みの中に立つてゐた。血眼になるといふのはかういふ時の僕の眼のやうなもののことである。どこに隠れてゐても探し出さずにはおかぬと僕はだんだんそんな激しい気持ちになつて、たうとう船の事務長を探し出して船客名簿を見せて貰つたのであるがどの頁にも西条つゆ子の名を見出すことは出来なかつた。「申込だけでもしてはありませんか。」「いや申込もありませんでした。」事務長は不愛想に答へた。その中に見送り人に下船を促す銅鑼が鳴りひびいた。僕は無数の別離の光景の中にもまれ乍らひとりで桟橋へ下りた。出帆の汽笛が空気を裂くやうな音を立てて鳴つた。「ばんざい。」「さよなら。」無数の呼び声が船から響く音楽に混つてこの一瞬の間に何も彼も言ひつくして了ひたいと思つてゐるやうなのである。僕は何のために船が音楽を奏するのかよく分つた。早くお探しなさいとさう言つてゐるのである。僕はテープの間を右往左往した。たとひつゆ子は隠れて了つたとしてもつゆ子を見送るためにつゆ子の父母か祖父母かあの歌舞伎座で見た伯母の誰かがこの人波の中にゐるに違ひない。さう思つたのであるが、僕の眩んだ眼のせゐか誰の姿も発見することが出来なかつた。その中に船は眼に見えぬくらゐの速力で岸をはなれて行く。無数のテープを船側になびかせ乍ら忽ち甲板の人影も誰か見分け難くなつた。僕はしばらくそこに立つて船を見詰めてゐた。もしかしたらつゆ子は僕の眼をさけるために変名して乗つてゐたのかも知れぬ。あの夥しい船の中の人混みに一人の女が隠れて乗るくらゐ何でもないことであらう。僕はみじめな気持になつてもう人影のまばらになつた桟橋を歩いてゐたが、いつの間にかあのつゆ子の手紙を読んだときの激しい気持は失つてゐた。なるやうになれ。僕は何にも抵抗する気力のない自分を哀れみ乍ら心の中で呟いたのであるが、とめどもなく涙が流れた。

その日から僕はしばらく家の中にこもつてゐた。考へるともなくつゆ子のことが心に浮んで来ると、何故かつゆ子はまだ日本にゐるやうに思はれて来るのである。どこにゐるのか分らぬがどうしてもまだ日本にゐるやうに思はれる。或ひはさう思ふことによつて自分を慰めてゐるのかも知れぬが、僕はふと思ひ立つてまた街へ出て見る気になつた。或る日のこと駿河台の町角で明治大学の方へ上つて行く一人の少女の髪をお下げにした後姿がつゆ子に生写しであるのを見て、思はずはつと声をかけさうになり乍らあとを追つて行くと、僕の靴音に気がついたのであらう少女も立留つてこつちを振返つた。見るとつゆ子だと思つたのも道理で紛れもなくあのいつか四谷の家の裏庭に向いた部屋でピアノを弾いてゐた少女である。ほつそりとした肩つきも髪の深い眼ざしもまるでつゆ子のもののやうであり乍ら、その薄い唇に浮んでゐる稚げな驕慢のうす笑ひが気のせゐかと人の心の底まで見抜いて人を憐んでゐるやうなのに眼をとめると、僕の耳にはすぐにあの頃の夕暮に毎日きいたショパンの音がきこえて来るやうな気がするのであつたが、しかしこの失望はすぐに、こんな町角でせめてつゆ子の肉親の者にでも逢ふことの出来た喜びと入り混つた。「もしもし、」と僕は声をかけた。「失礼ですが、西条さんのお嬢さんですね、」少女はだまつて僕の顔を見た。その少女の眼から僕は僕が誰であるかを知つてゐるのを感じたので、むきつけにつゆ子のことを訊いて見た。「やつぱり発たなかつたんでせう?」「いいえ、発つたわよ。」少女ははつきりした声で答へた。「竜田丸で発つたわ。」「竜田丸で?」つて僕は船まで行つて見たんですよ。」少女の眼にあの怜悧な大人のやうな表情が浮んだ。「だつておねえさんは神戸から発つたのよ。」と言つてそのまま喫茶店のあるそこの町角を曲つて行つて了つたのである。呆然として僕はその後姿を見送つた。何といふことであらう。つゆ子は僕の追跡を惧れて神戸から発つたといふのか。僕はそのまま風の吹く街の中でうづくまつて了ひさうになつた。それほどにまで僕はつゆ子を惧れてゐたといふのか。それほどにまで僕から離れて行きたかつたといふのか。今朝までは何となくまだ日本のどこかにゐるやうに思つてゐたつゆ子が、恐らくもうアメリカに着いてその従兄とかいふ男の傍に迎へられ乍ら汽車にゆられてニューヨークへ行くところだといふのか。思ひもかけず僕はあのさかしげな少女の言葉から、つゆ子を囲むその一族の僕に対する根強い蔑視と嫌悪とを知ると、何かこのままにしてはおきたくないといふやうな気持の湧いて来るのを制へることが出来なかつた。だが僕に何をすることが出来よう。恐らく僕はただつゆ子を

失つた記憶のためにだけ僕に残つてゐる力を費さなければならぬことであらう。

○

僕の失恋したといふ話は僕の知らぬ間に仲間の間で噂の種になつてゐたさうな。彼奴、自殺するかも知れぬと言ふ者もあり、しかし失恋なんてするやうな柄ぢやないぜといふ者もあるといふ話を楠本がへうきんな調子を混へてときどき僕に伝へに来た。楠本のこのへうきんさの中には多分に僕に対する友情がこもつてゐた。男が恋をするなんて滑稽なことだぜ、君もさう思ふだらう？　と楠本はそんな口吻で、僕自身にこの破れた恋のことをほんのちよつとした遊び事の始末であつたやうに思ひ込ませようとしてゐるらしいのである。さういふ楠本の調子に僕はひよつとひきこまれることがある。或ひは意識的にひき込まれて見ることがある。さうだ、俺は失恋なんてするやうな柄ぢやないな。僕はさう思つて見るのである。八年前に妻と一緒になつたときのいきさつも、それから外国で一緒に暮したことのある女たちとのこともあんなものはみんな恋ぢやあない。ではそのほかに一度でも恋らしい気持になつたことがあるだらうか。何にもない。恋をするなんて、俺は全くそんな柄ぢやないからな。恋をするやうな振りをすることの巧い西洋仕込みのただのならず者なのだからな。そんな男が、ただつゆ子のことに限つてむきになつて恋をして失恋なんぞするなんて、而も仲間のものから自殺するかも知れぬぞと言はれるなんて馬鹿げたことだ。僕はそんな風に考へて見た。すると何となくあの息苦しかつたつゆ子との結末も一つの滑稽な出来事に過ぎなかつたやうに思へて来る。俺はあの女に惚れてなんぞゐたんではなくつて、ただあの女があんまり遠くへ逃げるのが巧くて遠くからおいでおいでをするのが巧くて、それに吊られて見たのだからな、あんなに親たちが箱入にしたがつてゐる娘を手に入れるといふのも俺のやうなならず者にとつては一つの興味だからな。僕はそんな風に考へて見た。この考へは何となく愉快であつた。僕は久し振りでながい間の息苦しさから救はれるやうな気がして、つゆ子に対して持つてゐた僕の気持の一つ一つを解釈しなほして見た。「たかが女のことぢやあないか。」僕は声に出してさう言つて見た。すると今日からでも以前の自分と少しも違はない自分になれるやうに思へて来る。街へ出て酒ものむしダンスもするし女とも遊ぶし、女とはただ面白く遊ぶことだけしかしようとしないあの以前の自分になれるやうに思へて来る。かういふものの考へ方の方向はちやうど失恋して自暴になる気持と全く同じ方向であつたので、たやすく僕は自分をそこにはめ込むことが出来さうだ。しかし僕はこんな場合に自暴酒をのむのよりももつと虚無的な気持になる。自分では全くあのならず者の習慣に戻つて来たと思ひ乍ら、街へ出て友だちと騒いで見ても面白くは行かなかつた。いつそアメリカへでも行つて見たらどうかな、とふいにそんなことを考へる。メリケン・ジャップと呼ばれてゐる邦人の浮浪人のことを僕はよく聞いてゐる。あんなものになつて生活の目的もなくふらついて暮す気になれたら存外面白いではないかとそんなことを思ひ乍ら、僕はいつの間にかどこかの都会の街角で偶然につゆ子に会ふかも知れぬといふやうなことを漠然と空想する。そしてまるで咽喉が渇いたやうな気持になつて古いトランクを掻き廻して船の時間を調べたり旅費を調べたりしてゐる自分に気がつくのである。だが旅費なぞは一銭だつて出来さうなあてはないし、そんな自分の気持も僕にはほんたうのものかどうか分らなかつた。第一アメリカと日本とではお話にならないぢやあないか、と自分で自分を嗤つて見るのである。いまに何か、かあつと自分ではまり込むやうなことが起りでもしたらすぐに片附いて了ふ気持なのだから、と僕はさうも思つた。そしてそのかあつとはまり込むやうなことをあれかこれかと考へて見たりして、だんだん街へ遊びに出て見るやうになつた。

冬になつてもうクリスマスもぢきだといふ或る朝、やはり同じ仲間の遊び友だちである馬場から電報で面白いことがあるから遊びに来いと言つて来たことがある。馬場とは外国にゐるときからの友だちで、仕事の上の友だちといふよりも陽気に騒ぐときの仲間である。牛込の高台に洒れたアトリエを持つて評判の美しい細君とともに住んでゐたが、夫婦ともに拘束のない新しい風の生活をしてゐるのでいつでも何かごたごたと家庭がもめてゐて、それを面白がる連中や遊び好きな仲間が夜昼となく集つて来てゐた。さういふ馬場のことであるからたぶん変つた女でも呼んでおいて、僕に一種の病気見舞の役目を果す積りなのだらうとさう思つて出かけて行くと、窓のそとからもう蓄音機の鳴る音と若い女の癇高い笑ひ声とが聞えてゐる。僕はステッキで窓硝子を叩いた。「這入れよ。」と馬場が中からどなつた。扉をあけると一人は髪を桃割か何かに結つた日本娘のやうなのと、一人は断髪にしてホールで着てゐるダンサーの着物のやうな思ひきり派手ななりをしてゐるのと、もう一人はミッションスクールの生徒のやうな目立たぬ洋服を着てゐるのと、それぞれ雰囲気をもつた三人の若い女たちの中にる。「このお嬢さんたちはみんな君のファンなのだよ。ぜひ君に会はしてくれつてもう三月も前から頼まれてたんだぜ。」笑ふと糸のやうに細くなる眼の中から津村は津村一流の皮肉をこめて僕に言つた。新宿の書店「津の国屋」の息子である津村はいまでは「津の国屋」の店の支配のほかに文芸・美術雑誌の出版を試みたりして納つてゐるが、その頃はまだ独身でいつか「津の国屋」の階上で僕と馬場との絵画展覧会をやつたことがあつてから一しきり僕らの仲間をひきまはして遊びまはつてゐたのである。「あら、三月ぢやないわ、半年だわ。」断髪の女がまぜつ返すやうに言つた。ストーヴのあたたかさとウィスキーをまぜた紅茶

とで女たちの頬はぽつと紅かつた。僕らはしやべつたり踊つたりした。その間にミッションスクールの生徒のやうな洋服を着た女だけはいつも足を床に投げ出すやうにしてみんなの騒ぐのを見てゐた。「ちよつと貸して下さい。」僕はその女の持つてゐたマンドラをとつて蓄音機のジャズに合せて弾いてゐると忽ち馬場が振返つて叫んだ。「おい、その女殺しのジャズをやめてくれ。」「何を言つてやあがる。」楽器を女の手に返し乍らふと僕は、そのころの流行であつた膝までしかない短いスカートの下から覗いてゐる女の足に眼をやつた。それはちよつと日本人には珍しいきれいな形のほつそりとした足である。僕が眼をあげるのといつしよに女もちらと僕を見上げて眼で笑つた。あとできいたことであるがこの女はもうずゐぶん以前から肺を患つてゐるのだとかで、その病気に特有のぼうつとむくんだやうにぼんやりしてゐる眼鼻立ちが美人といふのではないがいかにも女らしい柔和な感じで、眼鏡はかけてゐなかつたけれども強い近視眼であると見え、ほんの少し離れたものを見るときにもその大きな眼をすうつと猫の眼のやうに細くする癖があつて、奇妙に色つぽい印象を与へる。僕はほかの二人の女にはまるで興味がなかつたが、この女には何となく興味を感じた。しかしそんな気持で自分をけしかけるやうにしてゐたその頃のことであるから、どれくらゐほんたうであつたかといふことは分らぬ。その日は日暮れまで面白く遊んでみんな別れたのであつたが、それから三四日たつた或る日僕は津村に用事があつて新宿の駅前の広場を通りぬけようとしてゐると、バスの発着所のそばにこの間の洋服の女がひとりで立つてゐるのに気がついた。僕はちよつと立止つて、「やあ、」といふやうに気軽な挨拶をしようとしたのであるが、まつ直ぐにこつちへ向いてゐながら僕に気がつかぬやうなのだ。おやおや、こんなに眼が近いのかなと思つてゐると、そこへ慶応の制服を着た背の高い学生がバスから下りて来て女のそばに近よつたと思ふと一緒に声高に談笑しながら腕を組むやうにしてすぐ僕の立つてゐる傍を通り過ぎて行つたのである。「いまそこであの女のランデブウを見て来たよ。」と僕は用談をすませたあとで津村にその話をした。「彼奴がかい?」と津村は眼を細くして笑つた。「しかしとも子はあの中でもまるで恋患ひでもしさうなくらゐ君に憧れてるといふ触れ込みだつたんだからな、」「と言ふのが手なんだよ。あんなのが面白いぜ、」と一しきり冗談を言ひ合つて帰つて来たのであるが、どういふものかそれから三四日たつて銀座へ出たついでにデパートで何かの買物をしてゐると、すぐそばの売場にとも子といふその洋服の女がしきりにネクタイを選つてゐるのにまた出会つた。やはり五尺とは離れてゐないくらゐなのに少しも気のつかぬ風で、やうやく赤い格子のひどく派手なのを一本ぬきとつて包ませてゐるのである。僕はそばへ寄つて肩を叩いた。「まあ、」ととも子はあの猫の眼のやうなうす眼を忽ち大きく瞠いた。「いまの赤いネクタイは君の好きな人にやるんでせう?」「いやな湯浅さん、あれ弟に買つてやつたのよ。」と言つてから、その弟といふのも僕の絵が好きでとても会ひたがつてゐるから一ぺんとも子の家へ遊びに来ないかといふのである。「明日は駄目? 日曜だから明日いらつしやらない? 弟もうちにゐてよ。」そこで僕はとも子に洗足にあるといふとも子の家の番地を聴いて、その翌日訪問する約束をした。

もはや押し迫つた年の暮であるが僕らのやうな生活をしてゐるものには矢張りただの冬の日と変りはない。翌日支度をして家を出ようとするといつもは送りに出ようともしない妻が僕の靴を穿いてゐる背後から声をかけた。「こなひだの契約書に判をしてくれて?」「あんなものは駄目だよ。」僕はうしろへ向かないままで答へた。契約書といふのは二人が離婚しようと話し合ふやうになつてから幾度となくそのどちらかが考へ出しては書いて見た僕から妻に支払ふことになる子供の養育費その他についての約束で、幾度書いて見ても双方の承認しさうなものにならなかつたのであるが、今度も妻がその知合ひの弁護士に相談してつくつたといふその契約書には子供の成人するまで毎月百円づつの養育料を云々と書いてあるのである。「ぢやあ、まるで認めないのね?」「考へて見ろよ。百円だなんて、いまの俺にそんな金が毎月出来るかい?」「出来なきや好いわ。」そのまま押しだまつて了つた。僕には妻の考へてゐることがよく分る。子供を抱へてまる七ケ年のあひだ僕の帰つて来るのを待つてゐた。帰つて来たら離婚するのだといふことが分つてゐたら妻はあの七年の間にもつとほかの暮し方をしてゐた筈である。とり返しのつかない七年間。その妻の失はれた歳月のためには僕は当然、たとひ少しくらゐ無理があるとしてもこの契約書に従ふべき義務があるではないか。さう思つてゐるのである。「理窟を言つても駄目だよ。俺に出来ないことを約束させて見たつてしやうがないぢやないか。」せめて五十円とでも言ふのだつたら何とかなるかも知れないがな、と僕は心の中で思つた。お互ひに一日も早く別れたいと思つてゐながら金のことでうまく相談がまとまらないと言ふのは馬鹿らしいことだと思ふがどうにも仕方がなかつた。弁護士とか訴訟とか契約書とかさういふ言葉の好きな妻のことを僕は少し滑稽に思ひ乍ら町を歩いてゐると停車場まで出る中にそんなことも忘れてゐた。

とも子の家は洗足の駅から近いところにこの頃新しく出来た半洋風の静かな一区劃の邸町の中にあつた。外構へも家の形も純粋なアメリカ風であるのに玄関までの敷石の敷いてある小径の両側の植込もその蔭に見える庭のつくりもどことなく日本風で、その不調和がいかにも現代的な感じを与へる、さういふ家の一つで、ポーチの天井にも中国風の吊燈籠が下げてあつたりした。案内を乞ふととも子があの短い膝までのスカートでばたばたと子供のやうに馳けて来た。「ママあ、湯浅さんがいらしたわよお、早く早く、」

さう急き立てるとすぐあとから続いてとも子の母らしいまだ四十になつたかならぬくらゐに見えるよく肥つた女のひとが出て来た。「ようこそ。」と柔和な愛嬌のあるものごしで応接間へ案内してくれた。古風なシャンデリアのある壁に中国の画幅がかけてある。煖炉の上の棚にも卓子にも何かごたごたと花や置物が飾つてあるのだけれど、それが却つてよく住みこなした家の中だといふやうな気易さを感じさせる。僕は不思議な安楽さを感じてそこに腰を下した。

「とも子がまた我儘なお願ひをして、」「ママは湯浅さんはとても来やしないつてさう言つてたのよ、」「何を言ふんですよ。だつてあなたのやんちやんのお相手をさせられては堪らないぢやあないの。ちよつとさう言つて由やに薪をどつさり持つて来させなさい。」「いやよ。ママ行つてらつしやいよ。その序でに何かおいしいもの拵へて、」「しやうがないのね、」とも子の母は笑ひ乍ら起つて行つた。「好いママだな、」どういふものか僕はこのありふれた母親と娘との親愛を羨しいもののやうに感じた。これが家といふものだな、とそんな気がしたのである。外国にゐたながい間も帰つて来て自分の家に腰を据ゑるやうになつても、何だか仮の宿の続きでしかない僕には考へて見れば家といふものがなかつた。自分でその家といふものの空気をこはして来てゐ乍ら、いま突然、何かずつと子供のときに見失つた懐しいものに会ふやうな気がしたのである。この感じはこののちしばしばとも子の家に出這入りするやうになつてから、僕をとらへて離さなかつたものである。「もうあれで来やしないわよ。ママ。」「ママのことなら何でも君にわかる?」「ママがあたしのことをわかつちやふの。」「どんなやんちやなこともね?」「ええ、」と答へてからとも子は低声で、「あたし病気なんですもの、」と言つた。「知つてるよ、」と僕はごく自然な声で言つた。そしてとも子の手から薪をとつて煖炉に投げ込み乍らちらとその顔を見た。「病気だから君の顔、そんなにきれいなんだよ。君の顔はこんな火のそばにゐても蒼いんだね、」「蒼いの好き?」「好きだよ。」ぼうつとはれぼつたい輪郭のままるで色のない写真のやうに唇の色までうすいとも子の顔は、うまく描けたら面白い絵になりさうな気もする。暫く話し合つてゐる間に僕はとも子の声にも表情にも話をする雰囲気にも、その顔の色に現れてゐるのと同じやうな「無色の面白さ」を発見した。「ねえさんは気取つてるんですよ。」そこへ顔を出した弟が冷かすやうに言つてもとも子は笑つてゐた。間もなく僕は暇をつげた。とも子の言つたやうにしまひまで姿を見せなかつた母親が狼狽てて奥から出て来て、いまに主人も帰つて来るからとしきりに引留めるのを断つて表へ出ると、そこの植込の蔭に急いで出て来たらしく広い毛布のやうなショールを肩から冠つてとも子が立つてゐた。「駅までね?」「スペインの女のやうだよそのショール。寒かない? それだけで、」とも子は軽く首を振つて、しかしやはり寒さうに僕の体の蔭に身を隠すやうにしてついて

来た。風はなかつたが近くに池のある郊外の日の暮れらしい冷たさが肌に感じられる。僕は歩き乍らそつととも子の体に手を廻した。「やつぱり寒いんだね、」「ええ、」うす暗がりの中で見ると尚更おぼろ気なとも子の表情はどうにでも男の言ひなりになる女のやうな与し易さをもつて僕の心を捉へた。僕は立留つてショールの上からとも子の羽毛のやうに軽い体を抱き上げて接吻した。「ね、」ととも子の聴きとれないくらゐに低い声が言つた。「もう一度。」僕はもう一度抱き上げて接吻した。さつきまであの部屋の中で僕を包んでゐた煖炉の温かさや居心地のよい家の中の空気がまだそのまま僕の心に残つてゐて、かうしてとも子を抱いてゐることもその続きの愉しいことのやうである。「もうお帰り。」僕は赤ん坊に言ふやうに言つた。「風邪をひくよ。」「今度はいつ?」「いつでも、」そしてまた翌日もやつて来ることを約束して僕は電車に乗つた。

僕はひどく明るい気持になつた。翌日もその翌日も午後になると家を出てとも子の家へ遊びに出かけたのであつたが、それはとも子に会ひに出かけるといふよりもとも子のゐる家のあの居心地の好い椅子の一つに腰を下してやすみたいと言ふやうな気持であつた。とも子のあの柔和な眼顔よりもさきに、その母親の愛想の好い声や珈琲や明るい灯かげやそんなものが僕の胸に浮んで来るのである。そしてその家の煖炉の前に坐つてゐると、ながい間旅を歩いてゐてやつといま帰つて来たといふ風な安堵の気持になるのであつた。たぶんあのつゆ子との恋のやうな息苦しい圧迫のあとではとも子のやうな女との間柄なぞ恋といふ言葉さへ浮ばぬほどに安易で、そのためだけにでも僕はとも子が好きであつたのかも知れぬ。その中に僕はだんだんと家の者にも馴れて来た。始めの間は若い娘のところへ出這入りする男としていくらか警戒するやうな眼を向けてゐたとも子の父も軈て友だち同士のやうな親しさを見せるやうになつて後にはただこの父とだけ話をして帰つて来るやうなこともあつた。若いときにながい間アメリカで暮したことのあるとも子の父はその家庭生活も全くアメリカ風で、子供たちに対してはよい父であるといふよりはよい友だちであるらしかつた。何でも子供の好きなことをさせる。子供の考へ本位で何でもそれから割出して考へてやるといふ風であるらしかつた。「わたしの生命はほんたうならもうその時にないものなのですからね、」と言ふのが口癖で、若いときに患つたひどい肺患が或る心の一転機によつて奇蹟的になほつた。それは全く奇蹟的である。自分の命はその時までのものであつた筈なのだからその後の自分の生活といふものは全くの「儲けもの」である。その「儲けもの」を生かすためには自分は能ふかぎり人のためになることをしなければならぬと言ふのが口癖で、さういふ自分の処世訓を自分で書いた小冊子を自分の会社の部下の者たちに配布したりして喜んでゐる一種の明るい好人物であつたのだ。僕はこの父のゐるとも子の家庭の朗らかな空気をどれくらゐ

有難いものに思つたか分らぬ。ふいに僕はついこの間まであのつゆ子の家庭から僕のうけた乞食のうけるやうな冷遇を思ひ浮べて慄然とすることがあつた。

年があけて僕はしばらく振りで津村のところへ出かけた。「とも子と結婚するんだつてほんとかい?」津村は僕の顔を見るとすぐに言つた。「そんな馬鹿な、」「しかし専らさういふ評判だぜ。君はそんな気はなくてもとも子の方ぢやすつかり結婚する気でゐるつていふ話だぜ、」相変らずにやにやしながらその細い眼の中に多少の非難の色を浮べて言ふのである。「うるさいぞう、あとで。」「うるさいも何もそんなことになりつこありやしないよ。いまの女房のことだつて片附かないで弱つてるのに、」「だけどとも子は君の家庭の事情なぞ知らないんだらう?」「知つてるさ、とも子もよく知つてるしおふくろさんだつて知つてる筈だよ。」僕はさう答へたが、しかしさうばかりも言へないやうな気もしたのである。とも子は始めから僕に妻子のあることも、それからつゆ子のことも知つてゐて、つゆ子のことは、「一緒にアメリカへ行つて見ない?」などと言つて見たりするくらゐであるのに、妻のことといふとまるで気にもかけてゐない様子なのは、一つは僕が妻との関係を実際よりももつと簡単に解決のつくもののやうに話してゐるからである。自分ではとも子と一緒にならうなどとは夢にも考へてはゐないのに、もしとも子が多少でもさういふ考へを浮べる事のある場合は実際簡単に結婚し得られるのだといふ事を暗示しなかつたとは言へないからである。しかし僕はそのときはそれほどはつきり自分を解剖しはしなかつた。津村の言ふうるさい事などがもし起つたとしてもどうにでもなると思つた。「大丈夫だよ、そんなへまはやらないよ。」「しかしあんな不良少女のやうに見えてても若い女は厄介だぞ。こんがらがつて来るととんでもない馬鹿を見るよ。それに第一、細君と別れるなんてことは僕はとにかくとして、ほかの先輩連中は好い顔はしないぜ。」津村はしきりに僕がもう一度家庭へもどることをすすめるのである。気持はとにかくとして形式だけでもいまの家庭をこはさぬやうにする方が得策だといふ津村の意見は僕に対する世間の思惑を心配してくれる者の同じやうにもつてゐる考へ方なのである。長い間良人の帰国を待つてゐた妻ではないか、とさう言つてゐるのであるが僕にとつてはそのことはもう問題ではなかつた。ただとも子のことでは面倒をひき起したくないと思つたのでそれから暫くの間とも子の家へ出かけて行くことを見合せた。一方、そのことは少しも拘はりのない気持ではあるが、妻との離婚の手続きも一刻も早くすませたいと思ひ、細目にわたる条件はあとで適当に協議するとして、離婚届だけは出しておかうといふことに妻も同意したので、早速届書を書いて妻もそれに署名したのであるが、妻の側の保証人に署名して貰ふといふ段になつて、「どうも離婚届の署名をするのは寝ざめが悪くて、」などと言つて断られたと言ふのである。僕はいやな顔をした。「それくらゐなら始めから保証人になるなどと言はなければ好いのに、」「わたし柴山さんところへ行つて見るわ、あの人なら事情もよく知つてるし、」妻はさう言つてまた出かけたが間もなく戻つて来て、その柴山といふ妻の友人もいま旅行中で二三日しなければ帰らぬと言ふ。僕は何だか妻が故意に保証人の署名だけの残つてゐる手続を遅らせる気でゐるやうな気もしたが、それでも幾分ほつとした気持になつて久し振りで二階の窓から見える風景のスケッチなどしてゐると、階段の下から声をかけ乍ら妻が上つて来た。「ねえ、」と言つて妻はちよつと笑顔した。「あたしたち別れても親類づきあひだけはするでしよ?何か困つたことがあつたら相談しに行つてもよくつて?」「好いよ。」何を言つてるんだと僕は思つた。ときどき思ひついたやうにこんなきれいなことを言つて見るのが癖で、ほんたうはまるで反対のことしかしないやうになる妻のいつものやり方を知つてゐる僕は、そのために幾度も不快な思ひをしたからである。

白けた気持で僕は十日くらゐ家にひきこもつてゐた。すると或る日の午後珍しく馬場が訪ねて来て、「たいへんだよ、とも子がカルモチンを呑んだんだつて、」と言ふ。馬場のところへとも子の友だちであるあのいつかの派手な着物を着た断髪の女のきぬ江がそれを知らせに来て、すぐに僕をとも子の家へ行かせるやうにしてくれと言つたと言ふのである。「そんな馬鹿なことはないよ。カルモチンはカルモチンでも自殺しようとしたりしたんぢや決してないよ。とも子は、ひどい不眠症だつて言つてたからね、」僕は半分は何となく狼狽してゐる自分にそれを言ひ乍ら支度をして家を出たが、どうしてもとも子が自殺しようとしたといふことは信じられなかつた。とも子の家へつくと気のせゐかいつもよりはひつそりとしてゐるやうに思はれた。「お嬢さんは?」と訊くと「お部屋でおやすみになつていらつしやいます。」と言ふ。いつもならばきまつて母親が玄関へ出て来るのであるがとそんなことを思ふのも、暫く来なかつた間にこの家の空気に何か変つたことのあつたせゐかも知れぬ。とも子は蒼い顔をしてベッドに横つてゐた。「どうしたの? また体がわるくなつたの?」とも子は大きな眼をあけて、ええ、と言ふやうにうなづいた。まだ昼の中なのにカーテンの下してある暗い部屋のせゐか、とも子の大きな眼はまるで二つの黒い穴のやうになつて、うすぼんやりとした柔かな頬の翳も何となくげつそりと落ちてゐた。「ながいこと来なかつたのね、」「僕?」と僕はわざととぼけて何かとも子の気に入ることを言つてやりたいと思つたので、「仕事をしてたんだよ。君の顔も描いてるしようとしたのではなくても何か僕のことでとも子を悲しませるやうなことがあるやうな気がして来て、出来るだけいたはつてやりたいと思つたのであつた。間もなく母親が這入つて来た。そしてとも子に気づかれぬやうにして僕を

部屋のそとへ呼んで、「あなた、今夜はお忙しい？」「どうしたんです？　とも子さんがどうかしたんですか？」「ええ、ちょつと。少し喀血したのよ。もしお忙しくなかつたら今夜少しお話したいことがあるんですけれどね、」と言つて女中の手から黒い毛革の襟巻をとつて肩にかけ乍ら、「あたしこれからちよつとほかへ廻つて来るんですけど、さうね、あなた昭和通りの裏にある青葉つていふシナ料理を知つてらして？　あすこへ六時ころにいらして下さらない？」と言ふのである。僕は何となくどきりとした。何か話すことがあるとしてもわざわざおもてで会つて話すほどのことがあるだらうかと思つたが、何れにしても会つて訊けば分ることだ。僕は簡単に母親の申出を承諾した。すると一度玄関まで出て行つてからまた戻つて、「とも子にはだまつていらしてね、気にするといけないから、」と言つた。母親が出て行つてから僕はしばらくとも子の部屋で遊んでゐたが、とも子の何となく脾弱げな痛々しい様子はやはりさつき母親の言つた通りに喀血したあとの衰弱のせゐで、カルモチン云々といふのはただあのお転婆娘のきぬ江の思ひついたおせつかいな芝居であるらしいと解つたので、安心して時間が来るとその昭和通りの青葉といふシナ料理屋へ出かけて行つた。

とも子の母親はもうそこで待つてゐた。「あなた御酒はいかが。少し老酒でも召し上る？」などと言つたりして料理が運ばれてからもなかなか話を切り出さうとはしなかつたが、やがて何気ない調子で、「あなた、もうおくさんの方のことはぢきにお片附きになるんでせう？」と訊くのである。僕は正直にこの間からのいきさつを話したが、こんなことを訊いてゐる母親の気持がどこにあるのかおぼろげに察しられると、僕と妻との間にいつまでも片附かないで横つてゐる金銭上の問題なぞ、おくびにも知らせたくない気がした。「手頃の家があれば僕は自分で越して行きたいと思つてゐるのですが、」といかにも簡単に話し乍ら何となく軽い惧れを感じないではゐられなかつた。果して母親の用談といふのはとも子のことであつた。「パパはさう言ふんですよ。あの子は病気なのだから人並みに結婚させるやうなことは考へないで、英文簿記の勉強でもさせて気が向いたら自分の会社の仕事をさせてやつたり、ゆくゆくは気楽な女実業家みたいなものにでもしてやるんだつて言ふんですけど、でもあたしパパのその意見はどうかと思ふんですよ。病気つて言つたつてあの病気でも結婚する人はよくあるでせう？　それにあれつきり治らないときまつたものでもなし、さういふパパだつて立派に丈夫な体になつてるんですものね、」僕はだまつて酒をのんでゐた。そしてだんだんと母親の言葉の中にまき込まれて身動きの出来なくなつて来さうな自分を感じ乍ら、まだしかし充分に考へをまとめる余地があるやうに思つてゐた。母親はまた続けて、「さうでせう？　何かの境遇の変化でそれがきつかけになつてだんだん丈夫になるかも知れないんですものね。

よしんばまた悪くなつたとしても、」と言ひかけて母親はちよつと口をつぐんだ。「悪くなつて、そのまま死んで了ふくらゐなら、いつそあの子の思つてゐることを叶へてやりたいと、そんなことを思ふのが親馬鹿なのかも知れませんけれども、もしかしたらあの子はぢき死ぬかも知れませんわ。二月か三月かせいぜい半年くらゐの間かも知れないと思ふと、せめて、その間だけでも好きなやうにして暮させてやりたいと思ひますの。あなたはあの子の病気のこともよくご存じなんですし、ね、湯浅さん、ほんの二三ケ月くらゐの間かも知れないんですもの、その間いつしよに暮してやつて下さるでせう？　ね、いやだなんて仰言りはしないでせう？」柔和な眼は何かきらりと光るやうな表情を帯びて僕の方を見たが、見る見る涙が浮んで来てその光りをかくして了つた。僕は狼狽てて眼を反らした。とうに僕はこの母親の問ひに答へる言葉を用意しておいた筈であるのに、思ひもかけぬ涙が忽ち僕の考へを混乱させたのであつた。「そんなにとも子さんはいけないのですか？」「よく分らないんですけどね、」と言つてから母親は人の好い微笑をうかべて、「でもあの子のことだから、どんな工合でひよつとまたよくなるかも知れないでせう？　ね、湯浅さん。だからどうしてもあなたに助けて頂かなくちやならないの。あなたの心配してらつしやるのはただおくさんの方のことだけなんでせう？　おくさんの方さへお片附きになればとも子を貰つてやつて下さるんでせう？」「しかし僕はいまのところ、そんなご相談にのる資格がないと思ふんです。別居でもしてるんならとにかくですが、」「それだつてただ時日の問題だけなんでせう？」「無論さうなんですけれど、」と僕は言葉を濁して口を噤んだ。たうとう、いつか津村の言つた「あとでうるさくなる」ときが来たなと思つたが、この母親を前においてはきつぱりした態度をとることが出来なかつた。やがて母親は僕のだまつてゐるのを見ると何と思つたのか、ふいに気を取り直したやうな明るい調子になつて、「ぢや、あなたもよく考へといて下さいね。今夜のことはとも子にも誰にも仰言つてはいけませんよ。」と言つて、その太つた手首をまげて時間を見乍ら、「もうそろそろお医者さまのいらしてる時分ですからこれで失礼しますけど、ぢや二三日中にまたいらして下さるでせう？」「ええ、伺ひます。」僕らは同じ自動車で京浜蒲田まで来てそこで別れたが、ひとりになると僕は自分の気持が少しもあの母親の申出を拒んでゐないのに気がついた。と言ふよりも僕はとうから今日の来るのを知つてゐてぼんやりと待つてゐたやうな気がするのである。「たうとう俺はとも子と結婚するのぢやないかな、」と考へて見ても、そこから何か身慄ひのするやうな惧れも湧いては来なかつた。

家へ帰ると妻は茶の間で子供のジャケツか何かを編んでゐた。僕は自分で自分の靴を下駄箱に片附けてからそのまま二階へ上りかけたが、ふと足を返して妻に声をかけた。

「柴山さんはまだ帰つて来なかつたのかい？」「まだよ、」妻はこつちを見ないで冷淡に答へた。「だけどあたし、やつぱりいろんな契約をしてからにする積りよ。」「何だつて？」「契約をすませてからにするのが順序だつて言ふのよ。柴山さんはぢきに帰つて来るでせうけれど、」「とにかくここは解散するから手頃な家を見つけとくと好いぜ。君が越してかなきやあ俺が出て行くよ。」妻はだまつて答へなかつたが、その翌日になるとどこからか夜おそく帰つて来て、とんとん二階へ上つて来た。そして何か思惑のある顔つきで、にやにや笑ひ乍ら人の気をひくやうに言ふのである。「ね、あなたはほんたうのところいくらくらゐなら毎月よこせると思つて？」「とに角百円なんて駄目だよ。」僕は妻の心の中に何か変化の起つたことを感じたが、気のつかぬ風でむつとしてゐた。「だから、いくらくらゐなら間違ひなく出せると思つて？」「五十円だな、五十円くらゐならどうにかやれるよ。」妻はしばらく考へてゐたが、しまひには五十円でも好いと言ひ出した。五十円ではただ家賃を払つて喰べて行くだけの金であるが、考へてみればこのままいつまでも喧嘩のやうにして二階と階下とで暮してゐては、子供もいぢけて了ふし、自分もやりきれない気持だからとそんなことを言つて、「あたしこれでまた始めからやり直す積りよ。洋裁のお稽古をしてお友だちと一緒にお店を出すの。ぢやとにかく、明日にでも小さい家をめつけるわ。」と言ひ乍ら生々とした足どりで下りて行つた。

たぶん今日迄つて来た誰かにそんな智恵をつけられて来たのだらうと思ふと、まるでこつちの思つてゐた壺の中へ向うからはまつて来たやうな形であるだけに僕には滑稽に思はれた。

○

それから二三日たつた日の午後、とも子の家へ出かけて行つて見ると珍しくおもての庭でとも子の父親が庭いぢりをしてゐた。「やあ、」と言つて立止ると、手にしてゐたスコップを捨てて急いで縁側から僕を招いて、いつもの応接間の方ではなく自分の居間の方へ案内した。「この間はやす子が何かお話ししたさうだが、君がとも子を貰つてやつてくれれば実際たすかるよ。君ならあの子の病気のことも分つてくれるんだし、実を言ふとあの子を貰つてくれるやうなものはあるまいと思つて諦めてゐたんだからね、」「とも子さんはもう好いんですか？」「けふ君が来なかつたらこつちから行つて見ようかと思つてたとこなんだよ。病気なんぞどこかへ飛んでつて了ふさ。善は急げだからね、ほんの内輪の者だけよんで、それこそ形ばかりの結婚式をしたらどう言ふものかね。おうい、誰か二階の書斎から暦をとつて来ておくれ。」と奥へ声をかけるのであつた。とも子の母親はもう僕がとも子との結婚を承諾したもののやうに報告したのであらうが、いま父親の口からこんな言葉をきいても僕は驚きはしなかつた。いつの間にか僕は自分の

曖昧な態度でとも子の両親にさういふ考へを抱かせて了つてゐたし、また自分でもこのぬくぬくとした温かさうな家庭の一人となるかも知れぬとふと思ふことがあつた。どつちでも同じことだ。あの腐りかけた女房との縁をきつてとも子と二人で新しい家を構へ、ときどきこの父親と母親が訪ねて来る。さうなつても構はぬやうな気がして来た。やがて父親は女中の持つて来た暦をめくつて、何日はさんりんぼうだとか友引だとか僕にはよく分らぬことを口にしながら、気早やにももう結婚式の日取りをきめようとしてゐるのであるが、それも十四五日さきの日からだんだん間近かの日にさかのぼつて来て、最後に「二十三日にしよう。少し早過ぎて気忙しいが、二十三日が一番日が好いから、」と言つたその二十三日までは、その日から五日しか間がなかつた。僕は困つた。その五日の間に何も彼も辻褄の合ふやうに運ぶことが出来るだらうかとそれが心配であつたが、この父親のせき込んだ調子をとめることは出来さうにもなかつた。「改まつて式をするにも及ばないと思ふんですけどね、」と言つて見たが、「ほんの申訳だけのことにしておくさ。会社の方の手前もあるからね、」と言ふのである。間もなく母親もやつて来て、会場はどこの何屋にしようとか、仲人は誰になつて貰はうとか、ばたばたときまつて了つて見る見る中に僕はこの家の花婿といふことになつたのである。「湯浅さんちよつと、」と母親はあとで僕を小蔭へよんで心配さうに言つた。「おくさんの方のお宅はもうおきまりになつて？」「何だか今朝さがしに出かけたやうですよ。」「さう？　そいぢやもう安心ね、」といかにも安堵したやうなその顔付を見ると僕は妻のことなど何でもない倒になつたとしてももうかうなつた上は是が非でも押し通さねばならぬのであるから。

僕は何となくせき立てられる気持で明るい中に家へ帰つて見ると、妻はまるで門口に起つてゐるやうな感じで僕の帰るのを待つてゐた。「ね、とても好い家があつたのよ。六畳と四畳半と三畳とで十三円なの。」「もう決めて来たのかい？」「だから一緒にちよつと行つて見てよ。よかつたらあたし、すぐに明日の朝越しちやふの。」何といふまいことだと僕はひそかに喜びながら妻のあとから行つて見ると、省線の線路に近いけれども庭には梅の木などが植ゑてあつて、それでもちやんと門構へになつてゐる。古びた家ではあるが居心地は悪くなささうに見える。「好いぢやないか、」「ね、好いでせう？　家賃が十三円ていふのが気になるけど這入つてからあたし十二円にまけさせる積りなのよ。」とそんなことを言つてはしやいでゐる妻は僕の心の中など疑つて見たこともなささうであつた。あくる朝に僕も起きて一緒に引越しの手伝ひをしてやつたが、新しい家に障子を貼り茶箪笥長火鉢と列べて見るとそれでもちんまりした好い家になつた。「ああ、うれしい。ね、きつと

五十円づつよこしてよ。どうしてあたしもつと早く越さなかつたかと思ふくらゐだわ。一緒にゐたんぢや、あなたはあたしにお小遣もよこさないんですもの、」と言つて笑つてゐる妻の顔は心から嬉しさうであつた。やがて僕はひとりで古い家へ帰つたが、もう灯りのつく頃なのにまつ暗なまま家財道具の全部を運び出したあとの家の中はまるで洞穴の中のやうに寒かつた。僕は二階へ上つてそこに残つてゐる画架やカンバスの中にごろりと横になつてながい間ぼんやりと寝てゐた。たうとう俺はひとりになつた。さう思つて見ても何の喜びも浮んでは来なかつたのである。

翌日僕は二三枚の絵を携へてそのころ僕のパトロンであつた麹町の或る書房の主人を訪ねた。そしてありのままに今度の新しい結婚のことも話したが、つゆ子とのあてのない恋愛を不安がつてゐた主人は却つてこの境遇の変化を喜んでくれたらしく、だまつて金を五百円渡してくれた。僕はその金を持つてすぐに家を探して歩いた。あの洞穴のやうな寒々とした家の中には一日もゐたくないと思ひ乍ら大森の山の手を歩いてゐると、ついこの間まで西洋人の夫婦が住んでゐたといふ手頃な洋館を見つけてすぐにきめて了つた。そしてその足ですぐ洗足のとも子の家へ行つて家のきまつたことを知らせた。「まあ宜かつた。パパが呑気だからどうなるのかと思つてたんですよ。ぢやちよつとご一緒に行つてどんなお宅か拝見させて頂きたいわ。」と言つてもうコートを着ようとしてゐる母親のそばから、とも子も一緒に見に行くと言ひ出した。「駄目よあなたは。また悪くなつたらそれこそ困るぢやないの。」「大丈夫よ。ねえ譲二さん。風にあたらなければ大丈夫ねえ、」と言ひながらまだやつとベッドの上へ起きられるやうになつたばかりだといふとも子は、肩で荒い呼吸をしながらさきに立つて自動車にのつた。僕はそのとも子の細い足に毛布をまいてやつた。「あんまり好い家ぢやないよ。」「好いわどんなお家でも。あたしお家の中であの木履を穿くのよ。ね、ママ。」などとも子はまるで遠足に行く子供のやうに愉しさうであつた。木履といふのはとも子が誰かの帰朝土産に貰つたのだとか言ふものである。洗足から大森のその家までは車で行くと七分とはかからなかつた。古い樹立に包まれた尖つた赤い屋根は二階の窓の白いペンキを塗つた鉄扉に陽をうけて遠くからも見える。「まあ好いお家ですこと。この垣根はとも子ちやんの好きな薔薇よ。」母親はとも子を顧みて笑つた。思つたよりも気に入つたらしく二人は熱心に部屋々々を見て廻り、この窓の下にはピアノを置くのだとかこのベランダには犬を繋ぐのだとかそんなことを相談してゐた。「案外日あたりも好いでせう?」僕は低声で母親に囁いた。いつの間にか僕はこんなことになつてゐる自分自身に馴れてゐたのである。

翌日僕は蒲田の家から僕の絵などを運んで来た。家の物はみんな妻の家の方へやつてしまつたので、何も彼も新しく買ひ調へなければならぬ。僕は一日かかつて洋家具の古

道具屋をあさつて長椅子や飾り棚を買ひ入れたり、窓かけを張つたりした。洗足の家からもとも子のいかにも女の物らしい派手な調度が届けられた。やがてあさつてはいよいよ結婚式だといふ日になつて僕はそれでもごく僅かの今度の事情をよく知つてゐる友人たちに向けて簡単な招待状を出した。A、B、C、それに楠本、馬場、津村とその宛名を記しながら、その一人一人の顔つきを思ひ浮べて彼らの中の一人でもこの結婚式に列なるものはあるまいことを感じた。「結婚式だつて? 一体誰とまた結婚しようと言ふんだい?」「なあに二重結婚でも三重結婚でも彼奴は平気でやるよ。いまに面白いことになるぜ、」「とにかくあの細君と別れるなんてそんな不道徳なことは世間が許さんよ。」彼らの思つてゐるらしいことが僕にははつきりと分るやうな気がしたのである。構ふことがあるものか。どつちにしても僕はあのままの生活を続けてゐることは出来なかつたのだ。誰も来ない結婚式に僕は平気で坐つてゐられるだけの覚悟をきめてゐよう。やがてその日が来た。僕は支度をして会場である芝の如水館へ出かけて行く前にとも子の家へ寄つた。「いらつしやい、」と母親はさすがに隠しきれぬ喜びを頬に浮べて、「たいへんなんですよ。まるで戦争のやうな騒ぎなの、」とも子の学校友だちらしい美しく着飾つた娘たちが花束を抱へておほぜい祝ひに来てゐた。家の者たちはその中を右往左往して、どうかすると僕の来てゐることも忘れて了ふ有様であつた。おもてにはもう迎への自動車が来てゐる。「とも子さんはどうしました?」「とも子。とも子ちやん。まあどこにゐるんでせうねえ、」僕はひとりでさきに靴を穿いて玄関に立つてゐたが、とも子はなかなか姿を見せなかつた。何気なく庭園の植込を廻つてけの隙間から内玄関の上り框のところにとも子と一人の背の高い慶応の制服を着た若い学生が立つて何かひそひそと話し合つてゐるのが見えた。はつとして僕は植込の蔭に体を隠した。いつか、それはまだとも子と知合になつた始めのころ、新宿の駅前のバスの発着所のそばでとも子と落合つて一緒に腕を組むやうにして僕の前を通りすぎて行つたあの慶応の学生であることを僕は思ひ出したからである。うす桃色の華やかな婚礼衣裳を身につけたとも子は大きな花束を抱へたまま眼にハンカチをあてて泣いてゐる様子であつた。「やつてるな、」僕はひそかにさう思つた。そしてまるであのアメリカの写真に出て来る家庭を馬鹿にしてゐる洒落者の良人でもあるやうに妻のローマンスをも見てゐぬ振りをして馬鹿にする積りでゐたのであるが、そつとその窓口から離れてひとりで自動車の中に身をかくすと、それでも何か穏やかでない気持であつた。あの女が泣いてゐる。僕と一緒になりたいと言つてカルモチンまでのんだといふことになつてゐるあの女が泣いてゐる。僕はちよつと白けた気持になつて煙草を吹かしてゐた。しかし考へて見るまでもなく僕は始めから、このとも子との結合によつ

て人生の新しいスタートに立つといふのに適はしい明るい希望とか愉しい期待とかを抱くやうな気持とはまるで遠いところにゐたのである。とも子を愛したといふよりもとも子の家のあの温和な雰囲気に心を惹かれて、そのためにただ僕の生涯の将棋の駒を一つすすめて見る気になつただけのことであつた。やはり僕にはあの洒落者の良人の役が一番自然だな、とそんなことを考へてゐるところへとも子が母親に助けられながら出て来た。「困つた赤ちやんなんですよ。お嫁に行くといふのにやつぱりこの家を出るのが悲しいんですつて、まあごらんなさい、こんなにお眼々をあかくして、ほほほ、」母親は明るい調子で僕にさう言つたが、勿論さう思つてゐるのではないことが僕にはよく分つた。会場にはもうおほぜいの人々が来てゐた。ほんの内輪の者だけ五六人と言つてゐたが、もうそこには四五十人の人たちが集つてゐた。それらは全部とも子の家の親戚の人たちか、とも子の父親の会社の人たちかで一人も僕の知つてゐる者は来てゐなかつた。父親はその一人一人を僕に紹介したのちに幾度も低声で僕に囁いた。「どうしたんだらう、誰方も見えないやうだね、」「みんな呑気な奴ばかりですからね、結婚式なんて冗談くらゐにしか思つてないんですよ。」僕にははつきりと誰も来ぬことが分つてゐたが、父親はこのときになつてもまさかと思つてゐるらしかつた。「もう少しお待ちして見ませうよ。」と母親も言つた。とも子はまださつきの涙のためにぽつと腫れぼつたい眼をしておほぜいの友だちに囲まれながら、ときどきちらりと僕の方を見た。三人とも言葉には出さぬが何か失望を感じてゐるのである。あゝは言つてもいまに自動車がとまつてどやどやと友だちたちがやつて来るであらう。そしてどこからか嗅ぎつけた新聞社の写真班がやつてきて、あつちからもこつちからもぱちぱちとフラッシュをたくであらう。さう思つてでもゐるらしいのであるが、僕の方ではまた親類縁者には勿論、新聞社にも雑誌社にも友だちにさへもさう大きな声では知らせたくなかつたのだ。やはり僕は世間の人の思惑を惧れてゐたと見える。あの馬鹿げきつた長い間の芝居の科白である妻を捨てたの捨てないのと言ふ言葉がいつの間にか僕の頭にもしみ込んでゐたと見える。とにかくここで一先づとも子と一緒になつておいて、それからだんだんと世間の明るみへ出て行かうと思つてゐた僕ははじめから人を招ぶ気はなかつたのであるが、しかしいまになつて見ると、何といふへんなことになつたのだらうと思つた。花婿の側の客は一人も来ない。こんな結婚式があるだらうか。或ひはこれがこれから始めようとするこのとも子との生活の上に何か不確かな可笑しなものを感じさせる一番はじめの事になるのかも知れないな、と僕はひそかに考へたが努めて平気を装ふやうにしてゐた。「何しろあんまり急だつたからね、いつ君は招待状を出したの?」「をととひです。」「をととひ?」と父親は穏やかな調子で訊き返して、「をととひぢやまだ招待状を見ない人もあるさ、」そ

れをただ一つの重要な理由でもあるかのやうに言つて、ではあんまり時間が過ぎぬ中に始めた方が好いだらうと言つてゐるところへ、津の国屋の若主人である津村が羽織袴に身を固めて生真面目な顔をしてやつて来た。「やあ、」と僕らは眼で挨拶した。この津村が僕の側のただ一人の客である。ほつとして僕は津村を父親に紹介すると、やつとまるでそれが合図のやうにして式を始めたのである。人々は卓子についた。そして型の通り祝辞が述べられ花婿花嫁の紹介がすんで式は無事に終つた。そして僕が津村の姿を眼で探したときにはもうどこにも見えなかつた。「ぢやああたし、ちよつとお宅へよつて見ませうね、」母親はほつとした表情をして僕ととも子との車に一緒に乗つた。暗い京浜国道を僕は言葉少く車を走らせた。僕らはどこからこんな奇妙なところへ這入り込んで来たのかよく分つてゐたが、しかし誰もそれを口に出すものはなかつたのである。

家へ曲る坂の上から、どの窓にもあかあかと灯りがともつて何かクリスマスの夜のやうに見える家の様子がうかがはれた。留守の間に洗足の家から、とも子について僕の家へ来ることになつた女中がもう来てゐてすつかり家の中を片附けておいたのである。「もうみんなお支度はすんだのね?」と母親は迎へに出た女中に訊いてゐる。靴をぬいで上ると、これが半日前に僕の出て行つたあの同じ家の中とは思はれぬほどにきちんと片附いてゐて、つい二三日前に古道具屋から掻き集めて来た家具の類が、もうずつと前からそこにあるもののやうに落着いてゐるのである。部屋の中は瓦斯ストーヴで適当にあたためられ、卓子の上には花が生けてあつた。風呂も湧いてゐた。それはまるでもう幾月も前からそんな風に生活して来た家の中のことのやうに極めて自然にさうなつてゐるのを見ると、僕は何とも言へず不思議な気持になつた。この半日の間に、僕の家の中にあの洗足の家の温和な空気が流れ込んで来たのである。これが家といふのだ。そして家といふものは良人が何を考へ、また妻が何を思つてゐようともそのことには関係なく平和にあたたかに営んで行くべきものなのだ。僕はそんなことを考へた。女中が温かい紅茶を運んで来た。「さあ、そろそろお暇しませうね。もうお邪魔になる時分でしよ?」とそんなことを言つて母親は軈てひとりで帰つて行つた。

二人きりになるととも子は何となく憂欝さうに見えた。「どうしたの?」と僕は穏かな調子で訊いた。白いガウンに着替へてベッドに横はり乍らぢつと暗い眼をして遠いところを見てゐるとも子の気持は僕には何となく分るやうな気がする。とも子は今夜の式のことを若い女らしい気持から、もう少し違つたもののやうに考へてゐたのである。結婚式、外国帰りの新しい画家である湯浅譲二と結婚する。その湯浅譲二は仮令どんな男であつてもその譲二の名前をもつた男と結婚する。おほぜいの名士が列席して明日の朝の新聞には花束の蔭で笑つてゐるとも子の大きな写真がのる筈であつた。さういふとも子をとも子のおほぜいの学校

友だちたちは見に来たのであつたのに。そして恐らくとも子はそのあとであの洗足の家で別れて来た若い学生のことを思ひ浮べてゐるのである。「どうしたの?」と僕はまた繰り返した。とも子は鈍い眼ざしを僕の方へ向けた。「とても疲れちやつたの、」「ぢやあおやすみ。明日の朝はゆつくり寝るんだよ。」僕はもうすつかりあの洒落者の良人の役に馴れたもののやうに優しくさう言つて、起つて窓のカーテンを下した。そして傍によつてとも子の熱つぽい額に軽く接吻すると、手をのばして夜卓の上の灯りを消したのである。

○

僕ととも子との生活はその翌日から始つた。式のこともあの若い学生のこともまるで忘れて了つたかのやうに朗らかな朝であつた。僕らは連れ立つて洗足の家へ行つた。二人が来たら帰りに父親の会社へ寄るやうにと言ひおいて出かけたと言ふので、僕らはまた京橋のその会社へ父親に会ひに出かけた。父親は上機嫌で昨日も如水館へ来てくれた会社の重役たちにまた改めて一人一人に僕を引合せたり、「文化人の新家庭にはぜひとも必要だから、」と言つてその会社の商品である電気器具電気装置のカタログを卓の上へ拡げて一つ一つ肩のところに印をつけ、「これだけのものを今日の中に君たちの家へ届けさせることにしよう。」と言つたりした。そしてそのあとで僕だけをそつと別室へよんで、母親からきいて心配してゐるのだが、と僕の別れた妻のことを訊くのであつた。「こんなことを言つては失礼かも分らないが、少しくらゐの金で話のつくものなら僕の方で何とかするから、戸籍の方もはつきりと片を附けたらどうかと思ふんだが。とにかくここまで折角漕ぎつけて来たんだからね、何とか巧く舵をとつて行かなくちやあ、」「そのことならもう大丈夫なんです。」と僕はその瞬間に心に浮んだ一抹の不安を押へてこともなく答へた。「もし何か面倒なことが起つたとしてもお父さんとは関係のないことですよ。僕の方だけのビジネスで済むことですから決してご心配をかけるやうなことはない積りです。」「さうかな、君の口からさうはつきり聴くと安心するやうなものだが、」とまだどこか得心の行かぬらしい顔付であつたが、とも子にそんな話をしてゐるところを知らせたくないのであらう、すぐに気を替へた様子で、これから三人で三越へ行つて見ようと言ひ出した。「新世帯の買物のおつきあひをして上げよう。二三十年も昔にやす子とアメリカで歩いたのを思ひ出すよ。」などと言つて三越へ行くと鍋釜の類からお座敷天ぷらの道具まで自分でさきに立つて買つたりするのであつた。父親には何と言つても娘が結婚したといふ始めての経験が愉しくて堪らぬといふ風なので、僕らもそれに調子を合せるやうにつとめてゐると、いつの間にか新婚生活者らしい明るい気持になるのであつた。

とにかく二人の生活は思つたよりも平和であつた。あの

若い学生のことなど或ひは僕の思ひ違ひであつたかも知れぬと思ふくらゐにとも子は快活であるし、僕もまたどこまでも洒落者の良人として若い妻を愛撫することを忘れなかつた。これでも好いのだ、と僕は思ひ始めた。このまま巧く行けば僕は案外落着いた気持になつてだんだんと仕事をする習慣をとり戻すやうになるかも知れぬ、とそんなことを思ひ始めた。生れて始めて僕は煖炉を囲んであたたかい珈琲をのむことの出来る家庭を持つたのだといふやうな気がして、しばらくの間その幸福感の中で過ごしてゐた。すると始めの間は僕らの新しい生活を敬遠してゐた僕の友だちたちも、ここまで僕が横車を押し通して来たのを見ると一人また一人と近づいて来て、何時の間にかまたもとの通りにしげしげと往復するやうになつた。僕らはよく馬場夫婦に誘はれて帝国ホテルの踊りに出かけて行つたりした。或る夜も一緒にそこで落合つて、いつもの習慣の通りに馬場はとも子と僕は馬場の細君の夏枝と組になつて踊つてゐたのであるが、手を夏枝のほつそりとした胴に廻してゐると薄いイヴニングの布地の下に背中の骨の分るくらゐ痩せてゐるのを感じて僕は何気なく、「ずゐぶん痩せましたね、」と言つた。夏枝は返事をしないで微かに、はあ、と溜息をついてから、「ねえ譲二さん、あなた一緒に行つてくれない? 何だかあたし体の工合が悪いのよ。」「どこへ行くんです?」「どこでも好いの、温泉場かどこかでしばらく休養したいの、」夏枝の低い声は騒々しいジャズと靴音との中でもはつきりと聞える。このごろになつて馬場の家庭はその家庭らしくないまでの自由のために、もうぢきに破壊されさうなところまで来てゐるといふ噂があつて、馬場はこのごろ近づきになつた年の若い新しい恋人に夢中になつてゐる。その夜も夫婦と一緒にその恋人も来てゐるのであるから、この夏枝の低い溜息もそんな家庭の雰囲気をかこつてゐるためのものかも知れぬと思はれたが、しかしもともと好んでさういふ自由さの中で暮して来た夏枝が、ただ今度の馬場の恋人のことに限つてくよくよしてゐるのだとも思はれぬ。「温泉も好いな、」と僕はあたらず触らずに答へた。「僕のところでもとも子が少しいけないやうだから、何なら一緒に出かけても好いな、」話すことを忘れてゐたが、とも子は僕の家へ来てからもときどき体が悪いやうだからと言つては医者のところへ出かけて行つた。とも子の従兄にあたるとか言ふ男が伝染病研究所へ出てゐるのでとも子は二日おきぐらゐにそこへ出かけて行き、帰つて来るといかにも気力のない顔をしてぐつたりとベッドの上へ体を投げたまま口も利かれぬくらゐであつた。それでもすぐに翌日は元気になつて僕をせき立てるやうにしてこんなところへ踊りになどやつて来るのであつたが、体のためにはやはり東京を離れてどこか山の温泉へでも出かけて見る方が好いかも知れぬと思つたので、その帰途の自動車の中でとも子が夏枝のことを、「ずゐぶん仲よく踊つてたのね、」と言ひ出したときに、僕は温泉ゆきの話を持出し

て、「一緒に行かないかつてさう言つたのさ。いやかい君は？　みんなで一緒に行つて騒ぐのも気が変つて面白いぜ、」「あなたつたらほんとに感が悪いのね、」ととも子はきらりと光るやうな眼を向けて僕に、「一緒につてのはあなたと二人きりで行かうつて言ふことぢやないの、」と言つて酷く不機嫌になつたことがあつた。

この頃からとも子は眼立つて浮かぬ顔をするやうになつた。もともと無口な方ではあるが、前にはその無口の中に柔和な蔭のやうなものがあつてそのために却つて人の心を惹いたのに、今ではそれがむつつりとだまつてゐる風に見えた。一緒になつてまだ二ケ月にもなるかならずでこのとも子の変化は何から来るのか僕にもぼんやりと解つてゐたが、僕との生活について若い女らしい華やかな幻想を抱いてゐたものとすれば、何れ一度は来なければならぬものであつたかも知れぬのだ。或る日のこと僕は何気なくおもてから帰つて来ようとすると家のポーチのところに別れた妻のまつ代が何かとも子と言ひ争つてゐるらしいのを見たのである。留守だからまた来いととも子が言つてゐるのに、いや帰つて来るまでここに立つてゐるとそんなことを言ひ合つてゐるらしかつたのであるが、はつと思ふ間にまつ代がこつちを振返つたので僕は構はず這入つて行つた。「とにかく上つたら好いぢやないか。」「もう少しで玄関払ひにされるところだつたわ。」濃い化粧をした頬にひき吊るやうなうす笑ひを浮べてさう言ふまつ代を尻眼にかけるやうにして僕はとも子に、「ちよつと話をつけるからその間君は居間で待つてゐ給へ。」といふととも子も蒼ざめた神経的な顔をして、「いやよ。あたしもご一緒にお話を伺ふわ。」といふのである。僕は肚をきめた。一緒に応接間で向ひ合ふとまつ代に、「話は何だ？」「素敵なお住居ね、」人形の飾つてあるピアノや燃えてゐるガスストーヴや窓掛けなどの上にまつ代は視線を移しながら、「こんなご殿のやうなお家にあなたは住まつてて、あたしは鼠の巣のやうなとこに住んでるのよ。」「ふん、」と僕はわらつた。「君が鼠の巣のやうなところに住んでれば俺も鼠の巣のやうなところに住まなきやならないつて言ふ訳はないぢやないか。用事つてのは何だい？」「頂くものを頂きに来たのよ。」「頂くもの？」と思はず僕は声を立てて、「そんなことはちやんと片が附いてる筈ぢやないか。それで好いつて承知しときながら、いまになつて何を言ふんだ。」「何か証拠があつて？」とまつ代は冷やかな低い声で言ふのである。証拠だと？　僕にはまつ代がどんな考へをもつてここへやつて来たのかといふことがはつきりと分つて来た。毎月五十円づつの金をやるといふ口約束だけで僕とまつ代とはまだ一札の法定的な証文を取交してゐないそのことをまつ代は言つてゐるのである。「下らぬことを言ひ出すと馬鹿を見るぜ、」僕も負けぬ気になつて言つた。「あの時の約束が気に入らないと言ふのなら止めにする許りだよ。俺の方ぢや別に困つたことはないからね、」「そんなおどかしには乗らないわ。あの時といまとではまるで事情が違つてるんですもの。ええ違ひますとも。東京へ出る電車賃にもこと欠いてゐた頃のあなたと、こんなお金持のお嬢さんと一緒になつてるあなたとでは月とすつぽんほどの違ひよ。あなたはわたしが今日までだまつてたのをただうまうまとあなたの手にのつて瞞されてゐたのだと思つて？　あのまま瞞されて泣寝入りになつてゐたのだと思つて？　そんなにあたしお人好しぢやないことよ。」「とうにそんなことは知つてるよ。しかし念のために言つておくが、どんなお金持のお嬢さんと一緒になつたところで俺が金持になつたとは限らないからね、一体何万円くらゐほしいと思つてるんだい？」僕はまるで茶化して了ふ積りでさう言ふと案外単純な性質のまつ代はそれを真にうけて、「さうね、」と言つてからふいと固い表情をくづしてうす笑ひを浮べた。「ちやんとあたし調べたのよ。とも子さんのお宅がどんなお宅かつて言ふことも、どんな積りであなたがとも子さんと一緒になつたかつて言ふことも、だから分つてるわ。あたし一万円頂く積りよ。」「冗談ぢやないよ。」僕は呆れて答へた。「一万円はおろか千円も出せやしないからその積りでゐるが好いよ。第一こんなことをここへ言ひに来るなんて、やつぱり君は君のお母さんの娘だよ。」まつ代の母といふのは一種の訴訟狂とも言ふべき型の女で、もう死んで了つたがその一生の間弁護士を手離したことがないと言はれるくらゐで、まつ代自身も何かといふとその母のことを笑つてゐたものであるが、腹立ちまぎれに僕はそんなことまで言つたのである。「好いわ、お母さんの娘でも、」まつ代は蒼い顔になつた。「あなたがその気ならあたしとも子さんに聴いて頂くわ。ねえ、とも子さん。」ととも子の方へ椅子をゐざらせるやうにして向き直つて、「あたしいまお聞きになつたやうなことを平気で言へる厚かましい女なんですけど、でもあなたに同情して頂けると思つてゐるんですよ。あなたはまさかこのひとがただの独身だと思つてらした訳ぢやありませんでせう？　あたしのことも子供のこともちやんとご存じの上で一緒におなりになつたんでせう？」「馬鹿！」僕は思はず大きな声を立てた。「そんなことを言ひ出して何になるんだ。そんなに金が欲しいんだつたら勝手に訴訟でも何でもしろい！　訴訟でも何でもだぞ。ふ、厚かましい女がきいて呆れらあ。さあ、出て行つてくれ。二度とこの家へやつて来たら承知しないぞ。」まつ代は反射的にショールを持つて起ち上つた。そして二三歩あとずさりをし乍ら冷笑して、「やつぱり痛いところは痛いのね。そんな恐しい顔をして見せたつて駄目よ。どんな顔して見せたつて通用しやしないわ。」とさも憎さげに言ひ捨てて出て行つて了つたのである。

まつ代が帰つて了ふととも子は居間へ這入つてベッドの上へ体を投げ出したまいつまでも泣いてゐるのである。「分つてるぢやないか。あんなことを言つたつて何にも出来やしないよ。あいつの言ふのは形式的なことだけなんだ

から、形式的なことなんぞ君は笑つて聴いてくれると思つてたんだが、」「だつて、」とも子は顔を上げないで泣きじやくり乍ら、「法律的にはそれが一番大事なことなんだもの、」「法律的にはだつて？」僕は途方にくれてわざと子供をあやすときのやうな口調になつて、「そんなことが気になるの？　よしよし、ぢやあいまにそれもすつかり解決して上げるよ。ふいにそんな分らず屋になつて僕をまごつかせるなんて吃驚するぢやないか。」「いや！　いやよあたし、」とも子はなほのこと悲しげに肩を慄はせて泣いてゐるのである。その細い肩や波打つてゐる下げ髪を見てゐる中に何故ともなく僕は、いまとも子が泣いてゐるのはまつ代が来てあんなことを言つたからといふのでなく、この僕との生活の全体を何かに訴へてゐるのだといふ気がして来た。まつ代が現れるまではつきりと姿を見せなかつた生活への不満が形をとつて見えて来たのだ。しかし何とかなるだらう。僕はとも子が悲しんでゐるといふことよりも自分でそれに気がつくのを惧れて狼狽してそれを打消すのであつた。これくらゐのことでへたばつて了ふほどならこんな危い橋を渡ることはいらないのだ。危い橋。しかしその危い橋には何の目的があるのだらうか。この橋を渡つたらの向うは気の楽な安全地帯だとでもいふのだらうか。僕のやることはどこまでもただ危い橋で終るだけだ。さういふ暗い考へと一緒に、まつ代に対する嫌悪と腹立ちとが新しく僕の胸に燃え上つて来た。まつ代に対する僕のいはゆる理不尽な行為なぞそれが何であらうといふ気がして、慰藉料の何千円は愚か月々の扶助料さへもやりたくないといふ気がして来た。いやで堪らなくなつて来た女に何のために金をやることがいるものか。僕は単純にさう思ひ込んだのである。

そんなことのあつた翌日僕はとも子の好きな犬を見るために銀座裏の犬屋へ行つて帰つて来ると低い垣根ごしに通りから見える食堂のテラスのところで丈の高い学生服の若い男がこつちへ背を向けてとも子と立ち話をしてゐるのが見えた。僕はすぐ、しばらく忘れてゐたあの慶応の学生だなと思ひ出したのでわざと口笛を吹き乍ら潜り戸から庭へ廻つて行くと、とも子は少し狼狽てた風でその男を僕に紹介してから、「国ちやんのお友だちなのよ。」と弟の国雄の名を言つてここの前を通りかかつたからちよつと寄つたのだとその男に替つて言ふのであつたが、前にも幾度か僕のゐない時に来てゐたらしいのであつた。「まあこつちへ上り給へ。」僕はわざと気さくに言つてさきに立つてその男を応接間へ導き、一緒になつてあたらず触らずの話の仲間になつてゐたが、男は友だちと逢ふ約束があるとか言つてあたふたと帰つて行つて了つた。「面白い男ぢやないか。」割合に素直な気持で僕はさう言つて見たが、とも子はただ眼をあげて僕の方を見たきりで何とも答へなかつた。不思議な気持であるが、僕はほんたうの気持では少しも愛してゐると思はなかつたとも子とのこの生活をいつとはなく大

切に思ふやうになつてゐるのである。まつ代のことなどでは勿論のことであるが、よしとも子に少しばかりの妻らしくない気持があつたとしても、そんなことでこの生活をぐらぐらさせたくないと思つてゐるのである。それはいつか考へたことのある「洒落者の良人」としての物分りのよさとはまるで違つた真面目な気持であつた。僕はこの家が好きなのである。ながい間波の中に揉まれてゐるやうな不安定な生活を続けて来た僕はやつと港についた水夫のやうな気持でこの煖炉の燃えてゐる家を愛してゐたのであるが、ししかしそんな気持も結局はただ僕の手前勝手な考へ方の一つの現れにしか過ぎなかつたのだといふことがあとで分つた。

それは冬の日には珍しい晴れたあたたかい日であつたが、僕とともに子とはいつものやうにテラスに続いてゐるサンルームのカーテンをあけて、おそい朝食のあとの珈琲をそこでのんでゐた。垣根のそとを誰かきれいな若い女がゆつくりと通りすぎる。はじめは紫色の明るい着物と紅無地の帯とがぼんやりと見えたのであるが、ちやうど僕の坐つてゐる辺りから見えるところまで来ると静かにこつちへ向いた。僕は「あ、」と低い声を立てて茶碗をおいた。つゆ子が通つてゐるのである。あのつゆ子の長い睫毛のある眼がたしかに僕を見たのである。さう思ふとあの着物も帯もたしかにつゆ子の着てゐたものと同じものだつたやうな気がして、はつとして僕は椅子を離れた。通りに背を向けてゐたとも子は、「どうしたの？」といふやうな眼ざしを僕に向けたが、もうそのときは僕はつゆ子のあとを追つておもてへ駈け出したのであつた。そとへ出ると僕は立留つた。どこへ行つたのであらう。いま坂の上の道から下りてここを通つたのであるからまだ半町とは行かぬ筈であるのに、そこから二三軒さきの曲り角の板塀のところまで走つて行つて見たが、それらしい姿は見えぬのである。僕は躊躇してちよつとの間そこに立つてゐた。そしてそこの二つに別れてゐる一つの道を省線の踏切のあるところまで走つて行き、また引返してもう一つの町へ出る狭い道を走つて行つて見たのであるが、そのどちらにもつゆ子の姿は見えなかつた。たぶん僕はそのどちらかの道で彼女を見失つたのであらう。それにしてもつゆ子はいま時分どうしてこんなところを歩いてゐたのであらう。僕はスリッパを穿いたままちよつとの間往来に立つて荒い呼吸を殺してゐた。つゆ子がゐたのだ。あの十一月四日の船で神戸からアメリカへ発つて行つた筈のつゆ子がまだ日本にゐる。そんな筈があるだらうか。僕はだんだん自分の眼を疑ひはじめた。そしてあれからもう四ケ月もの月日が経ち、いまは全く別の世界で自分を立て直し、夢の中でさへも思ひ出すまいと決心してゐたつゆ子の姿を、あんなにもはつきりと見たと信じるのは何といふ馬鹿げたことであらうと、さう自分を笑ふことによつてやつと不断の気持に返つたのであるが、その次の日の午後そとから帰つて見ると、とも子はどこへ行つたのか留守で、

居間の机の上にはまぎれもなくつゆ子からよこした一通の電報がのせてあつたのである。

「アスアサ一〇ジ、シブヤエキデマツ、ツユ子。」僕はながい間その電報をもつてゐた。僕の手は慄へてゐた。やつばりつゆ子は日本にゐたのだ。日本にゐて、僕を見るためにきのふはこの家の前を通つたのだ。「つね、」と僕は女中を呼んだ。「とも子はこの電報を見たの？」「いいえ、旦那さま。」とつねははつきりした口調で答へた。「お嬢さまはただその机の上へお置きになつただけでございました。たいへんお急ぎになつてお出ましになつたものですから、」とも子について洗足の家から来たこの女中はとも子のことをいつまでもお嬢さまと呼んでゐる。「よしよし、」と僕は何気なく言つたが電報の紙ははじめのとは折目が違つてゐてやはりとも子がよんだのだといふことは分つてゐるのである。しかしそんなことが何であらう。全く顚倒して了つてゐた僕は、ただ僕がまだ落着いてゐるといふことを知るためにとも子のことを訊いたりしたのであるが、いまはもう家のこともとも子のことも僕には考へることが出来なかつた。ああ、つゆ子が日本にゐる。僕は大きな声で叫び出したいのだ。その大きな歓喜の声の下で僕はこの僕のやつとたどりついた平和な家がまた壊れてゆく音がきこえるやうな気がしたが、でもそれをどうすることが出来よう。だがもし、この家の中のあたたかい煖炉の火がこの僕をひきとめることが出来たならば僕はどんなにこの家の中に留まつてゐたいか分らぬ。僕はもう自分が何を考へてゐるのか分らぬ。ただ僕に分つてゐることは僕は明日の朝十時につゆ子に逢ひに行くであらうといふこと、そしてとも子もこの家ももうおしまひになつて了ふであらうといふことだけである。

○

その翌日僕は半年振りにつゆ子と逢つた。青いコートを着てゐるせゐかまるで病人のやうに見え、以前よりもなほ痩せて抜けるやうに細い首すぢや揉上げにすき透るやうな青い蔭が漂ひ眼だけがびつくりするほど大きかつた。何だか壊れた玩具のやうにいたいたしい様子だつた。この様子は眠つてゐた僕の激情に火をつけた。あの半年前の狂気じみた愛情がそのまま戻つて来た。どんなことをしてもこのつゆ子を失ふまいといふ思ひの前にはとも子との生活なぞものの数でもなかつた。だがつゆ子はこの僕の激情にも拘らず何とも言へない虚無的な眼をしてゐた。彼女はしきりに「死にたい」と繰り返した。僕の愛情は信じるがそれを現実の世界に生かすことについては何も信じることが出来ないといふのであつた。さういふ彼女はもう半ば死んでゐる人のやうな表情をしてゐた。僕にはそのつゆ子を現実の世界に戻す力はなかつた。

つゆ子の話によると彼女はやはりあのとき神戸からアメリカへたつたのであつた。そして二ケ月ほど向うで暮してゐる間も絶えず死を追ふやうな気持で、たうとう日本へ帰つて来て了つたのだといふ。僕は三日ほど待つてくれと言つた。そしてこの二時間にも足らぬ短い逢曳からひとりでそとへ出たのであるが、何となくそのまま家へ帰りたくなかつたので、ぼんやりと街で日の暮れるのを待つた。いつの間にか僕もつゆ子のあの厭世的な雰囲気の中へまき込まれてゐたと見えて、あんなにはつきり、三日ほど待つてゐてくれなどと言つたりした癖にさてそれではその三日の間にどうしていまの生活をきり拓いて行かうかといふことなど考へようとはしなかつた。ただ無暗にがらがらといまの生活の壊れる音ばかりが聞える。しかしどんな形をとつてとつゆ子の考へ方をそんな風におどけて考へて見ることによつて何とかもう一度立て直らなければならぬとぼんやりさう考へた。家へ帰るといつものやうにとも子はその日も病院へ出かけたとかでまだ帰つてはゐなかつた。僕はひとりで食事をすませた。「おくさんはいつごろ出かけたんだ」「旦那さまがお出ましになつてすぐでございました。」女中のつねは眩しげに答へた。このつねも結婚の日からとも子と一緒にこの家へ来たのである。考へて見ればいま夕飯を食つてゐるこの食卓もナフキンもそれから箪笥も寝台もピアノもみんなとも子の持つて来たものばかりで僕自身のものと言つては結婚の前日近所の古道具屋から運び込んで来た古ぼけた椅子卓子と僅かな本と絵の道具とがあるばかりだ。その中で今朝まで何の屈託もなく暮してゐたのかと思ふと不思議な気がする。ふいに家の中の様子が見馴れない居心地のよくないものに思はれて来たのである。一体どんな積りでここをわが家と思つて暮してゐたのだらうといふやうな気がしきりにする。きのふまでどんなことをしてでもこの家の生活をつづけて行きたいと思つてゐたことまでが、さう思はねばならぬほど生活が終極に近づいてゐたからだといふ気がする。とも子も僕もまるで似もつかぬ相手と一緒にとんでもない間違つた生活の中へ足をふみ込み、大急ぎでそれを叩き壊して了はうとするのを惧れてゐたのだといふ気がする。僕はそんなことを考へてひとりで居間に籠つてゐたが、やがて八時を打ち九時が鳴るのにとも子はなかなか帰つて来なかつた。この頃は毎日のやうに病院へ行くと言つて出かけるのであるがこんなに遅くなつても帰らぬことはなかつた。ひよつとしたら帰りに洗足の家へ廻つたのかも知れぬと僕はひとりできめて寝室へ這入つたが、ふとそこの鏡台の上にとも子の古いハンドバッグが少し口を開いて何か手紙のやうな紙片をはみ出させたまま放り出してあるのが眼についた。何気なくその紙片を手にとつて見ると、一つはとも子の学生時代からの親友の一人で呉の海軍士官の夫人になつてゐる前田とみ江とかいふ女から来た手紙でもう一つはそれにあてて書いたとも子の返事の書き損じのやうなものであるが、読むともなく読んでゆ

くととみ江の手紙は彼女の結婚生活がどんなに退屈なものかといふことやあの少女の頃に描いてゐた空想はあとかたもなく消えて了つたといふことや彼女の良人はただうまい食べものの好きな肥つたドンキホーテに過ぎないといふことなどがこまごまと書いてあるのに反して、とも子の返事にはとみ江の手紙をそのまま裏返しにしたやうな調子で彼女の結婚生活は何といふ愉しいものかといふことが、朝はまだ眠つてゐるとも子のために彼女のやさしい良人は温いミルク入りのチョコレートを寝床の中まで運んでくれるとか、夜はおほぜいの若い客が集つて来て彼女の良人はいつもソファに腰を下すときは彼女をその膝の上にのせて唄を唱つてくれるとかいふことが、その頃のアメリカかぶれをした若い女たちの好んでつかふ自分のことをミイと言ひその良人のことをミイのひとはと言ふ調子をもつて紙一面を埋めてゐるのであつた。僕は危ふく噴き出して了ふところであつた。僕らの生活の中にはどこにもそんな場面はないのである。恐らくどこかで見たことのある活動写真の中の或る情景をただ書いて見たのだらうと思はれたが、それがとも子の心の中で結婚生活の形をとつて生きてゐたものであらうかと思ふといかにも滑稽なもの哀れさを感じずにはゐられなかつた。少くともこの一ケ月ばかりの二人の生活はただ顔を合せたときには笑ひ合ひ、一人になるとお互ひに遠いところを見詰めてゐるやうなものであつた。「あいつはまだまるでねんねえなのだからね。面倒だらうがまあ乳離れをしたばかりの仔猫でもあやしてゐる気で可愛がつて貰ふんだね、」とついこの間もとも子のことをその父親が言つたのであるが、この手紙はまさにその仔猫の書いたものであつても、しかしこの家の中のとも子のどこに仔猫らしい甘つたれさがあるのだらうか。そんなものがあつたとしてもとも子はそれをみんな心の奥へしまひ込んで了つてゐる。——だが一体こんなに晩くまでどこをほつき歩いてゐるのだらう。僕はさう思つてもう一ぺん枕許の時計を見た。もう十時も過ぎてゐる。洗足の家へ廻つたとしてももう家で帰してよこす時分なのに、とさう思ふとふつと昨日の朝つゆ子から来た電報を見たに違ひないとも子がさきくぐりに何事かを予想して家出をして了つたのではあるまいかといふ疑ひが頭を掠めると忽ちはつきりとさうに違ひないと思はれて来たのである。とも子が家出をした。僕はぼんやりとそのことを考へた。それならそれで好いといふ考へが漠然と心の中に拡つて来る。思ふ壺ぢやあないか。僕はさう声に出して呟いて見る。つゆ子にはもう三日ほど待つてゐてくれと言つたけれども三日と言はず今日の中にでも僕は意識しては少しも手を下さないで向うからこの生活を壊して来たのだ。思ふ壺ぢやないか。僕は窓のそとを吹く風の音に耳をかしげながらあれからつゆ子はどうしたらうと掻き立てるやうにして今日別れた後のつゆ子の姿を思ひ浮べようとしたのであるが、その考へを押しのけるやうにして一体とも子はどうしたのだらうといふ心配ばかり

が僕の頭にこびりついて離れないのであつた。僕は何となくいらいらして来た。やがて十二時の鳴るのを聴くと寝間着のまま起きて裏口から表の通りの自働電話のあるところまで出てそこから洗足の家を呼び出した。「何ですつて？まだ帰らないんですつて？」もうとうに寝てゐたのを呼び起されたとも子の母親はひどく狼狽して、「まあどうしませう。まあどこへ行つたんでせうね、夕方ここを出るときにはそれは上機嫌で嬉しさうにしてたのに、」とさういふ間もおどおどして狼狽てふためき乍ら、あなた、あなたと父親を呼び起してゐるらしい声や女中たちのざわめいてゐる様子が手にとるやうに感ぜられたが、やがてまた母親が出て来て、すぐにこれから僕に来てくれないかと言ふ。そこで僕は通りがかりの自動車を拾つて洗足まで飛ばしたのであつたが、しんかんと寝しづまつてゐるその邸町の中であかあかと灯りをつけて待つてゐるとも子の父の書斎の窓が遠くからも見えたのである。

「困つたことになつたな、」僕の顔を見るとすぐ父親は心配さうに言つた。「家ではまた君も一緒に熱海へでも行つたのかと思つてたんだが、」「帰りにまつ代さんのお宅へお寄りするつてさう言つてたんですよ。」「まつ代のところですつて？」吃驚して訊き返した僕はその母親の口から思ひもよらぬことを聞かされたのであるが、とも子はいつぞやふいに僕らの家を訪ねて来たまつ代とその後も僕にかくれて二三度逢つたことがあるらしく、何でも今日ここでとも子の話すのにはまつ代は今のところ金を五百円くらゐやればうまく話を片附けてくれる積りらしいから、それだけの金を貸しておいてくれないかと言つたといふのである。この間来たときにはたいへんな剣幕で一万円くれなければ籍はぬかないからその積りでゐろとか何とか捨て科白を残して出て行つたまつ代が、ただの五百円で話をつける気になつたと言ふのは、その後とも子に逢つてどんな気紛れな考へ方からそんな気持になつたのか知らないが、さう言へばいかにもまつ代らしいやり口だといふ気がした。それにしてもその金をとも子がここへ借りに来たといふことは何と言つても僕にはやりきれない気持であつた。「それでその金を渡しておやりになつたのですね、」「ちやうどあの子に子供の時分からとつておいた株券があつたからね、それに当分どこかの暖いところへ君と一緒に行つて暮すのだからとか言ふものだから両方で千円くらゐ持たして帰したんだよ、」だが最近とも子と旅行に出る計画なぞしたこともなかつた僕は、てつきりその金を持つてどこかへ行つたのだと思つたが或ひは話の通りにまつ代のところへ寄つてゐるかも知れぬと思つたので、そのまま腰も下さずに車を呼んで貰つた。「分り次第電話で知らして下さいね、どつちにしてももう一度ここへ戻つて下さるでせう？」母親は車のところまで出て言つた。いよいよとも子はどこかへ行つて了つたのだと思ふと僕は何となく殺気立つた気持になつた。まつ代の家はいつか以前の蒲田の家を畳む前に僕と別れた

まつ代が子供と一緒に越して行つた家で、そのときは一緒に道具を運ぶ手伝ひなどをしてやるのについて来たことがあつたので昼間ならばはつきりとあたりがつくのだが、そのごみごみした沼地の埋立にある家はこの夜道では皆目見当がつかなかつた。車は幾度も同じところへ出た。僕はいらいらしてその狭い路地の口で車を下りると奥の空地の傍にある一軒の家にまだ灯りのついてゐるのを見つけて窓に声をかけた。「この辺に高橋まつ代つていふ女の人の家はありませんか。」「すぐこの裏ですよ。」見るとこの家と背中合せにこの夜更けにあかあかと電燈をつけた明るい縁側が見えたのである。僕は何となく足音を忍ばせた。二三本ひよろひよろと痩せた檜葉の植わつてゐるだけのその庭に濃い縁側の影がべつたりと落ちてゐるのだが、もしやそこにとも子の靴がぬぎ捨ててありはしまいかと眼を据ゑて見たのであるがそれらしいものは見えなかつた。僕は僕の来たのを知つてとも子が隠れはしないかと言ふやうにそこの壁に体をくつつけるやうにしてそつと近づいてから、ふいにその明るい障子に手をかけてがらりと引きあけた。「失礼ぢやあないの。」癇ばしつたまつ代の声がして、まつ代の白い化粧をした顔が立ちはだかるやうに立つてゐる背後に、どてらを着た一人の男が長火鉢を前にして酒をのんでゐるのである。それは以前によく蒲田の家へ訪ねて来た東京夕刊新聞の社会部の記者でまつ代の遠縁にあたるとか言ふので僕も二三度逢つたことのある岡野といふ男であるが、こんな夜更けにひとり暮しの女の家で酒をのんでゐるのを見るとそれがいかにも思ひがけないことであつただけに僕は不快な気持を隠すことが出来なかつた。「何が失礼だ。」「失礼ぢやないの？　案内もなしにいきなり人の家の障子をあけるなんて、」「とも子が来てるだらう？」「とも子さんですつて？　こんなとこへとも子さんが来る訳ないぢやないの。」と言ひ乍らその濃く紅をつけた唇の上にさも人を小馬鹿にしたうす笑ひを浮べて、「こんな夜中におくさんを探しにくるなんてたいへんね。」「まあ湯浅さん、そんなところに立つてないでお上んなさい。」と岡野まで馴々しげにその脂の浮いた顔をにやにやさせて言ふのである。「ふゝふ」まつ代は低声で笑つてちらとその岡野の方へ眼を向けた。「言つちまひませうか？」「何も隠すほどのことぢやないぢやないか。」「あのね、」とまつ代はもう一度気味よげに笑つてから、「ほんたうはさつきまでとも子さんはここへ来てたのよ。でももうあんたなんかと一緒に暮すのはこりごりだと言つてたわ。」「来てた？　それからどこへ行つた？」「どこへ行つたかなんて、もう今時分お宅でやすんでるんぢやあない？」僕はぐらぐらと煮えるやうなものが咽喉もとまでこみ上げて来るのをやつとの思ひで押し殺しながら声だけは出来るだけ平静に保つて、「そんな意地の悪いことを言ふなよ。どこへ行く積りらしかつたくらゐ見当がつくだらう？　あいつにいま自殺でもされたら眼もあてられないんだ。」「それこそ夕刊新聞の特種ものだからね、」と言ふ岡野の言葉におつ冠せるやうにして、「自殺でもされたらですつて？」とまつ代はその細い眼に軽蔑しきつたうす笑ひをうかべた。「まあどこまで自惚れが強いんだらう。このどたん場になつてもあなたは自惚れを捨ても知れないと思ふなんて滑稽ぢやあないの。あのひとはね、ちやんとあなたのほかに好きな人があるのよ。」このまつ代の一言で僕はものの見事に一撃を喰はされて了つた。この時こそ日頃の腹癒せだとばかり出鱈目に言ひまくるのかも知れぬと疑つて見る気持は愚か、その一言でたじたじとなるところなぞ死んでも見せたくない場合であるにも拘らず僕はまつ代の冷笑を浴びたまま一矢も酬いることが出来なかつた。僕の眼にはもうまつ代の冷罵も岡野のにやにや笑ひもなかつた。まるであぶり出しの絵のやうにあの背の高い慶応の学生の姿が浮んで来た。あの男と逃げたのか。さう思ふといまはもうそれが動かすことの出来ない事実であるやうな気がして、ついこの間も家のポーチに背をもたせかけてとも子と何か話し合つてゐたその男の様子がまざまざと浮んで来た。さう言へばあの男とは僕がとも子と知り合つたすぐそのあとから不思議なくらゐ幾度もちらちらと逢つてゐる。疑はうと思へばこれほど明らさまな関係はないと思はれることばかりだのに、半分はわざと知らぬ顔をして来たのだ。まかり間違つてとも子があの男の恋人であつたとしても平気で知らぬ顔がしてゐられるくらゐ僕は

とも子に対して余裕のある或る気持以外の愛情は持つてゐないと思つてゐたのだが、それがまあこの逆上せやうは何だらう。咄嗟の間に僕はさう考へて冷静にならうとしたが、その僕の努力も却つてまつ代らの冷笑を買ふことにしか役立たぬことを考へてそのまま二人の騒々しい笑声を背後にききながら車の待たしてあるところまで引返した。あとで分つたことであるがその晩とも子はまだまつ代のところにゐてその裏の家でまつ代の家を訊ねてゐる僕の声をききつけると、「あつ、湯浅が来たわ。」と言つて蒼くなつてゐるのを、早く隠れろと急き立てられるやうにしてそこの押入の中へ隠されたのだと言ふ。

家へ帰ると僕は女中のつねを居間へ呼んだ。「おくさんがゐなくなつたんだがね、それについて何でもお前の知つてゐることは隠さずに話して貰ひたいんだ。」つねはうつむいて黙つてゐた。「早くしないととんでもない間違ひになるからね、少しでも隠してゐることがあるとおくさんのためにならないよ。」「あの、」と言ひかけてつねはしくしくと泣き出した。正直なつねはまるで自分のためにこの騒ぎがもち上つたのでもあるやうに脅かされたらしくなかなか泣き止まうとはしなかつた。「すみませんでございました。実はあの、四五日前にハガキを出しに参りました。」「何のハガキだ？」「よくは分りませんでしたけれど、ご一緒に行く決心をしたから東京駅で待つてゐて下さいとそんなやうなことが書いてございました。」「そのハガキを出し

ただけか?」「いいえそれからあの、さきをととひの晩は電報を打ちに参りました。」「どういふ電報だ?」「アスアサユカレヌ。オユルシアレ。アトフミと書いて打ちました。」「その電報はさきをととひの晩だね?」僕は或ることを思ひ出したのである。とも子はその晩夕飯のあとでいふに、明日の朝はとても早く起きなければならない。女学校のときの大好きだつた音楽の先生が国へ帰るのを送りに行くんだからと言ひ出した。何時の汽車だと訊くと七時四十何分とかの急行だといふから、そんなに早い汽車でたつのを送りに行くんだつたら五時ごろから起きて騒がなきやあならないぜ。体が悪いのにそんなに早く起きたりするのは止せ。音楽の先生をおくるなんて馬鹿なことだと何気なく止めたのに対して、とも子はながい間ぐづぐづ言つてゐたことがあつたが、もうあのとき翌朝は行く積りにしてゐたのだ。きのふのつゆ子の電報を見てから発作的に決心した家出ではなくて、前から計画的に筋道を立ててやつてゐたことなのだ。「お前その、黒田さんのゐた西小山の家といふのを知つてゐるか?」僕は始めてその男の名前を口に出した。「はい、以前にまだお嬢さまがあちらのお宅においでになりました時分に一度お供をしたことがございます。」「ぢやあ行けば凡その見当はつくね? すぐにこれから一緒に行つて貰ふから支度をおし、」もう時間は夜中の二時を過ぎてゐたが僕はつねをつれて車で西小山へ行き、その宿寓さきである黒田の姉の家といふのを探しあてた。どこの郊外にもあるやうな粗末な洋館の応接間のくつついたただの借家らしいその家は町外れの低い丘の蔭に芝生の庭を控へて小ぢんまりと建つてゐた。僕は二三度つづけて呼鈴を押した。家の中で響いてゐるりんりんといふ音がそとまで聞えた。間もなく中から女の声で、「どなたですか?」といふ声がしてその姉といふ人らしく痩せて背の高い女の人が出て来た。「黒田君はゐますか?」さういふ僕の声にはつとしたやうに顔をあげたが、いかにも訝かしげに僕の姿を見詰め乍ら、「吾郎はととひの朝国へ帰りましたんですけど——まあどうぞお這入り下さいまし、」と見る見る心配げな表情を浮べた。僕はそこに立つたままとも子のことを話した。すると酷くびつくりした様子で暫くは口もきけない風であつたが、「でもととひの朝たしかに国へ帰つたと思ふのですけれど、何だか私にはあんなに気の小さい弟がそんな大胆なことをしようとはどうしても思はれないんですけど、」と言葉少く言つて、とにかく夜があけたらすぐに故郷の広島の実家へ問合せて見るからその返事が来次第たぶん明日の午ごろまでにはきつとお知らせするといふ。僕はその足ですぐ洗足の家へ廻つた。隠さずに凡ての経過を報告すると母親は流石に色を失つた。黒田のことは僕よりもこの母親がよく知つてゐる筈だからである。「どうも何とも申訳のないことだな、」父親はいかにも申訳のない顔つきで言ふのである。「どういふ積りなのか儂には分らん。」「あれだけ無理を通して一緒になつて頂いて、」

とこの人の好い夫婦は一にも二にも娘のわがままに帰してしまつて心から僕に対してすまぬことに思つてゐるらしいのであるが、しかし僕にはやつといまになつてとも子の考へ方が朧気ながら分るやうな気がする。とも子は僕を知るよりも前から黒田とつきあつてゐたのである。そこへ僕が現れて巧いことを言ふ。黒田も愛してはゐるがときどきは新聞に写真の出たりする僕のことを若い女らしい好奇心から恐しく派手な存在であるやうに思ひ込み、まるであの馬来人の野球の選手のサインを欲しがる女学生の気持をそのまま、どんな無理をしてでもその僕と結婚したいと思ふ。とも子はその無理の一つとして、結婚式の日にこれから式場へのぞまうといふ時になつて黒田に逢つた。これは僕の想像であるがこのときとも子は黒田に向つて、自分はいま自分には少しも関係のない父母の意志によつて心にもない結婚をさせられるのだ。さう言つて泣きながら別れを惜しんだのではないかと思ふ。——とも子にとつて結婚は罐詰の表側に貼つてあるレッテルのやうなものだ。中身はとにかくとしてよそ眼には是非とも華やかで明るくて愉しくなくてはならぬ。それだのにその結婚式がすでに何だか訳の分らぬ曖昧さに包まれてゐて、またその華やかなるべき結婚生活についてもどこの婦人雑誌からも花嫁の感想を聴きに来るやうなことはなかつた。その替りに僕の前の女が金をとりに来た。何だか陰気くさかつた。とも子は友だちにあてて愉しい生活の唄のやうな手紙を書いて見たりする。とも子はだんだんいらいらして来る。しかしもしかしたら何とか立て直せるかも知れぬと思つたりしてまつ代にも逢つて見る。みんな失望だ。いつそ黒田と逃げて了ふ方が少くとも、少くとも僕を根こそぎに吃驚させることではないだらうか。さう思ひあぐんでゐるところへつゆ子の電報が来る。——とも子が逃げなければその同じことをひよつとしたら僕がするかも知れぬ。彼女は自分がさきに逃げた。この想像は七分通りあたつてゐると思ふ。

とも子の父母の許を辞して家へ帰つたのはもう夜明けに近かつた。ひとりで寝室にはいると僕はながい間ぼんやりとベッドに腰をかけてゐた。足もとにはとも子の赤いスリッパが揃へてあり鏡台の上には昨日のままに僕の読んだ手紙がのせてある。それが今はとも子の替りになつて僕を憐れんでゐるやうな気がする。「このどたん場になつてもあなたはその自惚れを捨てないのね?」と言つたときのまつ代の顔が浮んで来る。昨日までの自分がそのまま逆になつて滑稽な嗤ひものになる。そんなことが許せるだらうか。僕の考へはまたいつの間にか平衡を失つてそこへ戻つて来る。あの小娘にしてやられた。さういふ考へが払ひのけようとすればするほどうるさく頭にこびりついて来る。僕は自分がとも子に対してどの意味から言つても誠実のある良人とは言へなかつたといふ事実、ほんたうの意味では少しも愛情を持つてゐなかつたといふ事実とは関係なく、ただ無暗にとも子に先を越されたことが腹立たしかつた。草

の根を分けても探し出して見せる。さういふ言葉で言ひ現したいくらゐに激しい気持になつた。さうだ。たとひどんな遠くまで逃げてゐても探し出してやらう。探し出してもう一度この家へ連れて戻り、今度こそ彼女をこのいまの自分と同じやうな気持にさせてやらう。——この考へは凡ゆる思惟を越えてただ一つの塊りのやうなものになつて僕を支配した。そしてその欲望の激しさは昨日の昼あの紅梅軒でどんな犠牲を払つてもつゆ子を自分の手から離すまいと決心したときの気持に較べて比較にならぬほどの強さで僕を動かしたのであつた。朝になつて僕は少しうとうとしながら西小山から電報の返事の知らせが来るのを待つた。間もなく使が来たが、やはり広島の実家にはまだ帰つて来てゐないとのことで、西小山の家では万一のために黒田の行先を調べ、追つてまた知らせると言ふのであつた。この返事で僕の予想が九分通りあたつてゐるのが分つた。僕はすぐに家を出てとも子の不断往来してゐたと思はれる友だちの所へ一軒づつ訊いて廻つた。そして最後に夜おそくなつてからいつかあの馬場のアトリエでとも子と始めて逢つた日に一緒に来てゐた断髪娘である桃子の住んでゐる赤坂のアパートを訪ねると、桃子はまだ起きて狭い部屋の中一ぱいに着物を脱ぎ散らし乍らその日買つて来たのだとかいふ新しい帽子を鏡の前に立つていろいろに冠つて見てゐるところであつた。「ああ、びつくりした。まあさうなの？」と桃子はいかにも噂好きな女の本能を隠さうともしない表情で大げさにうなづいてから、「あなた日比谷ホテルへ行つて見て？　こなひだ中たつ子さんがあそこに泊つてたのよ。どこかへ行くとしたらまづたつ子さんの所へ寄るわ。こなひだからとも子さんはたつ子さんのとこへ入りびたりだつたことよ。」といふ。たつ子といふのもとも子の友だちの一人で故郷の信州の家へ帰つてゐたのが最近東京へ来てゐたといふのであつた。「病院の帰りに毎日寄つてたのかな、」「病院？」といつて桃子は笑ひ出した。「いやねえ、湯浅さん。ほんとに病院だと思つてたのあなた？　その病院がほら、黒田さんぢやあないの？」といふ。僕は苦笑した。あれもさうだつたのかと思ふと自分のお目出度さ加減が可笑しかつた。いつも病院から帰つて来ると疲れたと言つては長椅子の上にながい間ねてゐたとも子の姿が眼に浮ぶ。あのたびに黒田と逢曳してゐたのかと思ふとやはり好い気持はしなかつた。悪意はなかつたにしてもお互ひにこの結婚全体がだまし合ひつこだつたなと思ふ傍から、お互ひだらうか？　ほんたうにお互ひにだつたらうかといふ自嘲が湧くのであつた。何はともあれ、そのたつ子に逢ふために日比谷ホテルへ行つて見ようと思つたのであるが、始めての若い女を訪ねて行くのにしてはあまり夜が更け過ぎてゐることを考へてその夜はそのまま帰り翌朝をまつてホテルへ行つて見るとたつ子は四五日前にそこをたつたといふのである。「ちよつと宿帳を見せて貰へないかな、」僕は何気ない調子で言つた。そして見せ渋つてゐるボーイの手

に五十銭銀貨を摑ませてその帳簿を受取りばらばらとめくつてゐると、ちやうどをととひの晩のところに、そんな場合にもやはり自分の名前をまるまる偽つて書くといふことは出来ないものらしく井上とも子といふとも子の旧名を井原とし子と変へた女文字がはつきりととも子らしい筆跡でもう一人の女名前と一しよに列べて書いてあるのが眼についた。「この井原とし子つていふ女の人はまだゐるんですね？」「井原さんはきのふおたちになりました。」「きのふ？　そのときどこかへ電報を打ちやあしなかつたかしら？」「お打ちになりました。僕が打ちに行つたんです。」「君が？　ぢやあその電文は覚えてゐますね？」ボーイは何か感づいたものと見えて電文も宛名もよく覚えてゐないと答へながらふいに僕を警戒する様子を示すので僕はその上追求することを止めて、発信局の京橋郵便局へ行つたのであるがここでも頑固に僕の申出を拒絶した。僕は窓口に自分の名刺を出した。「実は僕の妹がをととひの晩家出をしたのです。」警察にも捜索願を出してはあるが自殺の惧れがあるから一刻も早く手配したいのだとまことしやかに頼んで見たのであるが、警察の立会ひがなくては見せられぬことになつてゐると規則をたてにとつて仲々きき入れようとしない。そこへ僕らの声高な応酬をききつけて一人の上役らしい男が出て来た。そしてもう一度僕の口から事情をききとると暫く考へてゐたが、それは定めしお困りだらうからと言つて漸く一綴りの発信簿を見せてくれたのであるが、中に紛れもなくとも子の手で逗子の何園とかいふたぶん旅館か貸別荘にゐるらしい黒田にあてた電報が出て来た。「コンヤタツ。アスアサ一〇ジ三四フン、カウベエキデマチアハセタノム。」僕は腕の時計を見た。十一時二十五分過ぎだ。この電文の通りだとするととも子はちやうど今時分神戸へ着いてさきに逗子から出発した黒田と落合ひ一緒にどこかのホテルへ落着いた頃であるかも知れぬ。僕は礼を述べて郵便局を出るとすぐ近くの自働電話から洗足の家へ電話をかけて母親を呼び出した。「分りましたよ。いま神戸にゐるらしいんです。」「まあ宜かつた。」吐息と一緒にさういふのが聴えた。「とにかく神戸まで行つて見ませう。これからちよつと家へ帰りますが大急ぎで支度をすれば二時の富士に間に合ひますからね、」「ぜひね、ぜひさうして下さいね。そいでいらつしやる前にちよつとこつちへ廻つて下さらない？　ぜひお話したいことがあるの、」といふ。富士を外すともう夕方まで西行きの汽車はなくなると思つたが、急いで大森へ帰つて手提鞄に手廻りのものを詰め待たしておいた車に乗らうとして思ひ出してつねを呼んだ。この二日間思ひ出すひまもなかつたつゆ子からもしかしたら電報が来てはゐなかつたかと思つたからである。電報はまだ来てはゐなかつた。もし来たらすぐに神戸の中央郵便局どめにして打ち返すやうに言ひつけておいて、僕は急いで洗足の家へ廻つた。

○

僕の電話で呼び戻されたものと見えて父親も会社を退いて帰つてゐた。「どうしたら好いものかな、」と父親は途方に暮れて、「君ひとりに行つて貰つた方が好いものかそれともお袋さんも一緒に行つた方が好いかどうだらう。」とさう言ふのであるが、よくきいて見ると娘のことも気にかかるし、それよりも僕ひとりが出かけて行つて黒田ととも子とを前にして何か言ひ出す光景を想像すると、どんなに殺気立つたものになるかも知れぬとそれを惧れてゐるらしいのであつた。「君には重々すまぬことだと思ふが、それはとも子をこつちへ連れ戻してからどんなにでも君の顔の立つやうに取計らふ積りだからね、連れ戻しさへすれば必ず君の顔は立てるからね、とにかくとも子をなだめてつれ戻して貰ひたいと思ふんだよ。逢へばまたお互ひにかつとして、そのためになほせつば詰まつた気持に追ひつめられてさ、とも子がまたどんな間違ひをしでかすかも知れないからね、」と言ふのである。勿論僕の方でも母親が同行してくれる方が万事好都合なので、それではといふことになつて一緒に東京駅へ向つたのであるが、やはり夜の汽車にしか乗れなかつた。「ちやうどまる一日遅れてるのね、」母親は絶えずハンカチを出して眼にあててゐた。「駅へ下りてどこへ行くの？　警察の手を借りるやうなことはしないんでせう？」「警察よりは僕らの方が親身ですからね、とにかくホテルを一軒づつ探して廻るよりほかはないと思ふんです。とも子の行きさうなホテルと言へば神戸には三つか四つぐらゐしかないんですから、」母親はほうと肩で呼吸をした。寒い夜汽車の中は乗客も少かつた。向ひ合せに腰を下してゐながら母親と僕とのとも子に対する気持は裏と表ほど違ふ。ただ生きてさへゐてくれたらとそればかり願つてゐる母親に較べて僕の胸の中には雲のやうにさまざまな感情が去来してゐたのである。

翌朝神戸へ着いたのは九時を何分か過ぎてゐた。僕らは自動車を駆つてオリエンタルホテル、東亜ホテルと探し歩いて最後に諏訪山ホテルへ行きそこの宿泊人名簿に例の井原とし子の偽名で黒田らしい男名前と列べて記載してあるのを発見した。「これだ。この人たちはまだ泊つてゐますね？」「いえ今朝おたちになりました。」「今朝？　今朝の何時ぐらゐです？」「さき方です。お送りして行つた車がやつと帰つて来た時分ぢやあないかと思ひます。おい、六番の自動車はもう戻つてゐるだらう？」小さいボーイを呼んで玄関のそとの溜りにゐる運転手を探させたのであるが、その話によるとホテルから居留地へ出て外人墓地の前で二人を下したといふことまで分つたけれども、それからどこへ行つたのか誰にも想像することは出来なかつた。「どうします？」僕は独り言のやうに呟いた。きのふの昼あのまま富士へ乗つてゐたら昨夜の中にとも子たちを発見してゐたであらうし、さうでなくても今朝ほかのホテルへ

行くよりもさきにここへ来てゐたらまだたたずにゐたのだと思ふとどうにも残念であつた。確かにいまこの神戸にゐるといふことが分つてゐながら、ではどこへ立廻りさうかと言ふとまるで見当がつかぬ。僕らは全く途方に暮れてちよつとの間そのホテルの玄関に立つてゐた。「何れは下関ゆきの汽車に乗る積りだらうと思ふけど、」「さあ、」僕は何れとも判断し兼ねた。自動車ですぐに停車場へ向はずに居留地で下りたところを見ると、そこから波止場へ出て船でどこかへ行く積りか。朝鮮か上海か、さうでなかつたら別府へでも渡る積りだつたのかも知れぬ。とにかく千円近い金を持つてゐるといふのだからその金のある間どこかをほつき歩く積りでゐるとしたら到底僕らの手では探しあてられなくなる。——さまざまに思ひあぐんだ末に、やはり停車場へ出て汽車へ乗り込むところを待たうと言ふことになつたのであるが、さて停車場と言ふと神戸駅か三宮か、昨日黒田と待合せたのが神戸駅だとすると心理的に神戸駅へ出る筈だといふ気がしたが、ふと僕はこんなとき誰でもやる占のやうにポケットから一枚の銀貨を出して床の上に投げて三宮と決めると、とにかく三宮駅まで駆けつけた。西へ行く汽車はまだ幾つかあつた。僕らは待合室の一隅に人眼につかぬやうにして腰をかけてゐた。いまに二人を乗せた自動車がやつて来るかも分らない。絶えずさう思つて駅の前の広場の一角を見詰めてゐたが、それらしい姿はなかなか現れて来なかつた。やがて灯がつき街はだんだん暗くなつた。ひよつとしたら僕らは一番逢へさうもないところで二人を待つてゐるのかも知れないと思つたが、この上いろいろと考へ出すのは億劫な気がした。僕は疲れてゐた。二日の間の不眠と過労とで体が綿のやうになつてゐた。ぼうつとなつてまるでほかのことを考へてゐたり、このまま東京へ帰つて了はうかと思つたりした。赤く燃えてゐるストーヴの火がちかちかと疲れた眼にしみる。一体何のために自分はほかの男と駆落した女を追ひかけてこんなところまで来て了つたのかと思ふのであつた。「ちよつと僕郵便局まで行つて来ます。」駅前のレストランで交替に夕食をすませてから僕は母親にさう言つた。「郵便局？」母親はむくんだやうな眼をあげて訊き返したが、東京から何か知らせがあつたかも知れぬからと答へるとそれもとも子のことだと思つたらしかつた。実をいふと僕はつゆ子のことを思ひ出したといふよりも、かうしてまる一日もの間母親と向ひ合せに坐つてゐることに何となく疲れて、とにかくちよつとでも外へ出たいと思つたのであつた。

行つて見るとやはりつゆ子から明日の朝十一時に新橋駅で待つてゐるといふ電報が来てゐた。今夜の最終で引返せば間に合ふ。さう思ふのと同時につゆ子に逢ひたいといふ思ひがぱつと白い雲のやうになつて僕の胸の中に拡がつた。忽ち矢も楯も堪らないやうに堪へ性のない逢ひたさになつて僕の全精神を揺り動かすのであつた。この気持は僕には全く突然なものであつた。まるで家を離れた子供が母親に

逢ひたがるやうな堰かれた気持であつた。駅へ引返してもし今夜の中にとも子たちを発見することが出来たら自分はそのまま東京へ帰ることが出来る。何よりもそのためにとも子たちがゐてくれればと思ひ乍ら駅へ戻つて行くと待ち構へたやうに母親が起つて来た。「何か来てゐて？」来てはゐなかつたと答へると母親は急いで切符売場の方へ歩いて行き乍ら、「やつぱり広島まで行つてませうよ。行けば何か分ると思ふわ。こんなところでこの上待つてなんかゐられないんですもの、」どうしようかと迷つてゐる僕を残して彼女は既に二枚の切符を買つて了つたのであつた。僕は不決断のままそこへ立つてゐた。「あれが最後よ。」母親は促すやうにさう言つた。下関行きの改札を報じる拡声機の声がきこえてゐる。僕はただ反射的に母親のあとに従つたが、半分はまだここで母親に別れて自分だけ反対の東京行きへ乗ることは出来ないものかと考へ乍らずるずるとその西行きの最終列車に乗り込んで了つたのである。ことことと汽車は動き出した。仕方がない、やはり広島まで行くよりほかはないなと僕はさう諦めて、ちやうど通りかかつた車掌を呼びとめると、つゆ子へ帰れぬといふ電報を打つために頼信紙を頼んだが、どこか母親の眼につかぬところでそれを書かうと思ひ次の箱の喫煙室まで出てそこでまた暫く迷つてゐた。急用で神戸まで来たが明日までには帰れさうにもない。明後日の朝十一時に新橋駅で逢はう。さういふ電文を考へ乍ら、だがこんな電報をつゆ子の家へあてて打つても構はないものだらうか。打つて彼女のほかの家族の手に渡つてまた前のやうに何も彼も駄目にして了ふよりも、このまま打たずにおいて明日の朝待つに任せておいた方が好いのではないだらうか。そんなことを思ひ迷ひ乍ら何気なくふと眼をあげると、すぐ隣りの扉の陰になつてゐる座席から反対の食堂車の方へ歩いて行く若い洋服の男女の後姿がとも子と黒田の二人に似てゐたやうな気がして、僕は殆んど反射的に起ち上つてそのあとを追つた。まぎれもなくとも子だ。厚い毛皮の襟を立てた黒アストラカンの外套もまつすぐに爪先を蹴るやうにして歩いてゐる形の好い脚も見覚えのあるとも子のものであつた。二人は食堂の中ほどの席に向ひ合つて腰を下した。男はポケットから煙草を出して火をつけた。その手つきから、いつか家の応接間で暫く対談したときの黒田の様子を思ひ浮べた僕は、ちよつとの間躊躇してそこに立ちすくんだ。どうしようか。食堂車の調理場になつてゐるらしい傍の仕切りの中で白服を着たコックがだまつて果物の皮を剝きながら僕の方を見た。ここで声を立てることは出来ない。それどころかあそこにゐるとも子たちに僕がこの同じ汽車に乗つてゐるといふことを悟らせるだけでもたいへんな事が起りさうであつた。僕は二人の前に飛び出して行つて口汚く面罵することの替りにその調理場の蔭に体を隠して、ふうつと煙草の煙を吐いてゐる黒田の眼に触れぬやうにした。不思議なことであるがこの二日の間持ち続けて来た、見附け次第面の皮

をひん剝いてやるぞといふやうな激しい気持はまるで起つては来なかつた。何か索然とした気持で、何だつて俺はこんな男と女を追ひかけてこんなところまで来て了つたのだらうと思つたくらゐであつた。僕は急いでそこのうす暗い灯の中でつゆ子あての電報を書いた。とにかくとも子たちを発見した上はこのまま東京へ帰るといふ訳には行かなかつた。「キユウヨウニテリヨコウチユウ、アスマデカヘレヌ。オユルシアレ、」次は須磨で汽車がとまる。そこでこの電報を打たう。僕はこの自分の冷静な気持がどこから来てゐるのか分らなかつた。冷静といふよりも、こんな場合に遭遇した男の心に最後に残る自尊心のやうなものが僕を支へてゐたのかも知れぬ。その中に須磨、須磨と呼ぶ駅夫の声がして汽車がとまつた。僕は急いで跳び下りた。そして二三歩駅の方へ歩きかけると、突然あの汽車に乗る前の、つゆ子に逢ひに東京へ帰りたいといふ渇望が猛然と甦つて来た。さうだ帰らう。とも子は母親に任せるのが一番ぢやあないか。突然さう決心した僕は手にしてゐたつゆ子あての電報を消してその裏へ、「この汽車にとも子が乗つてゐます。宜しく頼む。」と走り書をして小さく折り畳むと、母親の坐つてゐる窓を探し乍らフォームを駆け出した。汽車はほんの一二分の停車でもう動き始めてゐたからである。母親はぼんやりとそとを見てゐた。「これを読んで下さい。」「何ですの？」と膝の上の小さい信玄袋の中から布にくるんだ眼鏡を出してゐる姿が僕の眼に残つた。忽ち暗いフォームの中に灯のついた幾つかの窓を列ね乍ら汽車は消えて了つた。汽笛の音が遠ざかる。ふいに近い海から手にとるやうに波の音が聞えて来た。呆然としてその暗い小駅に立つてゐた僕はどうしてそこに自分が立つてゐるのか信じることが出来ないほどであつた。時計を見ると神戸発上り列車の最終にここから次の上りを待つてゐては間に合ひさうにもなかつた。駅前のタクシーを雇つて夜道を疾駆し乍ら僕はまるで何物かに追はれて逃れ去るやうな気持であつた。

○

神戸で東京ゆきの汽車に乗り替へると僕は連日の疲労のためにまるで死んだもののやうになつて眠りこんだ。これはずつとのちになつてとも子の母親が自身で僕に話したことであるが、母親もまた僕と別れてから暫くの間はぼうつと気が遠くなつて、何のために僕が口で話さないでそんな紙きれに書いて渡したりしたのかなどとは考へても見なかつたのださうな。ただ、娘がまだ生きてゐて思ひがけなくその同じ汽車に乗つてゐると知つただけで胸が一ぱいになり、逢つたらどう言はうと思ひ惑ひながらとにかく僕とよく相談した上にしようと思つて僕の来るのを待つてゐたといふのである。僕がそのまま須磨駅で下りて了ひ汽車には戻らなかつたなどとは夢にも思ひはしなかつたのでいまに来るだらうと待つてゐたのであるがそれにしてもあんまり

遅すぎる。食堂で酒でものんでゐるのか、ひよつとしたらとも子とどの箱かで話し合つてゐるのではあるまいか。さう思ふと心配になつたのでそれとなく探す積りで食堂へ行つて見たが僕の姿もとも子の姿も見えない。ほかの箱も探したが見当らないのでもう一度食堂へ戻つて見ると、さつき見落しでもしたのかずつと向うの席に紛れもなくとも子と黒田とが向ひ合つてひそひそと何か話し合つてゐるのが見えた。はつとした母親は前に僕がさうしたのと同じやうにそこの調理場の蔭に身を寄せてじつと待つてゐると、やがて黒田がさきに立つてこつちへ歩いて来たのであるが、そこに母親のゐることなぞ気のつかぬ風で行き過ぎて了ひ、つづいて背後から来たとも子もやはり通り過ぎようとしてぎよつとそこに立留つた。「とも子、」見る見るとも子の眼に涙が溢れて来た。「だまつてて！　すぐに来るから待つてちやうだい。」さう低声で言ひ捨てて素早く母親のそばを通りぬけて黒田のあとを追つて行つた。母親は呆然とそこに立つてゐた。嬉しいのか情けないのか涙がとめどなく流れて来る。気のせゐかげつそりと痩せて母親の姿を見るとまるで紙のやうに蒼くなつた娘の顔が傷ましくて堪らない。——間もなくせかせかと息をしてとも子が戻つて来た。そして母親の袖を引張るやうにして喫煙室へ連れ込んで、「何にも言つてはいやよ。後生だからママじつとしててね。ママが来てることが分るととても困るの、」「だけどとも子、あなたすぐママと一緒に帰るでせう？　この次で下りて乗替へておくれね。」「大丈夫よママ。すぐ帰るにきまつてるわよ、ただちよつと広島へ行つて来るの。どうしても行かなきやならないんですもの、」「まだそんなことを言つて。譲二さんの身にだつてなつてごらんよ。どんなに心配させたか分りやしない。夜も寝ないで方々探し廻つて、いまだつてあのひとがお前をめつけてくれたんですよ。」そのときまで僕が一緒に来てゐるなどとは夢にも思つてゐなかつたとも子はその一言を聞いただけで蒼くなつて母親にしがみついた。そしてどうかして僕に会はせないやうにしてくれ、逢へば殺されると言ふのである。それにしてもいままで姿を見せぬとはどうしたのだらうと思ひ出して母親はもう一度さつきの紙きれを出してとも子にも見せた。「どこでこれをよこして？」須磨だつたと思ふと答へるととも子は何となく安堵した顔つきになつてそんならこの男はもうそこで下りて了つたのに違ひない。宜しく頼むといふのは自分はもう手をひくからあなた巧くやつてくれといふことだ。もしさうでなかつたらこんな紙きれに書いて渡したりする筈がない。と言ふので母親も始めてさうかと思ひあたつたといふのである。母親は僕に対していかにも済まない気がした。とも子の姿を見てそのまま汽車を下りて了つたといふのは僕がどんなに腹を立てたかといふことになる。困つたことだと繰り返し母親のこぼすのを聞いてとも子は実はかういふ事情なのだとそこで始めて、僕にはとも子と結婚する前からつゆ子といふ恋人のあることを打明けたのだ。

さうな。とも子のそのときの話に依ると、とも子は僕にまつ代といふ妻のあつたことなど何とも思ひはしなかつたけれどもつゆ子のことは絶えず気になつて僕と結婚してからもそれとなく僕の素振りを見てゐると、言葉に出して言ふことはなかつたがいかにも忘れかねてゐる様子で、結婚してから一週間目くらゐから目に見えて家の中が面白くなくなつた。とも子にはどうかしてそれを切りぬけようといふ気力はなかつた。何か訴へに行くとなると結婚前から仲よくしてゐた黒田のことが思ひ出される。黒田に対しては もともとしんから打ち込んだ恋人といふのではなく一緒に街へ出て茶をのんだり活動を見たりするくらゐの気のおけない遊び友達の積りだつたのだから、口ではとにかくも心の中では黒田と駆落までして一緒になりたいなどと思つてゐた訳ではなかつたのだが、その中に僕のつゆ子に対する態度がたうとう黙つて見ては居れぬやうになつた。といふのは、とも子の家出の前日つゆ子から呼出の電報が来た。それを見た僕は果してその翌朝つゆ子に逢ひに出て行つた。つゆ子と会つた僕がどんな気持になるかといふことが、とも子には手にとるやうに感じられる。或ひはそのまま帰つては来ないかも知れぬし、帰つて来たとしても早晩とも子との家庭は駄目になるに決つてゐる。駄目になつてとも子ひとりが取残される。そんなことには死んでもなりたくない。さうなるくらゐなら自分がさきに家を出て了はうと咄嗟の間に決心したとも子は黒田をとき伏せるやうにして誘ひ出したのだといふ。このとも子の話にはどれくらゐのほんたうの気持と嘘とがあるか分らぬが始めて娘の口からこれをきいた母親の身になると、今度はこの娘の気持がいとほしくてならなかつた。このままつれて帰るにしてもちよつと黒田に逢つて何かと事情を話し合はうと思つたのであるが、とも子はそれを退けた。「駄目よ。それでなくてもびくびくしてるんだもの、ママが来てるなんて言へやしないわ。」「ぢやああたしはここで待つてるからすぐ支度をしてらつしやい。黒田さんによく訳を話してね、」「やつぱり帰らせる気なの？　ママ、」ととも子は口惜しさうに言つた。あれほど事情を話してもまだ帰れといふのなら、いまうせ自分の気持なぞただの娘のわがままだとしか受取つてくれぬのだと涙を流して言ふので母親も驚いて、その上娘をせめることも出来なかつたのださうな。言葉だけだとは思ひ乍ら万一ここで人騒がせな真似でもしてくれてはとそれが心配になつたので、たうとう母親は娘をつれて東京へ引返すことを思ひとまらなければならなかつた。とも子の言ふのには、とにかく自分は広島まで行つて話の結末をつけて来るからその間待つてゐてくれ。この汽車が広島へ着いたらわざとおくれて改札口を出て行き、どこかで時間をつぶして一汽車おくれてとも子をつれに来たやうな態にして黒田の家へ来てくれ。多分それまでには何れとも話がついてゐるからと言つて、大手町七丁目黒田病院と書いた広

島の家の所番地を母親に渡してそのまま男のゐる席へ帰つて行つたのださうな。母親は何となくその娘の様子が気がかりでひとりになるといろいろなことが心配になつた。あんなことを言つて自分をまいて了つたのではあるまいかなどと不安な気持でしよんぼりと腰をかけてゐるとそれでもときどき男の隙を見てはそつとやつて来て何かと話して行つたり母親のために弁当を買つてくれたりするのでほつと安堵するのであつた。夜が明けて間もなく汽車は広島についた。母親はわざと遅れて一番あとから改札口を出て行くとずつと向うを腕を組むやうにして仲よく歩いて行く娘たちの姿が見えた。母親は駅の前のミルクホールのやうな休憩所で風呂を借り茶をのんで一休みしたのちに、ちやうど次の下りの這入る時間を見計らつて車で黒田の家を探ねた。電車通りから大分離れた静かな邸町の中で大きな病院の棟つづきが黒田の家であつた。女中が出て来て来意を通じると慌しげな家の中の気配がしてやがてどうぞと座敷へ通された。中庭に面したうす暗い部屋の中でいかにも地方の旧家らしいどつしりとした家の雰囲気が却つて心細く思はれた。間もなくその家の母親らしい小柄な老女が出て来てお互ひに丁寧な初めての挨拶が終つてから改めて、今度は家の息子が何とも申訳のないことをしでかしましてといかにも済まぬ顔つきで詫び入るのであつた。田舎らしい素朴な言葉の中に心痛に堪へぬ親心が溢れてゐるので母親も思はず涙を誘はれるやうな気になり、いいえ宅の娘こそとこちらも娘の無分別を詫びたのであつたが、この家へ着いてから一体何と娘たちが触れ込んでゐるのか皆目見当がつかぬために下手を言つて娘たちを困らせてもならぬと思つたりしてどうきり出して好いか分らなかつた。その中に黒田の父親が出て来てひどく恐縮した挨拶をする。息子の不埒についてはどのやうにもご得心の行くやうにする積りだなどと言ふのであるが、その口裏で察するとどうやらとも子は妊娠してゐるらしいのである。とも子は黒田の子供をやどしたまま両親にもそれを隠して僕と結婚したのであるが、最近僕がそのことを感づいて大騒ぎになつたのでたうとう二人でここまで逃げて来た。東京へももう帰れぬのだからどうぞ二人を一緒にしてくれ、とそんなことを言つたらしいのであるが、それにしてもどこまでがほんたうでどこまでが芝居なのかそれも見当がつき兼ねた。とも子が妊娠してゐるといふことはここで始めてきくことで母親もびつくりした。黒田の父親の言つてゐる必ず得心の行くやうにするといふのもどんなことなのか分らぬ。とにかく娘に逢つた上で詳しい事情を知りたいと思つた母親はちよつと娘に逢ひたいがと言ふと、黒田の両親が退いてから暫くたつて、ばたばたと廊下を駆けて来る小刻みなとも子の足音がして、「大丈夫よママ、」と言ひながらてれたやうに笑つてべたりと母親のそばに坐つた。「あなた赤ちやんが出来てるなんてほんたうなの?」「大丈夫ですつてば、黒田のなんかぢやないから大丈夫よ。さう言はないとお家の中へ入れてくれさうもなかつたんですもの。あとで汽車へ乗つてからすつかり話すから、早く支度して。ああ、ほんたうにくさくさしちやつたわ。」と言ふ。母親は半ば呆れて娘の顔を見守つた。「ちやあもう話はついたの?」「話も何もないの、みんなとても頑固でいやんなつちまふ、」「そんなことを言つて、黒田さんはどうして?」「頼りないの、」とさも情けなささうに言つて、「おどおどしてばかりゐてとてもだらしがないの、さあもう行きませう、」といかにもさばさばと言ふのをきいても母親はなかなかほんたうには出来ぬくらゐであつた。着いたかと思ふともう帰つても好いといふ。いつもながらのわがままといふよりもとも子の空想して来たものとこの家の雰囲気とが思ひもかけぬほどに違つてゐたのだらうと思ふと母親は自分も一緒に哀れな気がしたのである。とは言へ、とも子がこんなにも容易に帰る気になつたのは何よりであつた。すぐに引返せば午後の一番早いの間にもう一度黒田の両親と話し合ふことにしたのであるが、両親のどちらもはつきりした意見を述べることを惧れてゐるやうな、遠慮をしてゐるといふよりも何とかしてこの災難を少ししかうけまいとしてゐるやうに見えて母親もどう言つて好いか分らなかつた。ただ朧気に推察するととも子の妊娠とか家出とかに対しては出来得る限りの責任を持つ積りらしいがそれも決して息子ととも子とを一緒にさせるためのことではないらしかつた。出来るだけ双方とも

に怪我を少くして片をつける。万事がさういふ腹であるらしいのであつた。それにしてもいよいよとも子をつれて帰るといふことにきまると母親は何となく哀れな気がして、もしかしたら汽車はもう一つおくらせても、はるばる広島くんだりまで逃げて来た二人にせめて別れを惜しむ時間くらゐやりたいと言つて見たのであるが、父親はもつてのほかだといふ顔つきで、あとのことは双方の親と親とが好いやうに談合するのが至当であつて、こんな不始末をし出来した本人同士はこののち絶対に逢はせることは不賛成だ。それにうちの息子はもう先刻分家の叔父のところへ預けてしまつたといふのである。「好いのよママ、」ととも子も傍から眉をひそめた。こんな陰気な家には一時もゐたくないといふ風なのでそこそこに挨拶をして黒田の家を辞したのであるが、そんな気持も甘い親心といふのであらう、外套の襟の中に顔を埋めて歩いて行く娘の後姿を見ると何と言つて声をかけて好いのか分らぬくらゐ傷ましい気がした。「パパにすぐ電報を打ちませうね、」と言つても返事をしなかつた。母親はひとりで東京に残つてゐる良人に電報を打ち切符を買つて、やつととも子を汽車に乗せたのであるが、いまにも汽車が動き出すといふ間際になつて息せききつてプラットフォームを走つて来る黒田の姿が見えた。動き出した汽車にそうて大声にわめき乍ら追ひかけてゐるのを見ると、さすがにとも子も涙を浮べてゐたがやがてその黒田の姿も見えなくなつた。

母親はほつとした。東京へ帰りさへすれば何とでもなる。とにかくとも子の体に怪我のないやうにして一先づ父親の許まで連れて帰らうと私かにさう思ふにつけても、幾度となく僕のことが思ひ出されてならなかつた。須磨で汽車を下りてからどうしたらう。今更とも子をつれてもう一度僕のところへ戻るといふ訳には行かぬと思ひ乍ら、しかし何とかしてさうしたいと母親は思つたのださうな。何と言つても母親は僕をとも子の良人にしておきたかつたのだ。つゆ子といふ恋人があらうがあるまいが、あの子供つぽい黒田などに比べると百倍も頼りになるやうな気がする。とさう母親はあとになつても繰り返し僕に言ふのであつた。さて広島から神戸大阪を過ぎ母子を乗せた汽車がその夜半に名古屋へ着くと、どやどやと二人の箱へ人が這入つて来た。見るとそれは名古屋にゐるとも子の父の姉夫婦たちなので、どうして二人の乗つてゐることを知つてゐたのだらうと思ふと、東京から電報で、何でも名古屋で二人を下してくれと言つて来たと言ふのである。別にとも子たちに宛てた電報も来てゐたが、それにも東京から迎へに行くからそれまで一二日の間伯母の家で休養してゐるやうに委細は追つて手紙で知らせると書いてあるだけで、どうして途中で降りなければならないのか推測することは出来なかつた。だが事情を知らぬらしい伯母夫婦の手前は母子で上方見物に行つた帰り途であるやうに言ひつくろひ一先づ汽車を下りたのであるが、さうしてゐる間も東京で何事かあるやうな気がして何となく不安であつた。何事が起つたのであらうか、何か僕が心配になるやうなことでも話したのではあるまいかといろいろ案じ煩つたといふのであるが、とにかくその夜は伯母夫婦に伴はれてそこで明かしたのださうな。翌日父親から別配達の厚い封の手紙が届いたがそれには実に思ひがけないことが書いてあつたといふそのときの母親の話を、いまでも僕は或る味気ない寒いやうな可笑しさを感じないでは思ひ出すことができぬ。「本日宅へ立廻つた譲二君は洋服の内ポケットに綿にくるんだ手術用のメスを隠し持つてゐた。間違ひもあるまじき事と思ふが万一の場合の用心にとも子は当分そちらに滞留させ、譲二君の動静を詳かにした上で小生その地まで迎へに行く心算なれば、その旨とくとお含みありたく、」云々と書いてあつたといふのだ。宛かも僕がとも子の不行跡のために乱心してとも子に危害を加へる気でもあるもののやうに、極度に心配して書いたものらしいのであるが、それは全くとも子には関係のない別の出来事なのである。

○

僕のとも子に対する気持は神戸で黒田と一緒にゐるその後姿を見たときからまるで憑きものがおちたやうにげつそりと興ざめがして了ひ、草の根を分けてもと思つた激しさが跡方もなく消えて了つた。僕はただ無暗に眠くなつて死んだもののやうに眠りこけ乍ら翌朝新橋の駅に着いた。時

計を見ると十一時までに三分ある。まるでつゆ子との逢曳のためにわざわざ仕立てて来た汽車のやうだ。僕は何か晴晴とした気持で駅のそとの洋品店で新しいハンカチなどを買ひ、いつでもそこで落合ふことにしてゐた東洋軒の階段の前で暫く待つてゐたがつゆ子はなかなか姿を見せなかつた。約束の時間には二分と遅れることのないつゆ子のことなのでまたどうかしたのかなと思つてゐると、さつきからちやうど僕の立つてゐるところから見える角度に婦人待合室のとりつきの椅子に腰を下してこつちを見てゐた一人の老婦人が静かにこつちへ歩いて来た。「湯浅さんでいらつしやいますね、何だかさうぢやないかと思つたのですけれど、」黒いびろうどの肩掛をしてさも親しさうな微笑を浮べてゐるその顔を僕はすぐ思ひ出した。いつか有有亭のお八重のところで一夜を明かした朝、四谷の家のそとまでつゆ子を送つて行つたときにちらと逢つたことのあるあの老女であつた。この老女の顔を僕は随分思ひ出したものであつた。あのばあやが何か知らせてくれるだらう、とさう思つては心待ちにしてゐたこともあつたくらゐ、僕にとつてもただ一人の味方であるやうにつゆ子から聞いてゐたからである。「今日はお嬢さまのお言伝で参りましたんですよ。」「つゆ子さんは来られないんですね、」「いいえ、あの、」つゆ子は朝から親類の客があつて約束の十一時までにはどうしてもぬけられさうにもないからさう言ひに行つてくれと頼まれたのだといふ。立話も出来ないからとにかく階上で茶でも喫みながらといふので一緒に東洋軒へ上つて行つたのであるが、そこで僕はこの老女から思ひも設けぬ諮詢をうけたのである。「そばで見てゐるとずゐぶんじれつたいと思ふことがありますよ、まあこんな風で一体どうする気なんだらうと一人で私あなたのお心持を疑つて見たりしましてね、あれではあなた蛇の生殺しではございませんか。お諦めになるものならきつぱりとお諦めになる、お諦めになれないものとしたらもつとほかになさりやうがありはしないかと思ふのですけれど、」「もつとほかにといふと？」「どうしてあなたはお嬢さまをつれて逃げてお了ひにならないんですの？　大阪へでも神戸へでも札幌へでも逃げてお了ひになれば好いぢやあございませんか、東京でなくつちやあ生きて行かれないつて決つたものでもないんですもの、どこででもご一緒に暮してらしてまた様子を見て帰つてらつしやれば好いぢやございませんか、」僕はだまつてゐた。この女はどういふ積りでそんなことを言ひ出すのかと疑つて見るよりも、僕はいまになつてもまだこの自分に何か積極的に生き抜かうといふ意欲を注ぎ込まうとする者のあることが不思議でならなかつた。深い眠りのあとで僕はこの二三日の混迷のあととは思へぬほどに健康な気持でゐたが、しかし心の底にはまだ、あの蒲田の家で僕を冷笑したまつ代の「このどたん場になつてもあなたは自惚れを捨てないのね？　ほほ、とも子さんがあなたのために自殺するかも知れないと思ふなんて滑稽ぢやあないか

の、」と言つた声や、赤坂のアパートへ桃子を訪ねたときの「いやね湯浅さん、その病院が黒田さんぢやあないの、」と言つた桃子の笑ひ顔や、汽車の中で見たとも子と黒田の後姿などがこびりついてゐて、吐き出したいやうな自己嫌悪とともに暗い厭世的な考へが絶えず僕を追ひかけてゐた場合なので、いかにも思ひがけない気がしたのである。「どうしてだまつてらつしやいますの?」と老婦人は言つた。「さう申しては失礼かも知れませんけれど、お嬢さまをあんな風におさせになつたのはみんなあなたなのでございますよ。あれではお嬢さまがお可哀さうではございませんか。どうしてあなたはお嬢さまにはつきりしたお指図をなすつてお上げになりませんの? ああしてただ待つておいでになるのでございますもの、一体何をお待ちになつてらつしやるのだらうと思ふと私、」とちよつと言ひよどんで、ちらと僕の顔を見た。「何日までお待ちになつていらしても、同じことでございますものね、あなたのことをうちの旦那さま方が何と思つておいでになりますかご存じでいらつしやいますか? まるで気違ひだと仰言つていらつしやいますのですよ。気違ひを相手にしてどうなるものかとさう仰言つていらつしやいますのですよ。」僕の耳にそのつゆ子の父の声が聞えて来るやうな気がしたが、不思議にそれに反撥する気持は起つて来なかつた。気違ひだといふのが当り前だなといふ風な気力のない肯定をもつてそれを聴いてゐるほど僕はぐつたりとしてゐたが、ただ僕に対するつゆ子の家庭の雰囲気にやはり敵意を感ぜずにはゐられなかつた。「どうもいろいろ有難う、」と僕は言つた。「ですがつゆ子さんはあなたに何か相談したんですね、」「いいえ、」と老婦人は強く否定して、「お嬢さまは何にもご存じぢやございませんの。お午の一時にここへいらつしやいますから、お逢ひになつたらもう今日にもそのままどこかへ行つてお了ひなさいまし。あとのことは私がどんな風にでも致しておきますから、」といふのである。僕はとにかくこの老婦人の言葉をそのまま受入れたことにして一先づ別れたのであるが、しかし心の底では今更駈落をして見ても始まらぬといふ気持があつた。僕がさう思ふより以上につゆ子が思つてゐる筈である。ではどうするのか。このこんぐらがつた角度をどう持つて行つたらあたり前の関係に戻すことが出来るのか恐らくあの老婦人にも分りはしないだらう。あの女はただ四谷の家の陰気な部屋の中でおせつかいに思ひめぐらして見たことを口にしたまでのことだ。とも子のこともまつ代のことも恐らくつゆ子自身の気持もあの女はよく知らずに、ただ見物人の心理で何か変つたことの起るのをのぞんでゐるまでのことだ。僕はひとりで街を歩き乍らさう思つた。僕はもう来るところまで来て了つたのだ。そこには壁があるだけで曲り角はない。廻れ右をするかその壁につきあたるか。僕にはもうそれをする根気のやうなものがなかつた。三日前に始めてつゆ子と逢つたときの少くとも何か意欲を持つてゐた自分といまの自

分とでは雲泥の相違である。今日来るといふつゆ子がもしこの前のときと同じやうに生きて行かうとする気力を失してゐたら或ひは自分も一緒にくたくたとまき込まれて了ひさうな気がする。少くともさういふつゆ子を現実の生々した世界にひき戻すだけの力はなささうな気がする。僕は何か眩暈のするやうな不安を感じるとともに、却つてふらふらとひき込まれて了ひたいやうな酔つぱらひの気持を感じた。自暴自棄といふよりももう少し積極的な、或ひは廃頽的な気持である。とにかく僕は変つてゐた。深い水底にゐる微生物のやうに僕はどんな風にでも体を動かすことが出来るやうな気がする。法律とか道徳とか人の世の約束とかの遠く届きさうもないこの世界で、僕は何でも出来るやうな気がする。僕は不安の中に喜悦を感じる。この自由な世界でつゆ子は完全に僕のものであつた。或ひは今日こそ僕とつゆ子とが結ばれる最初の日かも知れぬ。そんなことを考へながら、つゆ子を待つその二時間の間に僕は一先づ大森の家へ帰つて見た。

女中のつねは不安げな眼をして僕を迎へた。「どこからも人は来なかつたか?」「はい、どなたもお見えになりませんでした。」家の中はとも子のゐたときのままきちんと片附いてゐた。つねの運んで来た温い茶をのみ乍ら僕は何かなだめるやうな口調で、「おくさんはゐたよ。」「はい、」つねはちらと鈍い眼をあげて僕を見たがそのまま眼を落した。「俺はまたちよつと出て来るが、すぐ帰るからね、」「はい、」新橋駅に引返すと間もなくやはりこの前のやうに青いコートを着たつゆ子が改札口に姿を現した。「ごめんなさい、おそくなつて、」「今日はよかつたら僕の家へ行かない? 結局うちの方がゆつくりするから、」「お宅?」とつゆ子はいきなりさういふ僕の言草をはかりかねるやうな顔をした。「君と一緒に行つてももう構はなくなつたんだよ。とも子はゐなくなつたから、」つゆ子はちよつとだまつて僕の顔を見たが、低い声で訊いた。「どうしてなの?」「もう別れたんだ。君が日本にゐる以上はとも子と一緒になんかゐられやしないからね。」「だつて、」とつゆ子はもう一度さぐるやうに僕の顔を見た。「そんなに簡単に結婚したり別れたり出来るもの? あたしのせゐで別れたりしてはいやだわ。」「ほんたうは君のせゐぢやないかも知れないが、とにかく自然に別れることになつたんだ。そんなところへ行くのは困る?」「困りやしないけど、」どういふ訳かつゆ子はにつと笑ひを浮べた。老婦人のさきがたの提案など僕にもつゆ子にも何の意味をも齎しはしなかつたが、ただ僕がさうしたいと思へばどんな風にでもなりはしないかと思はれるほど、この日のつゆ子はもの柔かな印象を与へたのである。家へ着くと僕はつゆ子をとも子の居間であつた奥の一室へ導いた。そこは庭に面した小窓が一つあるだけで、人目をさけるのに一番適当な部屋だからである。しかしつゆ子は何となく落着かぬものごしでそこに立つたまま、それとなく部屋の様子に眼をとめてゐた。「コート

をとらない？」「ええ、」つゆ子はその青い上着を皮をぬぐやうにして脱ぎながら、どことなく家の中のもの音に耳をすましてゐるやうな表情が見る見るいたづらげな笑ひに変つてそこの煖炉の蔭によせてあるとも子の赤い上着を指した。「こんなものがあるわ。」「穿いてごらん、」つゆ子は笑つてゐた。いつでも家のそとでばかり僕に会つてゐる彼女はまだ僕がどんなところに住んでゐるのか見たこともなかつたのだ。あたたかさうに燃えてゐる煖炉もクッションの転がしてある緋の毛氈もピアノも部屋の中のものがみなつゆ子には思ひがけないものに見えたのであるらしい。「へんね、」「どうして？」「かうしてゐると何だかあたしおくさんになつたやうな気がするの、」「ばあやさんがさう言つたよ。今日逢つたらもう帰さないでそのままこの家へ閉ぢ込めて置けば好いつて。どうだい？　君がその気にさへなれば出来ないことぢやあないんだがな、」「いやなばあやね、」つゆ子は起つてピアノの蓋をあけた。そして気紛れらしく二つ三つ鍵を叩いてゐたが、やがてふいに癇高い調子でせはしなく何か弾き始めた。僕は煙草に火をつけてぼんやりとそのつゆ子の細い肩の揺れるのを見てゐた。勿論いまの言葉はただの冗談でしかないけれども、もし僕もつゆ子もその気になり得るものとしたら、をととひまでともに子のゐたこの部屋にそのままつゆ子が住まふことも出来ぬことではないだらうといふ気がした。何だかそのまま自然にうまく行くやうな気がした。さう出来ぬことは何もありはしない。自然がさうしようとは思はぬのにひとりでにこんな成行になつた以上、今日にもこのままつゆ子をここへとめておいても好いやうな気がするのであつた。僕はこの空想の中に何か運命に抗ふやうなもののあるのを愉快に思つた。さうだ、そのままやつてやらう。さう思つて何気なく窓のカーテンをあけると、そこから見えるポーチの前の芝生に飼犬のトミが坐つていつもピアノや蓄音機の音のするたびにするやうに奇妙な風に頸を仰向けて吠えてゐるのが見えた。トミはとも子が洗足の家から一緒につれて来た犬である。さういへばいまつゆ子の弾いてゐるピアノも長椅子も飾り棚もみんなとも子の持つて来たもので、もしこれからとも子のことが片附いていろいろなものをこの家から運び出すことになつたら、この芝居の小道具として一体何が残るであらう。何よりもこの温和らしい家庭の雰囲気はあと方もなくなつて了ふことだらう。そして再び僕は画学生のがらくた道具の中にうそ寒くとり残されるのだと思ふと、いまの自分の空想までただピアノと緋毛氈とに支配されてゐるのかと可笑しくなる。「旦那さま、」そのとき扉の蔭から遠慮らしくつねが呼んでゐた。「あの、高橋さまがお見えになつていらつしやいますのですけれど、」と低声で言ふ。高橋といふのはまつ代の旧姓なのである。

忽ち僕は冷水を浴びたやうな気持になつてそつとつねの背後から出て行つた。まつ代は裏口の扉のところに立つてゐた。見馴れない燃え立つやうな朱色のコートを着て遠くから眼の縁の隈どりの見えるやうな化粧の顔で僕に笑ひかけた。「いつ帰つて来たの？」「どこから帰つて来るんだ？　また何しに今ごろやつて来たんだ？」「とも子さんに逢つて来て？　隠したつて駄目よ、あたしちやんと知つてるんだから。あなた、とも子さんのママと一緒に神戸へ行つたんぢやあないの、」とさも人を馬鹿にしたやうなその笑顔を見ると、二三日前の夜の腹立たしかつた記憶がそのまま胸もとにこみ上げて来て、その冷笑を浮べたまつ代のうすい唇にがつと一撃喰らはせてやりたいやうな衝動を制へることが出来ないのであつた。とも子に逃げられた僕がどんな顔で参つてゐるか見てやらうといふまつ代の思惑が露骨に見えるのであつた。「知つてるんなら何故きくんだ。馬鹿、撲るぞ。撲られるのが可厭ならさつさと出て行け、」「たいへんな剣幕ね、」まだせせら笑ひを浮べながらまつ代は少し体をあとへ引いた。「岡野さんがさう言つてよ。あたしの方のことをこの際はつきり実行してくれないと積りなら、岡野さんの手で何も彼も新聞ですつぱぬいて了ふつて。湯浅譲二つていふ男を裸にして社会的な糾弾を加へてやるつて。」「馬鹿野郎！」思はず僕は声を立ててまつ代に躍りかかつたがもうこのときはまつ代は扉のそとへ出てゐた。「あとで泣いたつて知らないわよ。とも子さんがゐなくなつたと思ふとそのあくる日にはもうまへの女をひき摺り込むなんて、まるでごろつきぢやあないの」さういふまつ代の捨て科白といつしよにばたあんと扉が風にあふられて後へはね返つた。気がつくとこつちの騒ぎなど知らぬげなつゆ子のピアノの音がここまで響いて来る。僕はちよつとの間あらい呼吸をしてそこに立つてゐたが、いつかの晩まつ代の家の長火鉢の前で酒をのんでゐた岡野のあから顔を思ひ出すと、その岡野とただの知合ひ以上の間柄であるらしいことを隠さうともしないまつ代の無智な感じや、今度はまたその岡野によつて新聞へすつぱぬく云々と言ひ放つやうになつたかと思ふと、自分の方のことはとにかくとして僕はのぼせ上るほど腹が立つた。だがまつ代のやりロは何とかして僕から金をとらうといふよりも金のことはとにかくどん底まで僕をくさらせるといふのが当面の目的であるらしくそのまつ代の目的から言ふといつでも僕は完全に彼女の手中に落ちて了ふ。それも僕の癪にさはつた。僕は洗面所へ下りて何となく手を洗ひ少し時を待つてつゆ子のゐる居間へ戻つて行くとつゆ子はまだピアノの手をやめないで僕の戻つたのも知らぬ風である。「何かのまない？」僕は棚から葡萄酒の壜をとつてグラスに注いだ。つゆ子はだまつて盃を口へ持つて行つたが、ちよつと唇を動かしただけで下へおいた。「あれから何か考へてくれて？」「考へる必要がなくなつたのさ、ほんたうのことを知つてたらびつくりするよ、ひとりでにかうなつたんだからね、ねえ、君はさつき君のせゐでとも子と別れたりしちやあいやだと言つてたけど、君のせゐでなければ君は平気？」「あたしのせゐでも平気よ、」つゆ子は眼にいろいろな意味

のある笑ひを浮べて言つた。「とも子さんがゐてもゐなくてもあたしには同じことなんですもの。さうでせう？　あたし一日だつてあなたのことを心配したことなんぞないの、譲二さんの方のことはどんなになつてもあたし平気よ。分らない？」「僕の現実の境遇なんぞどうでも構はないと言ふの？　つまり君は僕のおくさんになる気はないからだと言ふんだらう？　ねえ、つゆ子、」と僕は自然な気持でつゆ子の名を呼び捨てにしたことに軽い快感を感じ乍ら、「君の気持はいつでもお伽噺の世界なんだね、さうぢやあないか、どうしても一緒に生きて行かうと思へばお伽噺の世界ばかりぢや駄目だぜ。君は何と思つてゐても僕のおくさんだよ。構はないから君は君の好きなやうに思つてるが好いさ。今日は帰さないよ。このままここにゐるんだよ。それで困ることが出来たら片つぱしから僕が対抗してやる。」僕はいまし方帰つて行つたまつ代の顔を思ひ浮べ乍ら言つた。一つ一つ俺が対抗しよう、といふ気持がまた容易にさうすることが出来るもののやうに僕に思ひ込ませるのであつた。僕はつゆ子を抱いてながい接吻をした。いつの間にか窓のそとは暗くなつてさうしてゐるとまるで山の中にでもゐるやうに静かである。頭の上で鳩鳴き時計がゆつくりと五つ鳴つた。あの時計もとも子のだ。僕はぼんやりとさう思つた。するとあの何とも言へぬ空虚な無生活的な考へがふいに僕の胸に戻つて来る。俺のいましてゐることは砂の上に絵を描いてゐるやうなものだな、とさういふ考へが僕の頭の中を掠めたと思ふと、その考へがそのままつゆ子の体に伝はりでもしたやうにふいにそのとき僕の腕の中でしくしくと泣き始めた。「どうしても駄目なの、駄目なの、」とまるで子供の泣くやうに激しく身をもがいて泣きじやくるのであつた。僕は半ば途方に暮れて何だかさうすれば新しい力が湧いてでも来るやうに一層つよくつゆ子の体を抱きながら、「何を馬鹿なことを、君は何にも考へないでゐれば好いんだ。」といふのであつたが、自分でもその言葉が何を意味するのか分らなかつた。つゆ子はいつまで経つても泣き止まない。あとで思ふと、あのまつ代の来たことも何も彼も気がついてゐたのだらう。言葉ではともかく子のこともまつ代のことさへも考へたことはないと言ふが、さういふよりほかはないこんぐらかつた事情の中で、まだ二十を出たばかりの若い女が訳の分らぬ混乱した気持になるのは当然だ。僕はさう思ひながらただ呆然とつゆ子の肩の慄へるのを見てゐた。部屋の中はもうすつかり暗くなつたが、灯りをつけに来るのもどうかと思つてゐるのであらう、女中のつねは一度も顔を見せなかつた。僕はつゆ子を抱いたままそつと隣りの寝室のベッドの上へ運んで行つた。冷えきつた部屋の中にうすいカーテンをすかして月の光がさし込んでゐる。「つゆ子、」僕は低い声で呼んだ。蒼ざめた顔の中に泣き腫れた瞼がうすあかい二枚の貝殻のやうになつて閉ぢてゐて、ときどき息を吸ふたびにひくひくと唇の動くのが喩へやうもなくもの哀れに見えたのである。何

だか僕はこのままこのつゆ子と一緒に死ぬことになつてもそれが自然であるやうな気がした。死ぬなどといふことは生きて行けないから死ぬといふよりも、死ぬことが自然な気持であるやうな場合にふらふらとさうなるのに違ひない。僕はしかしそんなことも考へてゐたのではなかつた。呆然と虚無のやうな気持の中でつゆ子の冷えた体を抱いた。「旦那さま、」扉のそとでつねがやつと聴えるくらゐの低声で呼んでゐる。「いま行くよ、」僕はスリッパを穿いて部屋のそとへ出た。夕飯を拵へたけれども食べるかと訊くのであるが、何となく心配げなつねの様子を見ると僕はちよつと夢のさめた人のやうな気持になつて飯はそとで食べるからいらぬと断つてから部屋へ戻つて来たがつゆ子もまた暗い中に眼を大きくあけてゐた。「もう帰るわ。」「帰る？つて来るの、今度出て来たらもう帰らなくても好いやうに。あなたもすつかり支度をしといてね、」それはいつでも死ぬことの出来るやうな準備をしておくやうにと言ふ意味かも知れぬが、つゆ子はさう言つて寝乱れた髪の毛を掻き上げながらにつと笑つて見せた。時計を見ると七時を過ぎてゐた。何れにしても今日は無事につゆ子を帰しておいてその間に片附けることは片附けて了はう。さう思つた僕は支度をしてつゆ子を送りがてら家を出たのであるが、このつとの間使ひにでも出してやるときのやうな或る安堵があつた。

○

やがてつゆ子と別れてから僕はふと用事を思ひついて本郷へ廻つたが、その帰り途に区役所前の通りへ出ると一軒の医療器具店で店じまひ投げ売といふ大きな立看板を出してゐるのが眼についた。何気なくその店さきに立留つてさまざまな手術台や医療器具が昼のやうに明るい電燈の光を反射しながらぎらぎら光つてゐるのを見てゐる中に、片側のガラス戸棚の中に手術用の鋏やメスが何十挺とならべてあるのが眼にとまると、ぱつと一つの光景が僕の頭の中に浮んで来たのである。十三年も前のことだが僕の友だちの一人が家庭のごたごたからメスで頸動脈をきつて厭世自殺を企てたときの記憶が、まるでいま見て来たことのやうな鮮かさで蘇つて来たのである。覚えてゐる人もあるかも知れぬがその頃銀座で「ざんぼあ」とかいふ北原白秋をめぐる文士画家の一団がそれぞれの手になる手芸品のやうなものを列べて売つたりしてゐたのを真似て、やはり若い文学絵画青年のグループをつくつて四谷で趣味的な夜店のやうなものを開いたりしてゐた「けんちや」といふ花屋の若い主人が、或る晩のことおそくまで店に集つてゐた僕たち仲間のものと一緒に、自殺するのにはどういふ方法がもつとも賢明かといふやうなことを夢中になつて話し合つてゐたのであるが、溺死は苦しいから駄目だとか縊死は楽な方法

だがあとで醜いから困るとか凡そ馬鹿らしい話をしてゐる中に「けんちや」の若主人は、いやうまいことがあるよと言つて傍の事務机の抽出しからセットになつた家庭用医療器具らしいものの箱をあけて中から一挺のメスをとり逆手に持つて頸にあてる真似をして見せた。「酒をたらふく呑んでさ、血の循環の盛んになつたところでぶすつとやれば一番世話なしだぜ、俺はこれでやることに決めるよ。」と言ふのであるが、その男の死ぬ死ぬと言ふのももう決り文句になつてゐたので、またかといふくらゐにしか誰も思はなかつた。何でも恋女房であつたとかいふその細君にほかの若い男が出来、自分も向ひの下駄屋の娘だかと出来合つてそのために家の中は毎日風波の絶間がないといふ風であつたが、まさかそんなことで本気に死ねもしまいと、みんなさう思つてゐたのである。ところがその翌朝まだ暗い中にどんどん表の雨戸を叩いて人が僕を起しに来た。「けんちや」の若い主人が死んだからすぐに来てくれと言ふ。驚いて行つて見ると、部屋一ぱいに商売用の花を撒きちらして一隅においてある大きなオルガンの上にがつくりと突伏したまま死んでゐるのであるがちやうど昨夜の話の通りに傍には空になつたコニャックの壜が転がり、壁と言はず天井と言はずまるで噴霧器で吹き飛ばしたやうな血しぶきが、よくもそんなところまで飛んだものだと思はれるほど遠くまで飛び散つて凄惨を極めてゐた。その部屋の中の光景が、いまこの医療器具店の店さきに列べてあるメスを見た瞬間に、ぱつと僕の頭の中を掠めたのであるが、さう思つた瞬間に僕はふらふらとそのメスの一挺を買ふ気になり、そこにゐた若い店員にそれを包ませて了つたのである。丁寧に脱脂綿にくるんで箱へ入れてくれたのを何気なく外套の内ポケットに隠して僕は店のそとへ出たのであるが、そのときはまだ漠然とした気持でそれを買つたといふだけで、それをもつて自分の肉体の一部を傷つけ自分で自分の生命を断たうなどと考へてゐたのではなかつた。

風のない凍てつくやうな寒い夜だつた。僕は何となく腹の据つたやうな不思議な明るい気持で帰途についたが、ふとも子の父親に神戸ゆきの結果を報告しておかねばならぬことに思ひついて、途中から洗足のとも子の家へ廻つた。父親は僕の姿を見ると多少驚いた様子で、「いやどうも御苦労をかけて、」と言ひながら何となく僕と眼を合さぬらゐにどぎまぎしてゐるのである。僕は神戸でホテルを軒別に探し歩き、もう逢へぬものと思ひ諦めて乗つた下関行の汽車の中で思ひもかけず二人の後姿を発見した顛末を細細と話した上、二人に面と向つてその場で僕が何か言つたりしては却つて話が感情的になり物事を面倒にして了ふと思つたのであとのことは母親に任せて僕はひとりで須磨から引返して来たのだといふと、さすがにほつと安堵の息をついたやうで、何かと僕の労をねぎらひ、よくその気になつてくれたと繰り返して言ふのであつた。「君のその気持はわたしにもよく分つてゐる積りだ。感謝してゐるよ。どうか今度のことはこのわたしを信じて暫くの間私に任せておいてくれないか。かならず君の心のすむやうな処置をとる積りだからね。」といかにも済まぬことのやうに繰り返して言ふので、もうそのときはとも子のことなどをととひまでの生々しい屈辱感から遠くはなれて、却つてさういふ結末になつたことに或る責任転嫁の気易さを感じてゐる僕は、何となくそのまま聴き過ごすのは済まぬやうな気がしたが、さうかと言つてこの際つゆ子のことも何も彼も洗ひざらひ打明けて了ふほどの気にもなれなかつたので、ただ黙つてきいてゐた。「何でもありませんよお父さん、僕は却つて身軽になつて気が楽なんです。」言へるならそんな意味のことが言ひたかつたのであるが、僕の胸の中には久し振りにこのとも子の父親に対する人間的な近親者のやうな感じが湧いて来た。この父親ともこれでもう逢はなくなるのかも知れぬといふ気持はとも子と別れるといふ気持以上に淋しかつた。ちやうどそこへ女中が旦那さまお風呂をと言ひに来た。「風呂？」と父親はいまは風呂どころではないといふ顔をしたが、ふと僕の方を振返つて、「君はどうだね、汽車で疲れてるだらう、何だつたら一風呂浴びてから来たらどうだね。」言はれて見るとまだ僕は今朝から風呂にも這入つてはゐなかつた。「ぢやあちよつと失礼して、」と湯殿へ下りて行き、二三日来の旅の垢をさつぱりと落して何となくのびのびした気持になつて体を拭いてゐると、脱衣室の硝子障子のそとからさつきの女中が声をかけて

「あの、旦那さまがお書斎の方でお待ちになつていらつしやいます。」といふ。何気なく女中のあとからついて行くと、書斎といふよりは改まつた来客を応接するためのやうに使はれてゐる二階の洋室の一間でさつきまでの父親とは別人のやうな或る物々しい表情を浮べて待つてゐたが、大きな卓子を挟んでその真向ひに僕の腰を下すのを見るが否や、待ち構へてゐたやうに何か白い包のものを懐中からとり出して卓子の上におくとそのまま、握り拳にした片手を眼にあてて、あの男泣きといふ形容の言葉のやうにてへへへつといふやうな声を立てて泣き出したのである。卓の上の白い包はさつき僕が本郷で買つて来たメスで箱に収めたままで外套の内隠しに入れておいたのであつたが、箱から出して脱脂綿にくるんだなりになつてゐる。多分僕が風呂にゐる間に父親の眼に触れたのだらうと思ふが、あまり思ひがけぬことなので僕もはつとして途方にくれて了つた。「譲二君、このメスは一体どうしたものなのかわたしにだけ話しては貰へぬか。わたしはそれほど君が、」と言ひかけて、またくくくと咽喉へ声をのんで泣くのである。僕はただ気をのまれて了つて、メスのことも、つゆ子のことは別にしてあれを買つたときの気持をありのままに話して了へば何でもないことだと思ひながら、咄嗟の間にそれが言へなかつた。「それほどまでに君が思ひつめてゐるとは思はなかつた。」父親はなほも同じ調子で、「どうか譲二君、とも子のことはこの通りわたしが謝るから思ひなほしてく

れないか。君の顔の潰れるやうなことは断じてしない。君はどういふ気持でゐるか分らないが、わたしはとも子を君のところへやらうと思つたときから、君のことをほんたうの自分の息子だと思つてゐた。君の仕事のことも君の将来も及ばずながらわが息子として立派に立つて行けるやうにといふ考へから離れたことはなかつた。とも子の不心得からこんな不幸な結果にはなつたけれども、それはそれとしてわたしの心持は以前と少しの変りもない。君さへその積りでゐてくれるなら、これからのちもずつと君とわたしとはほんたうの親と子だ。どうか譲二君、君もさういふ気持になつてはくれないか。君の将来は父親の義務としてこのわたしに引受けさせて貰ひたいのだ。必ず君の身の立つやうにする積りだ。君の立場としてはそれほどぬきさしのならぬ気持になるのは当然だ。それは当然だ。どうかそこのところをこのわたしに免じて我慢して貰ひたいのだ。そして君の将来のことと一緒にこのメスをわたしに預けて貰ひたいのだ。」だまつて聴いてゐた僕はそのときになつてやつと父親の言つてゐる言葉の意味が分つた。このメスをもつて僕がとも子を傷つけるか、とも子を害して自分も一緒に死ぬか、何かさういふ傷害沙汰に及ぶものと合点して極度にそれを惧れてゐると同時に、さういふせつぱ詰つた気持になつてゐる僕を心から憐み、命にかけても僕をさういふ気持から明るみへ引出してやりたいと思つてゐるのであるらしかつた。僕はその父親の心配を笑つて見せようとして却つて硬ばるやうな笑顔をした。「大丈夫ですよ、お父さん。あなたの心配してらつしやるやうなそんな馬鹿なことをどうしてするもんですか。そんな気持でゐるくらゐならひとりで須磨から引返して来たりしやしません。そのメスは今日本郷で店じまひに売つてたものですから何となく買つたんですが、ほんたうは絵を描くのに使ふつもりなんです。」「ほんたうだね、譲二君」「ほんたうですとも。偶然それを買つてこつちへ廻つたといふだけでお父さんにそんなご心配をかけたかと思ふと却つてへんな気がするくらゐです。とも子のことはたとひどんなことになつてもそのために僕が自分を失して了ふやうなことは決してしませんから、それだけはどうぞご安心なすつて下さい。」さう言つてゐる間に僕の眼に湯のやうな涙が溢れて来た。不思議な感情であるが僕はそのとき自分がほんたうに死ぬ積りでそのメスを買つたのであるやうな錯覚に陥つて、この好人物の父親によつて始めて誠実な人の心を知つたのでもあるやうな気がして来たのである。僕は声を立てて泣いた。もう何年にも僕はこんな気持になつたことはなかつた。僕は泣きながら自分の嗚咽の間に父親の声がまじつて聞えるのをきいた。「ぢやあこのメスはわたしが預かるよ。泣くのは止し給へ。さあ、譲二君、」僕はやつと声をのんだ。すると涼しい風のやうな気持が僕の胸の中を吹きぬけた。僕はやはり死ぬ積りなぞなかつたが、しかしいまは死なうと思へばそれが訳もなく出来ることであるやうな気がした。

その夜はおそくまで父親と話し込んで暇を告げたのは一時を過ぎてゐた。そとは寒い凍てつくやうな白い靄が一面にぼうつとたちこめてゐた。「寒いからこれを掛けて行き給へ、」父親はわざわざ自動車のところまで出て僕に膝掛けの毛布をわたしてくれたりした。あとで分つたのであるが父親はひどくこの晩の僕の様子を心配したのであると見え、そのときはまだ広島から汽車でこつちへ帰つて来る途中であつたとも子母子に帰京を見合せるようにといふあの電報を名古屋の親戚にあてて打つたのであつた。しかしそれは全くこの父親の取越苦労であつたとも言へるし、またさうばかりでもなかつたとも言へる。僕はもうどう自分を導いて好いのかまるで見当がつかなくなつてゐたのであるから。

○

それから二三日の間は僕は誰にも逢はずに家へこもつてゐた。何にも愉しくもなくまた悲しくもなかつた。ただどうしやうもない虚無的な感情が僕につきまとつて離れなかつた。何のために僕はあのながい間あくせくと動き廻つてゐたのだらう。日本にゐた間も外国で暮してゐたあの七年の間も僕はまるで気違ひのやうになつてあくせくしてゐた。漠然とした気持ではあるが僕はいつも背後から何かに急き立てられてゐたやうな気がする。僕自身がはつきりと何かの目的のためにあんな風にあがき廻らうと思つたことがあるだらうか。それはある。僕は自分の考へを遠くから追つた。随分と前のことだ。僕のあとからまつ代が巴里までやつて来た。子供が生れた。子供は可愛かつた。白い頭巾を冠つてにこにこ笑つてゐる顔を見るとこの子供のためになら黒ん坊のやうになつて働いても悔いないと思ふくらゐに可愛いかつた。僕はこの子供のために一生アルミニュームの弁当箱から離れられない生活をしても好いと思つた。明るい生甲斐のある気持であつた。事情があつてまつ代と子供が日本へ帰つたのちも僕の子供への愛着は変らなかつた。あの大震災のときにも事情の分らぬ外国では日本全土が烏有に帰したもののやうに伝へられ、子供もあのまつ代も生きてゐる筈のないものと思ひ込んだときには、僕は根こそぎ生活の支柱を失つたやうな、ただあの二人のためにだけ生きてゐたのだと思つたくらゐに悲嘆の底におちた。あの気持があのままで続いてゐたら僕も世間普通の父親とおなじやうな子煩悩の父親になつてゐたであらうと思ふくらゐ、何か生きてゐることに張合を感じた。あの気持を思ひ出す。だが日本へ帰つて見ると子供もまつ代もこれがあの同じ二人であつたかと思ふくらゐに僕にとつては思ひもまうけぬ二人になつてゐた。白い頭巾をかぶつてゐた子供はもう九つになり、駄菓子の飴をしやぶりながら親しまぬ眼つきをして僕を見た。いぢけた、疑ひ深い眼つきだつた。「要ちやん、パパにこんにちはなさい。まあ何て顔してるの、ほほほほ、」ちらと媚のある眼をしてまつ代は笑つた。

隈どりのしてある乾いた眼であつた。僕の船の着く前の夜まで踊り場で働いてゐたといふまつ代は、僕を迎へたのちも、やはり踊り場の女のやうな様子を失はぬのであつた。妻と子供。だが僕にはこの二人の思ひ設けぬ変り方を咎める資格はなかつた。たぶん二人はそのやうになるほか僕を待つ方法がなかつたのだ。さう幾度僕は思ひなほして見たか分らなかつた。しかし僕はいつの間にかこの二人を愛さなくなつてゐた。そしてあの外国の宿で一人で絵を描いてゐたときの孤独な気持を思ひ起し、ただこつこつと仕事を続けた。仕事。僕はこの仕事を自分を救ふただ一つのものと思つてゐた。それは確かにその筈であつた。しかしこの仕事は僕のながい間の外国生活のために日本の社会情勢との緊密な繋がりを失つてゐた。僕はとり残されてゐた。どうしたらそれを一つの軌道の上にのせることが出来るのか僕には分らなかつた。その不安は大きかつた。僕は日本に帰つてゐたが外国にゐたときよりもなほ見知らぬ国に来てゐるやうな気がした。何を僕は摑んでゐるといふのであらう。この孤独な思ひは僕にはいつもついてゐた。家にゐても僕はものを言はなくなつた。坐つてゐるとそのまま地面の中に体がめり込んで行くやうな気がする。このまま僕が消えて了ふといふことがあるだらうか。僕は母親の乳房をさぐる幼児のやうにつゆ子の恋を求めたのであつたが、それはどこまで行つても酬いられるところのないものであつた。僕は風の吹いてゐる街の中を歩いてゐる気持であつた。夕方になつて灯りのついてゐるのはみな人の住んでゐる家である。そして僕はやはりどこまでも風の中を歩いてゐるのであるが、誰がそれを僕にさせるのか分らぬ。多分僕はさういふ方法でしか生きて行くことを知らぬ男なのだらうと思ふと、このままたとひ僕が生きることを止めたとしてもそれも予定の道の中のことのやうな気がする。いつの間にか僕もその近くまで追ひつめられてゐた。

或る朝つゆ子から取次の電話がかかつて来た。家の人のゐない間を見て出て行くからこれからすぐに信濃町の駅まで来てくれといふ。行つて見るとつゆ子はそとの売店の蔭で不断着に白い肩掛をしたまま立つて待つてゐた。「一時間くらゐ大丈夫なの、外苑の方へ出ない？」といふので一緒に出て行つた。「今朝は手紙を片附けたの。あなたの手紙もみんな焼いたわ。あともう三日くらゐでみんな片附いて了ふの。ねえ、大丈夫ね？」いつの間にか僕も死ぬことに心をきめたものと信じてゐるつゆ子を、僕は怪しまうとも思はぬのであつた。寒い朝で僕らのほかに散歩の人は誰もゐなかつた。弱い陽ざしがまばらな樹立をとほして道におちてゐる。白い足袋を穿いたつゆ子の形の好い爪先がゆつくり動くのをぼうつと見てゐながら僕は凍りつくやうな孤独を感じた。「ほんたうに大丈夫ね？　あたし何だか心配で、——お家を出て了つたらもうあたしどんなことがあつたつて帰るのはいや。ね、いやよ。その積りでお家を出て了つて、ひよつと譲二さんの気持が変つたらとそれを思ふとはいの。生きてたつてどうせ一緒に暮す訳には行かないんですもの。やつぱりあたし、ひとりで死ぬやうになるわ。あたし、ひとりで死ぬのはいや。」「大丈夫だよ。喜んで一緒に死ぬよ。」蒼ざめたつゆ子の頬に微かな血の気が上つた。「ぢやあもう、あのことも決めてくれて？」僕はだまつてうなづいた。どんな方法で命を絶つのかといふことがとうからつゆ子の心配になつてゐた。せめて死ぬときくらゐは立派に死にたい。あんまり浅間しい死骸を人の眼に残したくないと口癖のやうに言つてゐたのである。僕たメスが浮んで来た。あれに決めよう。さう思つた瞬間になに平気で簡単に出来るといふことが愉快でたまらなかつた。「十六日だね？」僕らは千駄ケ谷の駅の前で立留つた。「朝の十時きつかりに渋谷まで迎ひに来て、」さう言つてつゆ子が改札口へ消えるのを見ると僕は後も見ないで大股に歩き去つた。

約束の日まではまる三日あつた。家へ帰ると僕はまづ家中のものを細々と片附け始めた。まる一日かかつてこつこつと片附けてゐる中に僕は何だかこれが生涯を終つて了ふための整理だといふことを忘れて、忙しい大掃除か何かのやうに次から次へと機械的に処理して行つた。生きて行かうとするとあんなにこんがらかつて了つてどこから手をつけて好いのか分らぬくらゐ混乱してゐた生活が、さて死なうといふ気持になると何といふ明るさでばたばたと片附いて了ふのであらう。僕は何だか自分が凄い腕利きの整理委員でもあるやうな気がして、このめちやめちやになつてゐる破産状態からやすやすと抜け出して了へるやうに思ふのであつた。僕はきれいに掃除のすんだ書斎の明るい窓のところへ机をよせてペンをとつた。誰へあてて書き残すといふこともないが漠然と遺書のやうなものを書いておきたいと思つたからである。強ひて云へば自分で自分に言つておきたいと思ふやうな種類のことだ。家の中が静かなので家主の家の爺やが庭の掃除をしながら声をかけて行つたりした。「小説でも書いてゐなさるかね？」「ああ、小説だよ。」と僕は答へたりした。翌々朝、僕はそれとなく暇乞ひをする積りで二三人の先輩知己のところへ出かけた。最初に一二枚の絵を持つて、その頃の僕の生活の唯一の支持者であつたあの麹町の書肆の主人のところへ行つた。その絵は前の日仕事場の整理をして気に入らぬものは悉く破り捨て僅かに残つたものの中から選り出したもので、いまではもうあんなものも描けぬと思ふが、南欧風の若い兵隊がうつむいて足にゲートルを巻いてゐるところのものなど、特に誰の手にも渡したくなく思つた。その家にはまだ他にも僕にとつて思ひ出の深い作品がいくつも行つてゐるのです？　馬鹿に顔色が悪いぢやないですか、」神経質なんですことならまとめてそこへ置きたかつた。「どうした

主人は僕の顔を見るとすぐに言つた。「僕、実はあさつての船でまた外国へたとうと思ふのです。」「あさつての船で？」と信じ兼ねたやうな顔つきで、「また何だつてさう急に、」僕は半ばほんたうの自分の気持を打明けた。日本へ帰つて来てからの僕は仕事の上でもまるで自信を失つて了つてゐた。どういふ風にしてその気持を破つて好いのか見当がつかぬ。このままじつとしてゐればゐるだけ身動きのとれぬ気持になりさうなので、いつそもう一度向うへ行つて何とかきりぬける方法を発見したいと思ひ立つたのであるが、さういふ気持であるからいつになつたら帰つて来ようと思ふやうになるものか分らぬ。或ひはこのまま帰つて来ぬかも知れぬからぜひともこの絵を預かつておいて貰ひたい。そんな風に話すと主人も漸く分つたやうな顔つきになつて、もう少し日本にゐて貰ひたいと思つたが、さういふことならば強ひて止める訳にも行かぬ。君のその真剣な気持に対しては自分は深い同情を持つてゐるつもりだなどと言つてくれたのであるが、やがて暇を告げて往来へ出ると危ふく涙が流れさうになつた。言葉はまるでほかのことを話してゐるのであつたが、僕も主人も何となく触れてはならぬことを残しながらやはり思つてゐることを言ひ合つたやうな気がしたのである。そこからすぐに僕はこの間の本郷の医療器具屋へ廻つて同じやうなメスを二挺買つた。その帰りに永田町の森村氏のところへ廻つたときはもう暗くなつてゐた。森村氏には僕が絵を描き始めてから今日までの仕事の上では勿論生活上にまで言葉には言へぬほどの世話になつて来てゐるのであつたが、もしかしたら森村氏にだけはほんたうのことを話して了つておきたい。話したら一言のもとに止められさうな気もするが、などと思ひながらその古風な武者窓のある玄関に這入つて行くと氏はどこかへ出てゐて家にゐなかつた。その方が却つて好いのかも知れぬと僕は強ひてさう思ひながら、自動車で京浜国道の楠本の家へ廻つた。楠本とはもう何ケ月逢はなかつたことであらう。箱根の騒ぎ以来、特に繁々と往来してつゆ子のことでは親身も及ばぬほどの心配をかけたのであるが、さうであればあるほどとも子のことでは彼の気を損ねて了ひ、いつの間にかふつつりと逢ふこともなくなつた。楠本の律儀な性格では僕のすることなすことが一つ一つ気に障つたのであるらしいが、しかしそれもいつか逢つて話せば分ることだと半ば安心した懐しさで彼を待つてゐたのである。生垣の隙間から雨天体操場のやうな楠本のアトリエに灯のついてゐるのが見えた。家にゐるな、と思ふと何となく胸騒ぎのするやうな気持になつて案内を乞ふと、楠本の細君が小さい子供に乳をふくませ乍ら出て来た。「まあ湯浅さん、どうなすつたの？　父さん、湯浅さんですよ。」とそこからすぐ見えるアトリエとの間のカーテンをあげて楠本を呼んでくれた。楠本は返事をしなかつた。「父さん、湯浅さんがいらしたんですよ。」ともう一度呼んでから低声で僕の方へ、「まだあのことを怒つてるんですよ。構はないからお上んなさいよ。逢つて了へば何にも言へない性分なんですから、」言はれるままに細君の背後から僕は上つた。「やあ、」と楠本は不機嫌な声で言つた。僕らはしばらくの間だまつてゐた。「実は明日からちよつと旅行に出るもんだから、」と僕が言ふと楠本はちらと眼をあげたがそのままただまつて了つた。細君がそばから、「どこへいらつしやるの？」「ひよつとしたらまた外国へ行つて了はうかと思つてるんです。どうも気持が行詰つて了つて、」「湯浅さん！」細君はじつと僕の顔を見詰めてから、「あなた、何かなさるお積りぢやあない？」と言つて、短刀を逆手に持つて咽喉をつく真似をし乍らさも人を揶揄するやうなうす笑ひを浮べて、「ね、かうする気なのでせう？」といふのであつたが、この好人物の細君の眼にも何となく僕の様子が只ではないやうに見えたのであらうかと思ふと不思議な気がした。「そんな風に見えますか？　まだそれだけの勇気はないんですがね、」「何を言つてるんだ。馬鹿なことは言はずに茶でも淹れて来い。」楠本は始めて細君に向つて言つた。「いいえ、馬鹿なことぢやないわ。湯浅さんはきつとやる気よ？　ねえ湯浅さん、少しはあたつたでせう？」「それは僕でもときにはそんな気になることもありますよ。」「危いわ、湯浅さん。そんな短気なことはおやめなさいよ。あなたなんぞ、それこそもう少しの間の辛抱ぢやあないの。いまにきつと、よくもあんな気になれたもんだとお思ひになるときが来るわ。お仕事の方のことだつて巧く行くやうになるし、お金のことだつてもうちよつとのところよ。そこまでの辛抱が大切ですよ。それはご心配なこともたくさんおありでせうけど、父さんに話せないところは、せめてあたしにでも話して下されば好いのに、何だつてまたこんなに来なくなつてお了ひになつたの？」「いや僕、」と言ひかけるといまにも涙がこぼれさうになつた。楠本はだまつてゐるが、細君の言つてゐることが或ひはそのまま彼の気持の中にもあるかも知れぬといふ気がしたからである。だが多分、僕がここへ来ないやうになつてからしげしげとま代がやつて来て何も彼も洗ひざらひ細君に話してゐたのであらうと思ふと、この細君の言ひ草も半ばはま代の思惑がもとになつてゐるのかも知れぬ。いまに自殺でもするでせうよとそんなことを言つたのであらうと思ふが、さういふま代に対してももう生々しい腹立たしさは湧いて来なかつた。暇を告げると何と思つてか楠本は門のところまで送つて来た。「もう何時だらう？」「一時八分前だ。」楠本はその痩せた片手をうす暗い門燈の灯にかざすやうにして始めて僕に答へた。

楠本に別れると僕はしばらくそこの暗い四辻に立つてゐた。その近くにもう一軒寄つておきたいところがあつた。少し時間が遅過ぎるが、その前まで行つてまだ灯りがついてゐたら寄つて見よう、さう思つてしんとした梅屋敷通りをこつこつと歩き出した。この道を同じやうな夜更けに何度も歩いたことがあるが、あれはまだ外国から帰つて来た

許りの頃でほかに友だちもなかつた僕は野崎といふ通信社の男と一緒によく飲み歩いた。その野崎のことを思ひ出したのである。野崎はまだ起きてゐた。「いようどうしたい？」と二階の窓から顔を出して懐しげに言つた。ここでも僕は同じやうに、急に思ひ立つて明日の船でまた外国へ行くつもりだといふと気の好い野崎はそのまま真に受けて、「そいつは羨しいなあ」と幾度も繰り返しては言つてウィスキイを飲ませたりした。やがて帰らうとすると町角まで細君も一緒に送つて来て、「ではご機嫌よくね、ねえパパ、パパはどうせ写真部の人たちと船まで行くんでしよ？」と言つたりした。これでもう逢つておきたい人にも逢つた。明日の朝になつたらつゆ子がやつて来る。僕は安らかな気持でこの最後の夜を眠るつもりでゐたがやはりなかなか眠れなかつた。仕方なく起きて或る雑誌から頼んで来てゐた随筆の原稿を書き、またそのあとでこの間から書いてゐた手記のやうなものの続きを書いたりしてゐる中に窓が明るくなつた。この手記はあとで警察に没収されて了つたままどうなつたのか分らぬが、一体あのときはどんな気持だつたのだらうといまでも思ひ出すと、あれはどこかへ隠しておくのだつたな、などと思ふ。多分つゆ子の父親などの関係で、あんなものが明るみへ出されることは困るのだつたらう。僕は朝になつてから少し眠つた。

○

翌朝僕は渋谷までつゆ子を迎へに行つた。渋谷にはつゆ子の伯母にあたる未亡人が住んでゐて、つゆ子はその未亡人の家の養女にといふ話が前からあつたりしたくらゐで、よくその伯母のところへ泊りそこから茶の湯の稽古などに通つてゐたのである。伯母さんとこへ行くのは好いんだけど、でもやつぱり伯母さんのお気に入りの人と一緒にならなきやあならないんだからと、そんなことを話したりしてゐたことがある。曇つた朝で線路が鈍く光つてゐた。僕はずつと前に読んだことのあるアンナ・カレニナの最後の停車場の場面を思ひ出してゐた。しかしいまの僕にはアンナの中にある苦悶や懊悩はなかつた。不思議な気持であるが僕はただ機械的に自分の決めた計画を計画通りにやつて了ひたいと思ふだけであつた。待つ間もなくつゆ子はやつて来た。クリーム地に古風な御所模様のある縮緬の着物を着て、白い毛皮の襟巻をしてゐるつゆ子はあの去年の歌舞伎座で会つたときの彼女よりもきれいで眩しかつた。「きれいな着物だね」「さう？」つゆ子はあんまり口数を利かなかつた。一緒にそこから銀座へ出てエスキーモで軽い昼食をすませ、やがて大森の家へ着いてからも何と言つて話らしいものをすることはなかつた。今更何を言ふこともないのだし、言へば愚痴らしく思はれる。それを避けたいらしかつた。ピアノを弾いたりレコードをかけたりしてゐるつゆ子の様子はこの前ここへ遊びに来たときの彼女と少しの変りもなかつた。「つね、」僕は女中を呼んだ。「お前、ちよつとお使ひに行つて来てくれないか」僕はつねに五円札とそのほかに少しの小銭をやつて、上野へ奈良漬を買ひに行つて来いと命じた。いつか上野の山下の何とかいふ漬物屋で買はせたのがひどくうまかつたので、また同じものを買ひに行かせてもつねは何も怪しみはすまいと思つたからである。「それからね、」と僕は何気なく言つた。「帰りには、折角あそこまで行つた序でなんだから久し振りに浅草へでも行つておいで。うちの方は格別用もないから。おつとつねは何となく躊躇する風であつたが、浅草へ行つても好いと言はれたことはやはり嬉しいらしく支度をしてやがて出て行つた。

二人きりになると僕らは始めて今日のことについて話し合つた。「何か書置のやうなものを書いて来た？」「何にも、」「ママにもパパにも？」「だつて何にも書くことないんですもの、何か書くことがあるくらゐならあたし」とつゆ子はふいに涙声になつて、「あたし、こんなになりはしないわ。みんなパパたちのせゐなんですもの、何か書いたりしとくのはいや。——ああ、ばあやとみよ子とに書いとくわ。」つゆ子はペンをとつて何か二行ばかり書いた。「どこへおいとくの？」「こつちだ、」僕は始めてつゆ子を導いて寝室へ案内した。そこは、きのふのうちに何ひとつ残さぬまで丹念にとり片附け、ベッドの上には真白なシーツをかけておいたのである。つゆ子はだまつて遺書を枕許の小卓の上においた。僕は丁寧に窓のカーテンを締めた。まだ三時を過ぎたばかりであるのに部屋の中は日暮のやうに暗くなつた。「ここへ掛けない？」僕はベッドに腰を下してつゆ子を呼んだ。「後悔しないね？」「ええ、」つゆ子の細い咽喉が微かに動いた。僕は幾度もつゆ子の肩を抱いた。「ごめんなさい、湯浅さん、湯浅さん。」玄関のそとで誰かの呼んでゐる声が聴えた。玄関は締めて来た積りであつたが、ふと不安な気がしたので行つて見ると一人の背の高い青年が笑顔をして立つてゐた。「あの、ご稿料をお届けに参りましたのですが、」といふ。それは一二ケ月ほど前に或る出版社から頼まれて描いた何とかいふ児童読本の装幀の稿料なのであるが、何気なく応接間へ通して相手をしてゐると青年は三十分くらゐの間愉快げに談笑して、やがて一封の金包をおいて帰つて行つた。封の中には十円札が十枚あつた。僕はそれを持つてつゆ子のところへ戻つた。「金を持つて来てくれたんだよ、」「あとをよく締めておいて？」「しめたけど何か書いといてやらうか、」思ひついて僕は旅行中不在と書いた紙きれを玄関のそとに貼りつけにきのふ暇乞ひに行つて来た麹町のあの書肆の主人からの使出てゐると、また靴の音がして人が這入つて来た。それはひで、けふ外国へたつといふ僕のためにお餞別にと言つて金を三百円持つて来てくれたのであつた。

僕はしばらくの間その二つの金包を前においてだまつてゐた。自分の持つてゐる分も併せるともう少しで五百円く

らゐになる金だ。ほしいと思ふときにはまるで這入らず、もうほしいとは思はぬときにはこんなに集つて来る。妙なものだといふ気がした。「これだけあればどこかの温泉場へでも行つて五日くらゐは面白く暮せる。」自嘲するやうに呟くとつゆ子は眼をあげて、「同じことだわ。そんなとこへ行つてやつぱりそこで死ぬんですもの、あたしここで死にたい。」さうまで言ふつゆ子をそとへ誘ひ出す気はなかつた。そしてたぶんつゆ子の言ふことはほんたうである。僕は楠本と野崎とにあてて簡単な遺書を書いた。そして別に二人の宛名を書いた封筒の上に、「あとのことを頼む。」としてそこにある金を一つに集めてその中へ封じようとすると、つゆ子も起つて帯をとき、紙入れを出して持つてゐた三十幾円かの金を取り出していつしよに封の中へ入れた。「これで何にも忘れものはないね。」僕らはしばらくの間抱き合つたままだまつてゐた。するとそのとき隣室にかけてある鳩鳴き時計がぽつぽつと四つ鳴つた。こんな場合に聞く時計の音は何か追ひ立てられてゐるもののやうに聞える。何時死なねばならぬといふきまつた時間はないのであるが、何となく急き立てられるやうな気がするのだ。「ぢやあ好いね？」さういふ自分の声に僕は始めてぞつと背中に水を浴びたやうな気持になつた。つゆ子は眼でうなづいた。そして低声で、「何で死ぬの？」と訊くので僕はそばの小卓の上に用意しておいた銀盆の上のガーゼの覆ひをとつた。鈍いうす明りの中に二挺のメスと、傷口を押へるために一反の晒し木綿を二つに裂いたものとの置いてあるのが見えると、つゆ子は「あ！」とそれは殆んど悲鳴に近い短い叫び声をあげた。「恐いの？」僕はふいに哀れさがこみ上げて来て片手をつゆ子の胴に廻しながら訊いたが、つゆ子は微かに首を振つて眼をとぢた。蒼い頬に涙の流れるのが見えた。静かな短い一瞬であつた。僕はだまつて盆の上の二つのグラスに幾度も酒を注いだ。いつしよにそれをのんでゐるとき窓のそとから誰か女の声でしきりに、「湯浅さん、」と呼んでゐるやうであつたが、やがて聞えなくなつた。あとで分つたのであるが、渋谷のつゆ子の伯母の家でつゆ子の帰つて来ぬのを案じて、もしやと思ひ僕の家まで尋ねに来させたのださうであるが、旅行中不在としてあるのを見て強ひては疑はず、やがて帰つて了つたのだといふ。二人は足音の遠ざかるのを待つた。その女の声は二人を呼んだ最後のものであつたがこれも時計の音と同じ役目をしてくれたのである。

日が落ちてカーテンの隙間から這入つて来る微かな明るみではもう相手の顔もはつきりとは見えぬくらゐであつた。いつの間にかつゆ子はメスをとつてゐたものと見えて、「では、やるね？」と僕の言つた瞬間に、さつと熱い湯のやうなものが僕のうすいワイシャツを透してとびかかつた。つゆ子がさきに咽喉をついたのだ。「あゝ、」と僕は低い声で叫んだ。傷口から血の吹いてゐるのが見える。僕は狼狽してそのつゆ子のぐつたりとした体を抱いてベッドの上に横たへた。自分では落着いてゐる積りなのにまるで気持が顚倒してゐたものと見える。「こんなに汚れたワイシャツを着たままで死んではならぬ。」僕はむきになつてさう考へ、ベッドを下りて傍の洋服箪笥の抽出しから新らしいワイシャツを出してつゆ子の血しぶきを浴びたシャツを大急ぎで脱いだのであるが、どうせ自分がやればもつと血に染まるなどといふことも考へつかぬほど狼狽してゐたのだらう。丁寧にボタンをとめて急いでつゆ子の傍へ戻るともうキイの酔のために動悸が激しく打つて咽喉に手を触れると大きな血管がむき出しになつてどくどくと動いてゐるのが分る。僕は片手でそこを押へて手許の狂はぬやうにと激し一突き突いた。僕はメスのとほつたざくといふ不気味な音を聴いた。力があまつてメスは左手の甲にまで刺さつた。血がまるでホースのさきから噴出しでもするやうに流れ出る。そのしゆつといふ音だけが聴える。「あなたもやつたのね？」低い、しかしはつきりした声でつゆ子が言つた。僕は返事の替りにつゆ子の寝てゐる傍にそつと体を横たへその手をとつた。「抱いて、」とつゆ子がまた言つた。僕の顔のすぐ傍にぼんやりとつゆ子の顔が見える。僕はその唇を探してながい間自分の口をつけてゐた。何といふ寒さであらう。まるで氷の中に坐つてでもゐるやうな、骨の髄までしみるやうな寒さである。さつきまで燃やしてゐた瓦斯ストーヴを消して了つたのだから或ひはこんなに寒いのかも知れぬ。このがたがたする寒さの中で僕はつゆ子の手がだんだん冷えて行くやうなのを感じて幾度も掻きよせるやうにその細い肩を抱いた。絶えずしゆうつといふ音が聴える。僕はやつとそれが分つた。血がスプリングの工合の悪いベッドの上でちやうど二人の体の重さのかかるところへまるで低い泥溝へ集つて来るやうに流れて来るのであるが、つゆ子のよりも二倍も重い僕の体の下へ大きなくぼたまりになつて集つて来るので、その冷えた血の凍るやうな冷たさが僕の下半身を浸して了ふほどになつてゐるのであつた。僕の意識は非常に冴えてゐるやうな気もするが、またまるで夢を見てゐるやうにぼんやりして了つてゐるやうでもある。魂のないただの肉塊になつて了つたのか、或ひはただ魂だけ残つて肉体は消えて了つたのか、そのどつちかのやうなうつけた気持だつた。僕はつゆ子を抱いてゐながらもうつゆ子のことも考へてはゐなかつた。もつと何でもない気持である。僕の体は何かの植物でいまちやうど刈り倒されて了ふところでもあるやうな気持である。僕はうとうとしてゐた。するとつゆ子の低い声が聴えた。「ねえ、紫色の薔薇なんてあつたかしら？」「紫色の？　あゝ、そんなものはないさ、」僕はやつと答へた。「だつてこんなとこにうしてもあなたの顔が見えないの、」たぶんつゆ子はもうそれも見えなくなつてゐるのだらう。僕にはしかし隣りの家の中から洩れて来るうす明りがカーテンの隙間から見え、

その仄かな明るみの中につゆ子の蒼ざめた顔がまるで夕顔の花のやうにぼうつと白く浮いて見える。ひよつとしたら僕ひとりが死ねないで取残されてしまふのではあるまいか。さう思ふと僕はふいにぞつとするやうな恐怖を感じた。さうだ、瓦斯の栓を抜いてやらう。僕はつゆ子の肩に廻してゐた手をそつと抜いてベッドを降りようとしたが、もう起つことも出来なかつた。僕はしばらくの間床の上に倒れたまま呼吸をしてゐた。瓦斯の栓のところまでもう少しで手が届くのだと思ふのに、なかなかそこまで体を運んで行くことが出来なかつた。そしてながい間かかつて這ひずり廻り乍らやつと栓を抜いて了ふと、そのままぐつたりと床の上へ突伏して了つた。「いやあ、行つて了つちやあ、つゆ子をおいてきぼりにしちやいやあ、」そのつゆ子の細い声がまるで遠い遠いところから聴えて来るやうな気がして、もう僕はその声のするところまでとても戻つて行く力がないやうに思はれ、「行くよ、いま行くよ。」とさう言ひ乍ら渾身の力をこめてベッドまで這ひ上つたのであるが、あとはもうまるで覚えがなかつた。

どのくらゐ時間が経つたか分らない。ふいに廊下の方でばたばたと人の足音がしたやうであつたが、きやあ！　と魂消るやうな叫び声がすぐ扉のそとで聞えてまた一散に走り去つて行つたのを覚えてゐる。あとで考へるとちやうど女中のつねが帰つて来た時分で、つねは一旦は浅草へ廻つてもよいとまで言はれた嬉しまぎれに、使ひの帰りに活動を見てゐたのであつたさうだが、どう考へてもこの三四日の僕の様子が可笑しかつたやうな気がして、自分のかうしてゐる間に何事か起つてゐるのではあるまいかと思ひ出すと、もう一時もじつとしてはをられない気持になつて、急いで家へ引返して見ると勝手口をあけたとたんに烈しい瓦斯の臭気がむうつと鼻をついて来た。どつちかといふときちやうめんな性質のつねはその臭気にはつとして、さてはどこかの栓をひねり忘れてゐたのではなかつたらうかと荷物をそこへ放り出して狼狽てて台所風呂場応接間とスキッチのあるところを片つ端から調べて歩き、最後に寝室の前まで来て見ると確かに部屋の中からしゆうつといふ瓦斯の洩れる音が聴えて来る。驚いて扉に手をかけると中から錠が下りてゐてあかない。つねは不安な胸騒ぎを感じて僕を呼びながらふとその扉の板目のすいてゐるところから覗くと、隣家の窓から洩れて来るうす明りの中に、ちやうど僕らの横たはつてゐるベッドの端が見え、血に染まつてだらりと床に垂れてゐる僕の片手が眼に這入つたのださうな。咄嗟の間につねは、自分の留守をしてゐる間に強盗が押入り僕を殺して念入りに瓦斯まで放つて逃げたのだと思ひ込み、そのまま腰を抜かして了ひながら大声に家主の家の人たちを呼んだのであるといふ。家主の家の人たちに続いて警察から人が来る。扉はこはされて僕らの有様が発見される。大騒ぎになつて、やがて洗足の家からとも子の父親がやつて来たのださうであるがもうそのときはつゆ子は別室へ連れ去られて了つたあとなので事情を知らぬ父親は単純に、僕がとも子の出奔に絶望して自殺したものとばかり思ひ込んで了つたのであらう、僕の枕頭に突つ伏して、「許してくれ、儂が悪かつた。」と繰り返して言ひながら男泣きに泣いてゐたといふ。僕は知らなかつたが家の近所に東京朝日の社会部の記者が住んでゐたとかで、その中にその記者が騒ぎを聴き込んで本社へ電話をする、一時に七台の自動車が家の前へ着いたのださうな。ちやうどその記者たちが応接間で記事をつくつてゐる最中に、知らせによつてつゆ子の家からつゆ子の母親が始めて僕の家へ姿を見せたのであつたが、着くといきなりわが子の安否はどうかと気遣つてその病室を訪ねるといふよりも並ゐる記者たちの間を説き歩き、どうかこの事を記事にしてくれるな、新聞に出たりしてはわが家の名誉も良人の地位も台なしになつて了ふ。もし幾らかの金によつてこれを出すことを止めにして貰へるものならば金は何千円かかつても構はぬ。皆さんに私からさし上げるから何とかおとりなしを頼むと、まるで土下座せんばかりの有様で却つて記者たちの嘲笑を買つたくらゐであつたといふ。遺書を書くといふ間際にもつゆ子はその父母に一行でも書残すことを拒んだが、その父母もまた、子供の生死にもましてわが家の名誉の傷けられるのを惧れたのだ。

僕はやがて担架で近くの病院へ運ばれる途中で朧ろ気に意識の醒めたやうなのを覚えてゐる。しんしんしんしん雪が降つてゐるやうなのだ。雪が降つてゐるな、と僕はさう思つた。三月の半ばなのだから雪の降ることもなくはないが、しかしその夜はからつ風の寒い星の多い明るい空だつた。醒めたと思ひ乍らやはり眠つてゐた。郊外の小さな病院のことで担架も一つしかなかつたのかも知れぬ、まづつゆ子が運ばれ、しばらくして僕が運ばれたのであるが、誰の眼にも僕の方が重態でつゆ子は助かつても僕は絶望だらうと思はれたといふのに、二人とも助かつた。手術室に運ばれてから眠つたまま傷口の手当をうけてゐる中に、僕はまたふつと意識が戻つて、次のやうに話し合つてゐる医者たちの言葉を実にはつきりと聴いた。「どうだ、これは、傷口から動脈が見えてゐるのにここでとまつてゐるんだからね、全く奇蹟だよ。」メスで決行するときめてから僕は結果の万全を期するために通俗医学の本など買ひ込んだりして実に正確に動脈のありかを確めておいたつもりでゐたのであるが、わざわざウィスキイをのんだりして血行のさかんになつたのを頼りにメスを刺したと思つてゐたのに、あのどくどくと動いてゐる露出した血管はほんたうの頸動脈ではなく、ほんものはそこから一寸くらゐ奥にあるのだといふことをあとで聴いて僕は唖然とした。お蔭で僕もつゆ子も一命をとりとめたのであるが——

○

あのことがあつてからもう六年になる。死によつて片附

けるつもりでゐたことが、ながい歳月の間に自然にいつとなく片附いてゐたかたちである。或日のこと僕はぶらりとした散歩の帰りに、夕食のおかずになる何かうまいものはないかといふやうな気持で渋谷の或る食料品市場の前に立つて、ガラスの中でいけすの小魚の泳いでゐるのなどを見てゐると、誰か背後からそつと肩を叩くものがある。見るとそれは絶えて逢ふこともなかつたとも子の母親で、黒いコートに包んだ小肥りの体を寄せるやうにして、「やつぱり湯浅さんね。まあおたつしやで、」とさも懐しげに言ふのである。僕の胸に浮んで来たのはあの洗足の家の温和な雰囲気とよく燃えてゐるストーヴのあかりだけであつた。それに母親の様子はまるで何事もなかつたあとのやうな和やかさだつたので僕も躊躇なく、「やあ、」と笑つて、ここで立話もへんだからちよつとお茶でもといふ母親の言葉によつて階上の喫茶店へ案内した。「どうもごぶさたをして了つて。みなさんお変りも、」と言ふと母親はすぐ眉をひそめて、「それがねえ湯浅さん、あたしがあんなに言つたのにきかないで馬鹿な真似をして、あたしほんたうにいやになつて了ふのよ。とも子があなた。エンド人と一緒になつたんですものね、」と気の好い母親は半ばは僕に対する心遣ひからさもいやさうな口調になつて娘のことをこぼすのであつた。エンド人といふのは東北訛のぬけない彼女の言葉で印度人といふことなのだ。あの騒ぎがあつてからとも子は病気が悪くなつて、ながい間築地の聖ルカ病院に入院してゐたがその間にそこの医者である印度系の米人と恋におちて、一緒になつたのだといふ。僕は何だかほつと軽い呼吸をした。正月の休みがすんで間もない頃で、まだ華やかな春着のまま帰つて来るどこかの女事務員たちがつづいて駅のブリッヂを渡つて来るのが見える。さう言へばすぐそこの窓から白いプラットフォームで僕は幾度もつゆ子を待つたものである。いつの間にかみな、まるで心に浮んで来ぬ平静な風景になつて了つたが。「どやあまたね、あなたもどうぞまたお遊びにいらしてね、」とも子の母親は明るい声でさう言つて人混みの中へまぎれ込んで行つて了つた。

（昭和九年二月―十年三月）

おはん

一

『よう訊いてくださりました。私はもと、河原町の加納屋と申す紺屋の悴でございます。生れた家はとうの昔に逼迫してしまひ、いまではこのやうな人の家の軒さき借りて小商ひの古手屋、もう何の屈托もない身の上でございますのに、何を好んでいらぬ苦労するかとおもひますと、わが身の阿呆がをかしうてなりませぬ。

へい、あの女は、実は私の女房ではございませぬ。いまから七年ほど前に、生れてはじめて馴染みました町の芸者でございます。私より一つ齢上の卅三、名前はおかよと申します。あなたさまもご存じの、半月庵の抱へであつたの家持つて、ほんの一人か二人の女衆をおいたりして、芸者屋をいたしてをります。私はその女の家に寝とまりして、ここへは昼食の弁当もつて通うてゐるのでございます。

古手屋とは名ばかり、お客さま相手に茶をたてたり、すきな花を生けたりしてますのでございますが、収入というたら、わが身ひとりの小遣銭にも事かかんならんやうな、まァ言うたら女に食はしてもろうてる、しがない男でございます。

あれは去年の夏、盆も間近かの或る晩のことでございました。

町の寄合ひのくづれで、よそのお人と二三人あの臥龍橋の橋の上でええ心持になつて風にふかれてゐてたのでござぐ傍をすりよつて通るのでございます。この広い橋の上をあなに近うに人の傍を通らいでもと、さう思うて顔みますうになりながら、お人の手前もございますけに、わざとに間おいて急いで警察の横手までいきますと、あとから私の来るのが分つたのでございませう、くらい板塀のところで待つてをりました。「おはんか。かはりないか。久しいかつたなァ」と私は申しました。

あのあたりはちやうど藪堤の蔭になつてをりますので、昼でも淋しいやうなところでございます。川風が絶え間なしにさあァと藪の上をふきぬけてきましてなァ、そのたんびに川向うの糸くり工場から女衆のうたうてる唄が手にとるやうに聞えてくるのでございます。

おはんは白い浴衣きて、見覚えのある手織縞の帯をしめてをりました。どこというて男の心ひくやうな女ではございませねど、いつでも髪の毛のねつとりと汗かいてゐます

いふものにはかうした気持ちは附きものだが、この東海道ほどその感を深くさせる道筋はない。」道中は緊張していて嬉しいが、大津へ着くと力が抜ける。そこでまた汽車で品川へ戻り、そこから道中双六のように一歩一歩、上りにや建具左官の仕事を生業として、街道を上り下りして過して来たのである。作者は、これが純粋な東海道人種の姿であり、宿命なのだという。

美を生活のモラルとする新詩社の使徒として出発したかの子は、生活の上に美的世界の実現を企図した。そのような希求は、無目的であり、無償であればあるほど美しい。他人には理解されることのない憑かれた人種なのである。彼女の作品には、無償の憧憬を一つずつ胸に抱いた憑かれた男女が、しばしば登場する。作楽井さんが東海道の上りに恋々とするのに、頽廃の影があり、そこに見られる滅びの寸前の一条の光を、作者はこの上なくいとおしんでいるかのようである。蝕まれた旧家の血に対する愛着である。『雛妓』という短篇の中に、彼女は多摩川在の自分の生家の古い家霊との断ち切りがたい因縁を、縷々として述べている。それは宿命と言ってもよいが、かの子はそれを好んでいいのちと言っている。蝕まれた美しい影を踏まえて、死灰の世界から甦るものである。彼女自身は東海道人種でもなければ、江戸趣味者でもない。彼等の憧憬の心像をすべて可能的には抱括しながら、自分は別の位置に立つ。

彼女はそれを『巴里祭』のなかで、次のように言う。「いままでのあなたの経験しなさったのはやっぱり追放者の巴里ね。誰でも少し永く居る外国人が、感化される巴里よ。でも本当の巴里はその先にあるのよ。噛んでも噛み切れないといふ根強い巴里よ。あなたはそれを噛み当て初めたのね。死んだフェルナンは其の事を巴里の山河性と言つてましたよ。」

巴里の魅力に憑かれながら、何年も巴里に滞在し、故国へ還ることを忘れた外国人の群を、追放者と言う。この小説の主人公淀島新吉は、そのような追放者の一人である。家を忘れ、妻子を忘れて、東海道を上り下りする作楽井さんも、同じ意味で追放者と呼んでよい。だが作者は、追放者には決して開かれることのない巴里の真髄があるという。淀島は十何年も忘れていた日本の妻を、巴里へ呼び寄せようと気づいたとき、外国人がだれでもたやすく感化される巴里の住人から、噛んでも噛みきれない根強い巴里の住人になった。根こぎにされた人間から、根のある人間に生れ変った。巴里が、ニヒリストの眼に映る美しい世界であるあいだは、まだ根づかない土地に過ぎない。そこで人生の本当の味を、落ち着いて味わって行ける徹底した現実世界となったとき、その人は初めて、巴里に生きていると言えるだろう。

これは岡本かの子の生命哲学なのである。この作品で、巴里という限定のうちに言っていることを、彼女は人生の全体について思いめぐらしたのである。巴里の山河性とは、そのような響きをこめて発声されている。『河明り』で、東京を流れる無数の川について思いめぐらした彼女は、ここでは東京の山河性というイメージに憑かれていたとも言えよう。山河性を彼女が一身に具現したとき、それは『生生流転』で吐露されている「根の母」（ウール・ムッター）の思想となる。彼女の本来のナルシスムは、自己の可能性をいっぱいにひろげて、「根の母」となるのである。『生々流転』のヒロイン蝶子に、父が死ぬ前に遺した言葉は、「人間は四十を過ぎたらまた元の根に帰るものだ」というのであった。彼女は原始のいのちの根に帰ろうとして、母の死後家を出て、孤の上の生活にみずから落ち、山へ川へ海へと漂泊の心を誘われて行く。本然的な無償の憧憬を胸に抱きながら、ここでは東海道人種や巴里の追放者たちのように、憧憬を狭く限ろうとしない。それは単に「あわれにかそけきもの」ではなく、「確乎とした質量があるもの」である。つまり、人生に外ならないものである。

それをかの子は、川として思い描くのが常であったのだ。無限に包容する大海がある。この首尾を持ちつゝ、その中間に於ての河なのである。そこには無限性を蔵さなくてはならない筈である。」（河明り）

その思想を、かの子は遺稿となった『生々流転』のなかで、もっとも円満に表現しえたのであってみれば、彼女のそれまでの数々の短篇は、その到達した地点から逆に照明を当てることによって、いっそうよく理解することができるだろう。

林芙美子

一

「林芙美子の告別式の帰途広津和郎が、宮本百合子、林芙美子、平林たい子とこの三人の女流作家が並び立ったときの姿は、まことに文壇空前の壮観で、今後再び見ることは同感を禁じ得なかった。宮本百合子、林芙美子は作品をできないであろうと繰返し語っていた。わたしはそれに通してしかわたしは知らなかったが、三人の女流作家がそれぞれ個性の翼を一杯にひろげてならび立った図は、壮観というほかはなかった。宮本百合子は知性的、林芙美子は情熱的、平林たい子は意力的という風に、女流作家の三つのタイプを代表し、わたしには三者相寄り相助けて女流文学の世界を盛り上げ、全文壇に気を吐いていくように思われた。明治以来、知性的な女流作家がなかったわけではないが、宮本百合子ほど知性的で、自己の論理をもった作家はなかった。明治以来女流作家は、樋口一葉この方、情感的であるのが常で、林芙美子はその情感世界を継承したものといえるが、彼女の庶民的、放

浪的情感のなかに息づく人間性の息吹きは、また格別のものであった。ひとり平林たい子の意力性にいたっては、曾つてその例をみなかったと言えるであろう。」

これは青野季吉が、その『平林たい子論』のなかに書いている一節である。

昭和の女流文学を、以上の三人で代表させることは、その外にも宇野千代、岡本かの子、佐多稲子、壺井栄、円地文子などが数えられるのだから、異論のある人もあるだろう。だかこの三人が、女流作家の三つの傾向を代表する作家であることは、はっきり言えることである。そして、中流知識階級に生れた宮本は別として、平林も林も、作家になるまでのあいだに、生活的な苦労のかぎりを尽している。

平林氏が諏訪高女を卒業して上京したのと、林芙美子が尾道高女を卒業して上京したのとは、ともに大正十一年であった。女学生時代にすでに社会主義思想を抱いていた平林氏は、真直に社会主義者の群にはいって行ったが、林は当時まだ明治大学生であった愛人の岡野某と同棲生活を営むためであった。翌年岡野が卒業して、彼女との結婚の約を破り、故郷へ帰ってしまうと、それから林の東京での放浪生活が始まる。もっとも行商人の子として生れた彼女の放浪生活は、生れながらであった。銭湯の下足番、露店商人、派出婦、女中、カフェーの女給、売子、女工その他、あらゆる仕事を転々としているが、放浪時代に彼女は詩と童話とをぽつぽつ書いていて、大正十三年にはアナーキストの詩人の仲間にはいっていた。この仲間は、よく本郷肴町の南天堂書店階上のレストランに集って気焔をあげたが、彼女はここで詩人の友谷静栄を知り、二人だけの詩の雑誌「二人」を出し、また平林たい子とも知り合った。

林は大正十五年に画家手塚緑敏と結婚する前に、新劇俳優兼詩人の田辺若男、ダダイズム詩人の野村吉哉と、二度短期の結婚の経験を持っている。平林氏も、コミュニストの小堀甚二と結婚する前に、二人のアナーキストと結婚している。大正十四年に壺井栄氏が上京して、これもアナーキスト詩人の壺井繁治氏と結婚し、三夫婦が世田谷三宿に隣り合って居を構えたことは、『放浪記』にも見えるし、後に壺井、平林氏等の回想記に出てくる。彼女たちはすべて働きのないアナーキスト、あるいはダダイストを良人に持って、苦労した。壺井氏は平林や林の良人たちが、どうして妻たちを落着かせないのかに疑問を抱いた。虐げられた人たちを解放することを目標にしているはずの彼等が、その妻たちに対してひどく暴君であり、彼女たちが女であるために受けている不当な侮辱は、これらニヒリストの世界ではことに激しかった。男たちは働いて妻たちに平和な生活を与えることを、ブルジョア道徳として軽蔑し、彼等の主義に反するとさえ思っていた。

アナーキズムは大正時代には、もっとも尖鋭な反抗者の反社会的思想であった。だがその気分的な地下水は、封建的な無法者たちから流れて来ているとも見ることができる。

その気分が、バクーニンやクロポトキン等のニヒリスティックな革命思想を受容れる容器ともなった。それは自分みずからを社会外に追放し、法と秩序との外に生きることによって、自己の反俗精神の純潔さを証明しようとしたロマンチシズムだと言ってもよい。大正末期には、アナーキストとダダイストは、同じく一切の権威を否定する破壊運動だった点で、少くとも文学青年のあいだでは、混棲状態が見られた。大正十三年に出た「ダムダム」というダダイスト詩人たちの雑誌には、壺井繁治も、平林の良人であった飯田徳太郎も、林の良人であった野村吉哉も、同人として加わっていた。

平林はともかく、林が思想的にアナーキストであったとも、ダダイストであったとも言えないが、彼女がアナーキストたちの詩を愛し、アナーキズムの気分的影響を受けていたことは、顕著である。彼女は生来の放浪性に持ってきて、アナーキストの仲間らしく、行動が自由であり、放恣であった。大震災のとき虐殺された大杉栄の自由恋愛、自由結婚の思想は、アナーキズム青年たちには一般的に実行に移されていた。

二

『放浪記』は小説ではない。日記である。彼女が一人前の作家になる前の、食うや食わずの生活をしていたころの、日々の心の記録である。

「長い間理もれてゐたが、やつと世に出たときは、私はもう飢ゑる一歩手前であつた」と、彼女は言っている。「人間をそのままぶちまけた若き日の私のささやかな苦業の記録」とも言う。もちろん、ここに書いてあることが、彼女の心の全貌だったと思う必要はない。「この放浪記は、私の表皮にすぎない。私の日記の中には、目をおほいたい苦しみがかぎりなく書きつけてある」と書いている。大正十二年ごろからつけ出して、放浪の生活中に持ち歩いた日記帳のなかから、いくらか構成のことも気にしながら、抜き出して発表したものが『放浪記』だった。それがたいへん好評だったので、ひきつづき『続放浪記』を刊行したが、戦後の言論自由の時代になって、さらに第三部を発表した。この部分には、飢えのどん底の生活にあって発した「不敬」にわたるような叫びや、あるいはまた、両親や二度目の良人野村吉哉についての、かなり突っこんだ記述を含んでいる。第一部が、もっとも抒情的な部分が多いのに対して、第三部はもっとも現実的な描写に富んでいる。

『放浪記』が初めて発表されたのは、昭和二年に発行された「女人芸術」の第二号である。主幹は長谷川時雨で、当時のほとんどすべての女流作家の大同団結の機関誌というべきだった。この雑誌は、必ずしも最初から階級文芸を標榜したものでなかったが、発刊の時期がちょうどプロレタリア文学運動の盛期にあたり、いちじるしく編集方針が左翼化した。だが、時雨をして「一将功成って万骨枯る」と

歎かせたほど華々しくデビュウした林だけは、この雑誌の左翼的傾向にひとり背いて行った。

『放浪記』が発表されたとき、華々しい左翼の人達からはルンペンとして一笑された、と林は後に書いている。連載は五、六回で中止されたらしい。中止の事情はくわしくは知らぬが、林に対する「女人芸術」の内部からの批判があり、林とのあいだに感情的疎隔を来した結果らしい。だが、そのあいだに、当時一流の綜合雑誌であった「改造」から、原稿注文が来ることになる。「改造」の記者鈴木一意が、彼女の西武線中井の住居を訪れたとき、彼女は着る物を全部入質してしまって、海水着一つで応待した、というのは、有名な逸話である。五年六月には、改造社の「新鋭文学叢書」の一冊として、『放浪記』が刊行され、たちまちベストセラーになった。それから彼女の流行作家としての生活が始まるのである。

「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」と、彼女は『放浪記以前』に書いている。左翼陣営からルンペン性と見られたものは、彼女にとっては生得のものであった。

彼女は小説を書く前に、詩と童話とを書き、また歌うように、日々の心の記録を書きつけて行った。『放浪記』を読むと、これは告白の衝動からではなく、小説のように、歌いたいために歌っているような彼女の姿がある。それは生活の苦労に追われ、飢えに責められながら、止めどもなく湧いてくる想念を、なぐり書きに書きつけて行ったような、不思議な流露感がある。



『放浪記』時代の林芙美子

「『やあ……』私は子供のやうに天真に哄笑して、切ない眼を、始終机の足の方に向けてゐた。あれから今日へ掛けての私は、もう無茶苦茶な世界へのかけ足だ。『十五銭で接吻しておくれよ！』と、酒場で駄々をこねたのも胸に残つてゐる。

男といふ男はみんなくだらないぢやあないの！　蹴散らして、踏みたくつてやりたい怒りに燃えて、ウヰスキーも日本酒もちやんぽんに呑み散らした私の情けない姿が、かうしていまは静かに雨の音を聞きながら床の中にぢつとしてゐる。今頃は、風でいつぱいふくらんだ蚊帳の中で、あのひとは女優の首を抱へてゐることだらう…そんな事を思ふと、私は飛行船にでも乗つて、バクレツダンでも投げてやりたい気持ちなのです。

×

詩人は共喰ひの共産党だ。持つてるものは平等につかふ。借金もそれ相当なもの。手近な目的はただ食べる事に追はれるばつかり。人命終熄の一歩手前でうろうろしているばかり。天才は一人もゐない。自分だけが天才と思つてゐるからよ。それ故、私たちはダダイスト。只何となく感じやすく、激しやすく、信念を口にしやすい。何もないくせに、まずこゝんところから出発してゆくより仕方がない。

風が吹くので、いろいろな男のことを考へる。誰のところに逃げこんで行つたらいゝのかと考へる。だけど考へる事は何もならない。勇気だけだ。何しろ、相手を驚かせる戦術なのだからはづかしい。またマンドリンがきこえて来る。籠の鳥の方がよつぽど羨ましい。あゝ狂人になりさうだ。」

（放浪記）

こういう取り止めもない感想が全篇を覆い、その中に必ずしも、アナーキズムとかダダイズムとかいった一貫した思想が、あるわけではない。だが、この取り止めなさの中から、絶えずきこえてくる作者の真実の声があり、胸の底から突きあげてくる訴えないではいられない叫びがある。こういう日記を書くに到った動機は、彼女がクヌート・ハムズンの『飢え』という小説を読んだことだと、彼女は言っている。どん底の生活の中から、ちょっとした暇を見つけては、何処ででも書いた。彼女は生涯のうちに、おそらく書くことがこれほど純粋な喜びでありえた時期を、外に持たなかっただろう。

「作家になるなどとは思ひもよらない事だつたが、とりとめもない心の独白を書いてゐるうちに、私は次々と書きたい思ひにかられ、書いてゐる時が、私の賑やかな時間であつた。男に捨てられた事も忘れたし、金のない事も飢ゑてゐた事も忘れた。」と彼女は言う。なるほどここに書かれているのは、どん底の放浪生活の記録であるが、作者の心は、彼女の生活ほど貧しくはない。なにか屈託のない、明るい「賑やかさ」が響いてくる。

これほど繰り返し人びとに読まれた女流作家の作品はない。外の作家の作品にないばかりではなく、彼女のその後の作品にもない。これは必ずしも、彼女の最傑作とは言えないけれども、少くともこの作品ほど、彼女の心の燈があかあかと灯っている作品は、外にないのだ。飢えと絶望との底にあって、彼女の生を「賑やかな時間」に転化することができた、生活の知恵にかがやいている、と言ってもいいだろう。

一人の女の、起き上ろうとする必死の願いが籠った、赤い血の通った文章が、ここにある。だがそれは、少しもあがき、もがきとは見えず、どんな捨鉢なことをわめき散らしているときでも、人びとはそこに惨めさを見ず、野放図

な明るさやユーモアを見るのである。そして、支離滅裂な論理のあいだから、案外しっかりと、ルンペン的、無頼派的な革命気取りの詩人たちの言動の無意味さを、正しく批判していることに気づくだろう。

三

言ってみれば日記に過ぎない『放浪記』の成功は、彼女を一躍小説家にした。その前にも、後に彼女の代表作の一つとなった『清貧の書』の草稿を書いたり、売るあてもない作品を濫作したりしていたが、ありていに言えば、彼女は『放浪記』を出した翌昭和六年、東京朝日新聞に『浅春譜』を連載したり、「改造」に『風琴と魚の町』を書いたりしながら、小説を書くことを習得して行ったと言ってもよい。これらはおおかた、自分の経験や身辺に題材を取ったもので、『風琴と魚の町』は放浪生活の少女時代の回想であり、『清貧の書』は、自分の結婚生活を描いたものである。また、昭和六年には飄然と、「三等旅行者」として、シベリヤ経由でパリへ出掛けたりしている。この時代の彼女の作品では、女性的な情感にあふれた抒情的散文を、自分の詩心の表現の場としている。十年に書いた『牡蠣』あたりから、本当に散文家としての彼女の姿が現われてくる。彼女が私淑した徳田秋声の影響が顕著である。

彼女の厖大な作品群をわずかに『浮雲』の一篇で代表させることはできない。だが、この詩心豊かな女流作家も、流行の座にのし上ると、数々の通俗小説を書きまくったことも事実であって、二十六年に彼女が急死したとき、彼女は『めし』『漣波』『女家族』『真珠母』その他の新聞雑誌の連載小説を執筆中で、これらがすべて中絶の憂目を見たのである。ジャーナリズムの酷使に甘んじたことが、彼女の死を早めたのではないかとも思われる。二十三巻の全集は出されているが、それは彼女の生涯の作品を網羅したものではない。

彼女の晩年の傑作を挙げるとすれば、短篇では『晩菊』、長篇では『浮雲』を挙げるのが、ほぼ衆目の一致するところである。これらの作品は、かつて歌うような詩的散文の作者であった彼女が、最後に到達した、人生の冷酷な現実の散文記録である。

『晩菊』では、五十六歳の娼婦あがりの女の、物色両面の欲情を、迫真的にえぐり出していて、彼女の短篇技術の頂点を示している。これと『浮雲』とにおいて、彼女は晩年に身につけたもっともよいものをさらけ出した観がある。こういう作品に較べれば、高名の『うづ潮』も、『茶色の眼』も、『めし』も、要するにエンターテインメンツに過ぎない。

『浮雲』は、日本の近代文学史の冒頭をかざる二葉亭の小説の名前でもあった。それをあえて自作の題として選んだについては、彼女にどうしても「浮雲」でなければならないという気持の動きがあったからである。

「人間と云ふものの哀しさが、浮雲のやうにたよりなく感じられた。まるきり生きてゆく自信がなかつたのだ。二人は、何処へ行く当てもなく、市電の停留所までぶらぶら歩いた。」

「富岡は、まるで、浮雲のやうな、己れの姿を考えてゐた。それは、何時、何処かで、消えるともなく消えてゆく、浮雲である。」

前の方は、富岡が空虚なやぶれかぶれの気持から、ゆき子と二人きりで死んでしまいたいと思いつめたくだりである。後の方は、屋久島でゆき子を死なせて後、彼女を土葬にした亡骸を島へたった一人おいて去るにも忍びず、また今さら東京へ戻ったとて何があろうかと思い、鹿児島へ出て酒と女に酔えないままに、身の処置を考えあぐねているところである。

女主人公のゆき子、主人公の富岡を描くに当って、彼女は「浮雲」という言葉で、彼等の人生行路を思ったのである。そこには彼女が、放浪生活をつづけて来た幼少年時代だけでなく、作家として自立し、安定した生活を持ちうるようになった時代の生活も、浮雲のごときものとして想い描かれているのであって、結局それは「人間というものの哀しさ」一般なのだという感慨に裏打ちされているのである。

「この作品は、或る時代の私の現象でもあるのだ。……誰の眼にも見逃されてゐる、空間を流れてゐる、人間の運命を書きたかつたのだ。筋のない世界、説明の出来ない、小説の外側の小説、誰の影響も受けてゐない、私の考へた一つのモラル、さうしたものを意図してゐた。」と作者は言っている。「浮雲」とは、人間の運命の象徴でもあった。

この作品は、農林省から派遣されたタイピストとして、仏印の山地のダラットにある農事試験所で敗戦を迎えた幸田ゆき子と、当時やはりダラットにあった農林省の技官富岡兼吾と、二人を軸にして進行する。二人は現地で結ばれ、ゆき子に魅せられていた加野の刃傷さわぎまで起したが、富岡には郷里に妻があり、帰国した二人がそのまま結ばれるわけには行かない。二人は昔の情熱を、もう一度呼び水するようにして、結ばれるが、それも「こおろぎの交尾のやうな、はかない習慣」に過ぎないことを、思い知らされるばかりである。

女は戦後の無秩序のなか



『浮雲』執筆のころ（昭和24年）

を、あたかも戦争の苦しみの痕跡を少しも止めていないかのように、たくましく生きて行こうとするが、この男の体臭から今は離れられなくなっている。男の方は、もはや女には愛情の一かけらも残っていないが、なり行きまかせの気持から、ずるずるに女との関係をつづける。そして妻の邦子も、肉体の魅力に惹かれて関係したおせいも、仏印での恋敵であった加野も、死んでしまったあとに、ただこのゆき子だけが逞ましいファイトを持って生きつづけ、彼の任地屋久島まで、瀕死の病軀を押して従ってきたのを見出だす。

二人の恋の想い出には、熱帯の密林の豪華な背景があった。その前で演じられた二人の恋のトラブルを、ゆき子は「しびれるやうな思ひ」で夢見ている。焦土となった東京での戦後の生活は、それに対して、あまりにも貧寒として、侘しいものである。だが、その息苦しさの中から、もう二度とやって来ない素晴らしいダラットの生活を思うにつけ、ゆき子は富岡の膚の感触がたまらなく恋しくなる。

富岡にも、仏印の大森林の印象は、あたかも自分の魂の故郷であるかのように、焼きついている。それは野性の呼び声でもあるかのように、彼の胸に呼びかける。だがそこには夥しい二人だけの思い出がありながら、彼の彼女への恋情をまた掻き立てることはない。あの南の国の美しい森林を、いくら思い出したところで、彼女とそれは関係ない。ゆき子はその土地の香気には、結局何のかかわりもない女に過ぎない。むしろ、安南人の女中や子供の記憶が、なつかしく心に浮んでくる。

この小説では、仏印の思い出をところどころに挿みながら、侘しい戦後の日本での、焼けぼっくいがくすぶるような男女の物語が進行する。そして仏印の印象が、男と女とで、まるで違った風に、現在の心の動きに投影しているさまが、見事に書き分けられている。

「私の考えた一つのモラル」という言葉で、彼女は何を言おうとしたのか。この場合、モラルという言葉を字義通り厳密に考える必要はなさそうだ。彼女が人生行路にみずから体得した、一つの思想を意味したのだろう。「浮雲」という言葉に執着したのも、この一つの思想に忠実であろうとしたまでであろう。男に苦労をしつくした女を書くだけなら、作者は自分の経験からいくらでも書けたろうが、それだけでは満足できない気持が彼女にはあった。作者はこの作品では、自分の経験をもっと普遍的な一つの人生感情で包もうとした。どうもがこうと、人生はままにならぬ運命に導かれているということの一つの体感であり、その体感が彼女に「神は近くにありながら、その神は手さぐりでゐる、私自身の生きのもどかしさ」などという言葉を字義通りかしめるのである。自分の小さいエゴなど、いくらあがいてもどうにもならぬことの認識であり、それを彼女は敗戦の経験を経て、痛感せしめられたのである。『浮雲』の一篇は、そのような意味で、間違いなく彼女の到り着いた思想の所産であったと言うことができるのである。

ここに至って彼女は師匠の秋声から、小説の技法だけでなく、作品の底にただよう東洋的な一種のニヒリズムまで、受けついでいるのだ。この作品の女主人公ゆき子は、ある意味では『あらくれ』や『縮図』の女主人公の精神的系譜に属すると言えるのである。

『浮雲』は二十四年秋ごろから二十六年四月に到って完成した。彼女が死んだのは、それから二カ月あまり経って、六月二十八日のことであった。

宇野千代

一

宇野千代氏が処女作『脂粉の顔』を発表したのは、大正十年である。ずいぶん早いデビュウであるが、以後今日まで四十数年のあいだに発表した作品は、量的には多くはない。長篇というより、中篇小説として『色ざんげ』『おはん』などがある外は、短篇小説ばかりである。

だが一方、氏は作家であるとともに、出版社スタイル社やスタイルの店などを経営したこともあり、着物のデザインにも進出し、社会的には活動の幅の広い女性である。そのことが、寡作家であるにもかかわらず、婦人作家のなかでの大御所的な存在に、氏を押し上げていた。寡作と言っても、たとえば網野菊氏の寡作とは、まったく違っている。文学上の理想を純一に保っていることが、彼女を通俗小説や中間小説に向わせない。

彼女は他の多くの女流と違って、自己を語ることを好まない。これまでの文学全集の類には、自筆の年譜がかかげられているが、他の作家の年譜に較べて、著しく具体性を欠いているし、仕方なしに書いたという投げやりな態度が見えるのである。自分の履歴などに頓着しない氏の態度は立派だし、作家はすべからくそうありたいと思う。作家が読者に提出すべきものは、作品だけであり、作品がすべてなのだから——。

宇野氏ほどの高名の婦人になると、そのおぼろげな履歴を、読者は何となく知っている。だが、自分の履歴を洗いざらいその私小説のなかにぶちまけてしまう多くの女流作家たち（宮本百合子、平林たい子、林芙美子、佐多稲子、網野菊氏等のごとき）と違って、宇野氏の履歴には秘密に属する部分がきわめて多い。たとえば、大正三年に郷里の岩国高等女学校を卒業して、すぐ小学校に奉職したが、翌年秋退職後、朝鮮に渡って「若き日の放浪始まる」と年譜に書かれている。翌年は帰国して、「京都、大阪を彷徨」とあり、その翌年には上京して、芥川・久米・瀧田樗陰等と知る、とある。そのとき二十一歳で、「朧ろ気に文学を志すかと見ゆ」とみずから記している。この若年時代の放浪生活が如何なるものであったか、正確には分らぬ。それ

は後世の伝記作家にまかせるより外仕方がない。

だが、宇野氏の文学を享受するためには、そのような伝記的知識はまったく必要ではない。その点では、日本の近代の女流作家のなかでも、氏の文学はもっとも自律性の濃いものである。それが、氏の文学の尊重すべき理由でもあるのだ。『源氏物語』を味わうのに、紫式部の寂居生活を精神分析したりすることが愚劣なのと、同じことである。

ヴァージニア・ウルフが、ブロンテ姉妹を比較して、シャーロットは筆を取るとき、雄弁と壮麗と情熱とを締めて、「私は愛する」「私は憎む」「私は悩む」と言うが、エミリには「私」は存在しない。彼女を創作に駆り立てる衝動は、悩みでも迫害でもない、と言っている。もしウルフが日本の小説を見たら、如何にそこに「私は」という言葉が情熱を籠めて言いつづけられて来たかに、驚くだろう。ことに、以上名前を挙げたような女流作家たちの発する「私は」という声は、迫害とそれへの反撥が、男たちよりもはるかになまなましい肉声によって表現されている。

林芙美子の放浪と、宇野千代の放浪と、そこにはもちろん、質の違いと、程度の違いとが認められたろう。だが当時、大正時代において、女性が「放浪」というとき、それがどんなに手きびしい試煉であったか、想像に難くないのである。林芙美子は、その放浪時代に食うや食わずの生活をしていたころの日々の心の記録を、小鳥のように歌うことから、文学的に出発したのである。

宇野氏において、訴えるべき苦悩が林より稀薄だったというわけではない。だが氏は、訴えたり歌ったり、自分のなま身をあらわに表現することを、初めから拒絶していた。直接的になまの肌ざわりを示すのでなく、スタイル（文体）への嗜好を当初から示していた。自分の感受性のすべてを投げ入れて、そこに一篇の自律的な小説世界を現前させようとした。小説の醍醐味と言ってもよいのである。

二

『色ざんげ』は宇野氏が書いたいちばん長い小説である。年譜によれば、氏はそのころ画家東郷青児と同棲していたが、これは東郷が彼女と相識る前に起した心中未遂事件による作品である。だからここには、私小説的要素はまったくなく、同じく東郷とのことを書いたらしい『未練』や『別れも愉し』などが私小説であるのと、はっきり区別される。

主人公の画家湯浅譲二は、フランスから帰って来て、七年間子供とともに夫の帰国を待っていた妻とのあいだに別れ話が起っている最中に、次々に三人の若い女性、高尾・つゆ子・とも子とのあいだに交渉を持ち、最後につゆ子と心中未遂に終る。その間の経緯を、譲二が物語る体にして書いたものである。それがつまり譲二の「色懺悔」となるわけだが、譲二がそれほど色道に徹した男だというわけではない。高尾もとも子も、据膳を差し出された形になった

に過ぎず、ただ一人つゆ子の場合にだけ彼は積極的な恋の俘になった。そして譲二をも含めて、それらの登場人物たちが、今日でも新鮮な印象を抱かせるというわけには行かない。

まず譲二は、ひところのある種の芸術家タイプを表現しえている。ニヒリストと自分で言っているが、そんな突きつめた思想を持っているわけではない。世俗的なことにおいて無能力であることが、芸術家としてむしろ純粋さの証しとして許されるような、そういう思想的雰囲気のもとで誕生しうるところの男である。彼はつゆ子に「君の気持はいつでもお伽噺の世界なんだね、さうぢやあないか、どうしても一緒に生きて行かうと思へばお伽噺の世界ばかりぢや駄目だぜ」などと言っているが、彼自身がお伽噺の世界の住人であるような頼りなさを持っている。「何とも言へぬ空虚な無生活的な考へ」に始終捉われ、いつも考えが「砂の上に絵を描いているような」定めなさを持っている。妻との問題も処理しきれないうちに、次々に三人の女と事を起すのは、結局彼の意志と決断の弱さに由来している。

彼は岡本かの子が『巴里祭』で書いた追放人（ニヒスパトリエ）、岸田国士が『落葉日記』で書いたデラシネ（根こぎにされたもの）と、同じような種族に属する。日本の国土との繋りを断たれて、足が宙に浮いている、精神の故郷を失ったもの、祖国喪失者である。日本にいて、外国にいるよりも見知らぬ国に住んでいるような気がしている。外国へ長く行っていたということだけが、原因なのではない。明治から数えて、三代目に当る世代の教養人の、一つの典型として現れ、それは大正末から昭和初年へかけては、一つの新型の日本人でもあった。そういった「根こぎにされた」知識人という観念を、宇野氏が獲たのは、フランス文学からであろう。だが譲二という人物は、今から見て、風俗史的興味を抱かせられることも事実である。それを氏は、彼の没常識的な行動において、一つの極限的な形で捉えようとした。

譲二のようなぐうたらな男に、こんなにも沢山の娘たちが惹かれるというのは、考えれば不思議なくらいだが、同じようなパターンを、宇野氏はもう一度『おはん』においても繰返している。譲二が当時の疑似天才的な芸術家の新型であったのに対して、女たち、ことに高尾は、当時のモダン・ガールと言われた種属に所属し、谷崎潤一郎氏の『痴人の愛』に描かれたナオミの系統である。その意味では彼女もまさしく当時の風俗から切り取られている。だが、ナオミのような白痴的存在ではない。

彼女は倨傲の固まりである。彼女は自分のエゴをしまって置くことを知らない。彼女は男に支配されることを欲しない。譲二をホテルの一室に追いこみ、がちゃりと扉の鍵を自分でかけてしまう。「驚いたな、あなたのしてることはそれは男のすることですよ」と譲二が言うと、「さうよ。今日はそれをあたしがするのよ、こんな場合に男がすることをあたしがするんだわ」と言う。そして男の前で、いき



馬込村での宇野千代（中央，30歳のころ）

なり着物を脱いで全裸となる。しかも、それによって掻き立てられた男の欲情に対しては、狂気のようになって抵抗する。そして、朝方に、眠っている彼女を残して、男が去ってしまった侮辱を許さない。

彼女の家が銀行のパニックで没落してしまうと、彼女の自意識はますます強烈になる。誘惑したうぶな少年が、彼女に棄てられて死んでしまっても、心を動かされない。友達のつゆ子が、自分が棄て去った譲二と結ばれようとする気配を察すると、自分と譲二とは恋人同士なのだと言って、つゆ子を威嚇する。だが、そのような一場の狂態が消え去ると、彼女はけろりとして、「とても上手に二人の人間になれる」二重人格者の標本のように、女実業家として着実な成功を収めて行く。

高尾の性格を描くに当って、作者はかなり図式的にがっちり額縁にはめこんで、想い描いているふしがある。それに較べると、とも子は曖昧であり、やや投げやりで、投げ出したところが見える。乱脈な家庭で育った高尾に対して、とも子は自由で暖い家庭に、甘やかされて育っている。譲二が彼女と結婚することは、彼女への愛ではなく、彼女の家庭が気に入ったからだ。彼女に恋人があることが分っても、そんなことで生活をぐらぐらさせたくないと思っているのは、フランス流の「洒落者の良人」としての物分りのよさからではなく、これまで足が地につかない生活者であった彼にこの家があこがれとなっていたからである。「なが い間波の中に揉まれてゐるやうな不安定な生活を続けて来た僕はやつと港についた水夫のやうな気持でこの煖炉の燃えてゐた家を愛してゐた」からである。

だが彼女は、自分がその画のファンである譲二の、世間的な名声にあこがれていたに過ぎなかった。そしてその虚栄の夢は、まず結婚式において裏切られ、その失望から、彼女はたちまち若い青年と駆落ちする。譲二の家への夢も、手前勝手な考えに過ぎなかったことが証明される。

やはりこの小説で軸になるのは、つゆ子との恋愛である。譲二が本当に執心したのは、結局つゆ子一人である。三人の娘たちのうち、もっとも厳格な家庭に育ち、もっとも理性的で、情熱は潜熱的であり、いつまでも燃えている。彼女は譲二の「愛情は信じるがそれを現実の世界に生かすことについては何も信じることが出来ない」という。言わば彼女は、いちばんよく相手を見抜いていたと言える。それ

でも相手を愛さないではいられないという、不毛の恋愛、無償の恋愛が、厭世的な彼女を死へ導いて行く。「何だかそのまま自然にうまく行くやうな気がし」ている、無意志、無気力、無責任の譲二は、彼女に引きずられただけのことである。

三人三様のタイプを書き分けた作者の文体は、いくらか伝統的な和文脈を感じさせるもので、情感的である。しかも、とめどもなく抒情的に流してしまった林芙美子の『放浪記』のような文体に対して、適度に理性的な圧えが利き、節度のある文体と言えよう。その中に、感情のひだのこまやかさを示した色気のある文体で、作者は一葉以後における女流の名文家だと言える。

これが、ただ情感的な文体ではなく、意外に知的、論理的な文体であることを、読者は気づくだろう。描写というべきものはほとんどなく、ひたすら叙述体で押して行き、極度に曖昧な部分を忌むところの文体である。こういう文体を、作者はフランスの心理小説から学んだのであろう。昭和二十八年に書かれた三好達治の『宇野千代さん』という短文に、三十年ほど前初めて会ったころの宇野氏は、スタンドバルヒの心酔者で、フランス文学をたいそう毛嫌いしていたという。ところが数年後には、机辺の書物はすべてフランス文学であった。私は、ド・ラファイエット夫人、ド・セヴィニエ夫人以来のフランス散文の優雅と節度とを、氏は身につけようとして、日本の女流作家には珍しい知性的な散文を確立しえた作家のように思われる。

だが、『色ざんげ』の文体は、書かれた当時の日本の、あまり根のない文化的風俗に汚染されていると思う。『痴人の愛』と同じように、『色ざんげ』も、素材的にあまりに安普請なのである。すぐ映画にでもなりそうな、素材的な部分が古びたのに対して、その文体は何時までも新鮮さを失わない。その不均衡が回復されるのは、戦後の『おはん』においてである。『おはん』に登場する男女の義理人情の世界が、あまりに古くさいために、それはかえって古びることがないのである。

三

『おはん』は宇野氏の、戦後におけるほとんど唯一の業績である。それは昭和二十二年に発表され初めて、三十二年に至ってようやく完結した。

舞台は中国筋のある小都会、おそらく岩国であるらしい。一人の男の綿々とした語りの形式を取っているが、言葉は阿波方言を加味してあるらしい。作者が聞書『人形師天狗屋久吉』を書いたとき、聞きなれ書きなれた語り口である。近松の世話物浄瑠璃に似たこの作品の世界を実現するために取った作者の配慮である。

この小説には時代の限定がない。大正あるいは昭和の何年と推定させるような記述は、注意深く排除されている。語り手である男は、三十二歳だと言うが、いやにひねてい

る。時代の限定がないことは、これが一場の夢物語でないかという印象さえ抱かせる。だが、『色ざんげ』があまりに強く時代の風俗に染められ、それが古びやすさの欠点となっていたことを思えば、『おはん』の超時代性は、作者の反省の結果とも思われるのである。

これは男が、二人の女の情愛にはさまれて、身の置きどころもないような思いをした述懐談である。女房のおはんは、彼が七年前におかよという町の芸妓になじみ、身上をつぶしてから、実家へ帰っている。彼は人の軒先で小商いの古手屋をはじめ、その後芸者屋をはじめたおかよの家から、毎日通っている。自分の小遣銭に足りないくらいの収入があるだけで、いわば女に食わしてもらっている、しがない暮しである。

彼はだれからも悪く思われたくない男である。女房のおはんには、夫はいまよその女と一緒にいるが、それは「よんどしようむないことがあつてのこと」で、しんから薄情な心があってのことではない、と思われていたい。おかよにもまた、実意のある男だと思われていたい。自分の意志を押し通すことができず、あちらへもこちらへも、よい加減なことを言って、決定的な瞬間を一寸延ばしに延ばしながら、とどのつまりは、絶体絶命の場へ追いこまれてしまう。『色ざんげ』の譲二と同じことである。女流作家が男を書くと、否定的人間像には行きとどいた観察眼を示すが、宇野氏もその例外ではない。



浜公園で。左から平林たい子，壺井栄，宇野千代，佐多稲子，吉屋信子

町で偶然おはんと逢ってから、彼女はときどき、家の者の眼を盗んで逢いに来るようになるが、彼女は「こないことして、また、あんたはんの家庭をめぐ（こわすの意）かと思うと、それが恐ろしうて」と、泣き出すような女である。おかよは反対に、「人の女房のけて一緒になつたのやけに、ときには済まんと思ふこともあるやろ」とたずねて見ると、「何でもない。暇とつて往んだ人が損したのや」と答えて、けろりとしているような女である。

彼はおかよの家を脱け出して、またおはんと一緒に家を持つ気になり、おはんを口説いて決心させる。決断力のない彼にとっては、これは大変な決心で、家が見つかったと聞くと、すぐにも家移りを決行しなければならぬということが、恐ろしくなる。今まで延ばして来た最後のどん詰りが来たのだと思うと、「ええ、何とでもええようになつたれ」と、何やら胆のすわるような気持である。夫婦同士が、しつこく附き纏う女を離れて駆落ちしなければならないという状況は、考えると滑稽であるが、その滑稽さを裏返しにして、作者は一篇の人情噺をしんみり語って聞かせるのである。

男でさんざん苦労を見る女の真情は、あらゆる女流作家が得意とするところだが、宇野氏はそれ以上に、ここではおはんという女性のまれな美しさを、描いて見せたのである。おはんのような深情は、外にもその例は多い。だが、おはんのような、人の言動をみじんも悪意に取ることのない女が、滅多にあろうとも思えない。日本の古い町女房の型であり、自己を主張するすべを知らず、わずかに自己をそれは近松が理想化したタイプの再現でもあった。

『おはん』は最初から古典であることをめざした小説のように思われる。これほど時代の風潮とかかわりのない小説もめずらしい。これは流行し変化してやまない今日の文壇に、奇蹟のように現れた一粒の真珠のような作品である。作者は戦後は、長い歳月をかけてこの一作を書いただけで、その外に何も書いていない。かつて作者は、「女をとり止める」ということが、心の内密のある願望の表現だと言ったが、今は「作家をとり止める」ことになってしまったのではなかろうか。あるいはまた、『おはん』のような季節外れの珍品は、作家をとり止めている作家にして初めて生み出すことのできる小説なのかも知れないのである。

東温市立図書館
平 19.11.22
1188705

現代文学大系41　岡本かの子　林芙美子　宇野千代集

昭和四十年二月十日初版第一刷発行
昭和四十五年二月十日初版第七刷発行

著者　岡本かの子　林芙美子　宇野千代

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号一〇一―九一
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装幀　真鍋博

本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
本文印刷　株式会社精興社
本文印刷　多田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所

CS 10141